



2005 年度

★第2回日韓大学生国際交流セミナー★

# 報 告 書

---

お茶の水女子大学国際教育センター  
同徳女子大学校外国語学部日本語専攻

# 第1章 セミナー概要

お茶の水女子大学国際教育センター

助教授 森 山 新

## 主催

日本側・お茶の水女子大学国際教育センター

韓国側・同徳女子大学校外国語学部日本語専攻

日時：2005年6月27日～7月6日

会場：お茶の水女子大学（東京都文京区）

去る6月27日から7月6日まで、日本・韓国、そして本学に在籍する留学生らが集い、「第2回日韓大学生国際交流セミナー」（主催：本学・国際教育センター、韓国・同徳女子大学外国語学部日本語専攻）が開催されました。このセミナーは、去年、韓国・ソウルで第1回が行われたことから、今回第2回目は本学での開催となりました。今回のテーマは「世界の目で見た日本文化」、参加した本学の学生は、「異文化交流実習」、「日本語教育演習」を受講する学部学生ら約40名で、韓国から来日した同徳女子大学の学生は応募者30名から選抜された12名の学生でした。韓国の学生はセミナー期間中、本学国際学生宿舎に滞在しました。

27日成田空港に韓国の学生団が到着、日本の学生代表らが空港で出迎えました。お台場を観光した後、夕方、本学大学食堂で歓迎会が行われました。歓迎会には第1回セミナー参加者も集い100名近くが集まりました。2日目は、「世界の目で見た日本文化」をテーマとしてシンポジウムが持たれ、本学大学院の卒業生でもある同徳の尹福姫先生が「韓国の学生が見た日本文化」、本学の菅聡子先生が「現代日本の〈女の子〉小説：〈かわいい〉ってどんなこと」をテーマにそれぞれ講演会が持たれ、100名もの学生が集いました。2日目午後及び3日目は日韓の各グループの研究発表で、「食」「大学生活」「女性」の3つのテーマに分かれ、日本、韓国、そして世界の文化について質の高い発表がなされました。4日目、5日目は日本・韓国、そして本学の留学生が混成グループを作り、文化探訪の旅に出かけました。6日目にはグループ活動の成果についての報告会、最終日前夜には送別会が持たれ、どちらの学生たちも別れを惜しむ姿が見られました。セミナー後の感想文を見ても、韓国の学生との交流を通じ、自らの国である日本の文化や韓国の文化に対する見識が深まった、同年代の学生と知り合い、それぞれの文化を語り合うことは有意義であった、韓国の学生の明るさや積極性、日本語の上手さに感動したなどの声が多数寄せられました。また、今回はお茶大で学ぶ各国の留学生も加わったことから、単に日韓両国の交流の次元を越え、国際的な交流の場となり、それがそれぞれの学生たちにより多くの学びを与えたように思われました。

最後に本セミナーに積極的にご参加くださった学生の皆さん、陰でセミナーの成功のためにご尽力くださった教職員、スタッフのみなさんに心から感謝を申し上げます。

## 1. スケジュール

本セミナーは、「異文化交流実習（コアクラスター・グローバル文化学科目、担当：佐々木泰子・森山新）」及び「日本語教育法演習（日本語教育基礎コース科目、担当：佐々木泰子・森山新）」の2つの授業に参加する学生が中心に約40名が集まり、4月以降、テーマを決定し、研究発表を準備した。一方韓国側は5月に参加者を募集、応募者30名の中から12名が選抜され、グループ別に研究発表を準備した。

月 日	内 容
4／26(火)	グループ編成、テーマ選定（担当：佐々木泰子、鈴木伸子）
5／10(火)	グループ編成、テーマ選定（担当：佐々木泰子、鈴木伸子）
5／11～6／13	研究及び発表準備期間
6／14(火)	研究発表リハーサル1（担当：森山新、鈴木伸子）
6／21(火)	研究発表リハーサル2（担当：森山新、鈴木伸子）
6／27(月)	韓国側学生来日、お台場観光（担当：森山新、尹福姫、水口里香） 歓迎会（司会：森山新） 於：大学食堂 韓国側学生入寮（国際学生宿舍）
6／28(火)	開講式・趣旨説明（担当：森山新） 講演会（司会：佐々木泰子） 於：文教1号館大会議室 ・「韓国の学生が見た日本文化」（同徳女子大学校助教授 尹福姫） ・「現代日本の〈女の子〉文化：〈かわいい〉ってどんなこと」（お茶の水女子大学助教授 菅聡子） シンポジウム 第1セッション「食」（司会：鈴木伸子） 於：文教1号館大会議室 ・「日本の伝統的な行事と食」（洪イヨン、森本麻子、宿澤麻利子） ・「日本の和菓子のルーツを探る」（陳雪萍、岡川真理子、西澤あゆみ） ・「菓子と人生」（佐藤陽香、黄怡君、竹内冬美、リス） ・「日本の家庭料理」（東麻衣子、Lucy Gibson、范丹明、長倉茉妃子） ・「味をまぜる：韓国の食文化」（史曷銀、鄭ピョル、鄭眞雅、崔寶璟）
6／29(水)	シンポジウム 第2セッション「大学生活」（司会：水口里香） 於：文教1号館大会議室 ・「日本と韓国の入試文化」（本多茜、川崎智央、崔寶允） ・「大学生の一日」（李少蓮、稲田明子、久保田霞） ・「データで見る日本・タイ・中国の大学生活」（姜燕、ケード、中濱良美、福山翠） ・「大学生生活のランチタイム」（田渕雅子、陳明淑、洪瑞英）

	・「楽しい大学と私たち」(全瑠姫、趙惠貞、卞智慧、金美貞)
	シンポジウム 第3セッション「女性」(司会：水口里香) 於：文教1号館大会議室
	・「日本の大学生の恋愛事情」(思勤、佐々木えりか、高原友美)
	・「着物と浴衣」(成セミ 永尾知子 脇坂真彩子)
	・「仮面の美」(引地多佳子・洪玉苓・實方鮎美)
	・「日本の女性と晩婚化：負け犬現象について」(金亮善、石原翠、黄正善、桂玉林)
	・「イヴの進化：恋愛・結婚・離婚・職業」(李敏姫、蔡恩恵、蔡ハウン、鄭妍珠)
	グループ活動計画・茶話会 於：文教1号館大会議室
6 / 30(木)	グループ活動1日目(野外活動)
7 / 1(金)	グループ活動2日目(野外活動)
7 / 2(土)	グループ活動報告会(司会：鈴木伸子) 於：共通1-304号室
7 / 3(日)	日韓交流(自由時間)
7 / 4(月)	東京見学1(韓国学生のみ)
7 / 5(火)	東京見学2(韓国学生のみ) 送別会(司会：平野美恵子) 於：大学食堂
7 / 6(水)	韓国側学生、退寮・帰国の途へ

## 2. 参 加 者

### 日本側参加者

宿澤麻利子	文教・言語文化学科1	永尾 知子	生活・人間生活学科3
范 丹明	文教・人文科学科1	高原 友美	生活・人間生活学科3
長倉茉妃子	文教・芸術・表現行動学科1	竹内 冬美	生活・人間生活学科3
田淵 雅子	文教・芸術・表現行動学科1	實方 鮎美	生活・人間生活学科3
姜 燕	文教・人間社会科学科2	洪 伊瑩	日研究生
西澤あゆみ	文教・人間社会科学科2	崔 寶允	日研究生
川崎 智央	文教・言語文化学科2	洪 瑞英	日研究生
稲田 明子	文教・人文科学科2	ルーシー ギブソン	日研究生
佐々木えりか	文教・人文科学科3	ケード	日研究生
脇坂真彩子	文教・人文科学科3	金 亮善	日研究生
成 セミ	文教・言語文化学科3	リス	日研究生
石原 翠	文教・言語文化学科4	黄 怡君	研究生



東 麻衣子	文教・言語文化学科 4	李 少蓮	研究生
佐藤 陽香	文教・人文科学学科 4	洪 玉苓	研究生
中濱 良美	理・物理学科 1	陳 雪萍	研究生
森本 麻子	理・物理学科 1	引地多佳子	研究生
本多 茜	生活・人間生活学科 2	陳 明淑	研究生
久保田 霞	生活・人間生活学科 2	桂 玉林	研究生
福山 翠	生活・人間生活学科 3	思 勤	科目等履修生
岡川真理子	生活・人間生活学科 3	黃 正善	科目等履修生

### 韓国側参加者

史 暁銀	外国語・日本語 4	卞 智慧	外国語・日本語 4
鄭 ピョル	人文・国際経営 4	金 美貞	外国語・日本語 3
鄭 眞雅	人文・文献情報 3	李 敏姫	外国語・日本語 3
崔 寶璟	外国語・日本語 4	蔡 恩恵	外国語・日本語 3
全 瑠姫	外国語・日本語 3	蔡 ハウン	外国語・日本語 2
趙 惠貞	外国語・日本語 3	鄭 妍珠	外国語・日本語 4

### 3. スタッフ

森山 新	本学・国際教育センター・助教授
佐々木泰子	本学・国際教育センター・センター長
鈴木 伸子	本学・国際教育センター・非常勤講師
水口 里香	本学・国際教育センター・非常勤講師
尹 福姫	同徳女子大学校・外国語学部日本語専攻・助教授

## 第2章 シンポジウム 講演会



### 韓国の若者からみた日本文化

韓国同徳女子大学日本語専攻

助教授 尹 福 姫

#### はじめに

本日、私がお話する予定の講演は、「世界の中の日本文化」という大きなテーマのもと、「韓国の若者からみた日本文化」というタイトルにしてみました。私は日本文化の専門家でもないし、だからといって最近流行っている「韓流」、つまり韓国の大衆文化についてもよくわかっておりませんので、どんな話をしたらいいか、少々悩みました。

私の大学生の頃は、最近の若者のように自由に日本文化、しかも日本の大衆文化に接することができるなんて、とんでもない話でした。当時、日本の歌は禁止曲になっていまして、日本語科の学生として隠れて日本の歌を習ったり、歌ったりする時は肩身の狭い思いをしました。

また日本映画は日本文化院(広報館)を訪ねて週に一回、「男はつらいよ」を見るのがせいぜいのことでした。今のように、映画や歌を通して、あるいは漫画などを読みながら日本語を習ったりできる時代ではありませんでした。

今私は同徳女子大学で、4年生の「映像日本語演習」という授業を受け持っていますが、ここでは自由に日本の映画やアニメを見ながら日本語の表現を習ったり、映画の背景になっている日本文化、日本事情について習っています。学生たちは学校の語学センターからビデオを借りたり、インターネットを通して資料を集めて発表し、学生同士で討論しあったりしています。時々教師として私は、20数年前の自分の学生の頃を思い出して、世の中こんなに変わったな、と不思議に思ったりします。たぶん日本も韓国と事情は違ったと思いますが、80年代の前までは一部の人々を除けば韓国と韓国文化について、さほどの関心はなかったと思います。

1988年に韓国でオリンピックが開催されてから韓国の発展ぶりが世界各国に知られました。当時日本でも多くの人々が韓国についての新しい情報をたくさん得ることができたと思いますが、翌年の89年に私は東京のある小学校の5年の社会科の時間に招待されたことがあります。私だけではなく世界各国から多くの留学生が招待されて自国について紹介し、自由に質問を受ける時間がありましたが、ある男子生徒が手をあげて私に質問をしました。彼の質問は「韓国にも自動車がありますか」、「電話がありますか」ということから始まりました。当時は本当にショックを受けましたが、とにかく当時と比べると比較になれないくらい、今の韓国は日本で

よく知られています。

また、韓国の大衆文化は日本はもちろんホンコン、台湾、中国などで「韓流」ということばで呼ばれ、最近非常に人気を得ています。

## 「韓流」と「日流」

「韓流」という言葉は現在、韓国、日本、中国で同時に使われています。これは韓国で造られたことばではありません。英語では「Korean wave」と言いますが、他の外来語のように英語圏から来たことばでもありません。ご存じのように「韓」は「韓国」のことを意味し、「流」は「流れる」の意味で、漢字の本場である中国から生まれたことばです。より正確には1999年の11月2日に「北京青年報」に初めて紹介されたことばで、韓国の大衆文化及び韓国の芸能人に熱狂する中国の若者たちを指す新造語です。

日本では「冬のソナタ」というドラマが韓流ブームに火をつけたと思いますが、映画、ドラマ、音楽などの韓国の大衆文化はホンコン、中国、日本、東南アジアで韓流ブームを造成していますし、その影響力は中央アジアにまで拡散しています。韓国文化がアジア大陸の全域にわたって共有されるというのは一つの歴史的な事件であるかも知れません。これによって各国での韓国製品の人気上昇しているのはもちろん、韓国の衣食住の生活文化までがアジアに伝わっているのが現状です。

韓流は韓国において今や一つの文化産業になりました。韓流文化産業の主流をなしているドラマと映画の輸出総額は2000年以来着々と増加して、映画の場合、2001年には1120万ドル、2002年には1500万ドル、2003年には3100万ドルを、そして下の注の表にはまだ統計結果が乗っていませんが、2004年には6000万ドルにまで、急成長しています<sup>1</sup>。

ドラマは2003年には4200万ドルであったのが、2004年に7500万ドルを輸出して映画よりも輸出額が大きいです。こうした韓流文化産業は最近の韓国内における全体的な文化産業の不況を埋めつくしてくれる経済的動因になっています。果たして韓流の実体は何であり、なぜアジアの人々にこれほどまで強烈にアピールするのでしょうか。これに関する研究が韓国内で最近活潑に行われています。

ところで、きょう私がこれからしようとする話は、このようなアジア各国で流行っている韓

---

<sup>1</sup> 韓国映画の輸出実績の変化

(単位：ドル)

年 度	1999	2000	2001	2002	2003
輸 出 額	5,969,219	7,053,745	11,249,573	14,952,089	30,979,000
増 加 率		18%	59%	33%	107%
作 品 数	75	38	102	133	164
作品当り価格	79,590	185,625	110,289	112,422	188,896

出典：「韓国映画の動向と展望」4月号（映画振興委員会、16p）

流ブームについてではなく、最近韓国の大学生を含む若者たちの間で静かに流れている「日流」についてです。

「日流」ということばはまだ「韓流」ほど、実際に韓国人の間で通用することばではありませんが、もちろん韓流に相対する概念として現れた、最近よく耳にすることばであります。最近「波のように押し寄せる日本文化」という表現が韓国ではよく言われていますが、まさに押し寄せる日本文化の波の中で10代、20代を中心に部分的に「日本マニア」が増えているのが現実です。彼らの関心は日本の漫画、アニメ、映画、ドラマ、歌など、多様な分野に渡っています。彼らを中心に日流は静かに広がりつつあります。

こうした日流現象の一例になるかと思いますが、若者の町である新村や明洞、江南などでは最近お店の看板に日本語を直接使用する店が急速に増えています。単純に日本語を韓国語に直した看板ではなく、日本語そのものを使用しているのです。今までは食べ物と関係のある日本語がほとんどでして、たとえば、「とんかつ」、「すし」、「うどん」、「カレー」、「ラーメン」などの日本語を直接看板に使用するのはもちろん、のれんまで下げて「今は営業中」、つまり日本の食べ物を今売っている、とPRする店も増えています。時々間違った日本語を書いてしまつて「うどん」が「うとん」になったり、「カレー」が「カレ」になったり、「ラーメン」が「ラーメソ」になったりして、笑ってしまいます。

また、日本で通用する漢字をそのまま韓国式に読んで、韓国では意味の曖昧な漢字がそのまま流通していますが、たいした拒否感なく人々に受け止められている現象もおもしろいです。たとえば、「金壽司」「尹壽司」のように店のオーナーの名字を入れた寿司屋さんが増えていますが、以前、韓国では「壽司」という漢字はいわゆる「お寿司」（韓国では「초밥」と言います）の意味では決して使われていませんでした。少々大袈裟ではありますが、これからは「초밥」という韓国語がなくなるかも知れません。

話は変りまして、1997年に「かけはし」という名前で若者のよく集まる場所にオープンしたカフェーがありますが、ここは韓日両国の民間交流を目的で出来たお店で、韓国人はもちろん、韓国に留学に来ている日本人の留学生や在日韓国人などのよく集まるお店だそうです。私はまだ行った事はありませんが、最近韓流ブームに乗って日本からの観光客もよく立ち寄る名所となりました。ここを訪ねる日本人は韓国人の客を通して韓国語と韓国文化を、韓国人の客は彼らを通して逆に、生きた日本語と日本文化を学ぶことができ、お互いにとって人気のある場所となりました。

こうした韓国内における日流に火をつけたきっかけになったのが1998年以来推進されてきた、韓国政府による日本の大衆文化開放に関する方針です。次に日本の大衆文化の開放がどのような段階を経て行われたかについて、参考までに表で示してみました。

1998 10 08	金大中大統領「恐れを持たずに挑むものの段階的に」という日本大衆文化の開放方針を明言
1998 10 20 (第1次)	韓日共作映画や日本俳優の出演した韓国映画、4 大国際映画祭の授賞作、日本語版漫画とコミック誌

1999 09 02 (第2次)	政府が公認する国際映画祭（70余個）の受賞作、「全体観覧可」等級の映画（アニメは除く）、規模2000席以下の室内での一般歌手の公演
2000 06 27 (第3次)	「15歳入場可」等級の映画、国際映画祭で受賞した劇場用アニメ、一般歌手の公演（規模に制限なし）、日本語歌唱を除く残りのアルバム、ゲーム機用ビデオゲームを除くゲームソフト（PCゲームやオンラインゲームなど）
2001 07 12	政府、日本の歴史教科書問題や小泉総理の靖国神社参拝問題に対する抗議として「日本大衆文化の追加開放を無期限中断」と発表
2003 06 07	盧武鉉大統領「文化交流活性化のため日本大衆文化開放を拡大する」と明言
2003 09 16 (第4次)	映画、アルバム、ゲーム分野の完全開放（放送と劇場用アニメは補完措置をまとめた後、2004年1月1日に同時開放）

## 日本文化と韓国の若者

表に示されたように、日本の大衆文化は1998年の10月から公式的に韓国に紹介されたこととなりますが、実は1998年以前から日本の文化は韓国内に急速に広がっていました。私は日本での勉強を終えて1997年に帰国をしましたが、ある日、地下鉄に乗ったら一人の女性が村上春樹の「ノルウェイの森」の翻訳本を読んでいるのを見かけてびっくりしました。川端康成でもなく、三島由紀夫でもない、村上の作品が翻訳されていたなんて、驚きました。というのも高校の時、自家にあった世界文学全集の中に、唯一に入っていた日本の作品が川端の「雪国」と三島の「金閣寺」だったからです。

何日か経って本屋へ行ってみましたら、村上春樹はもちろん、山田詠美、吉本ばなな、丸山健二などの作品の翻訳がずらりと立ち並んでいて、彼らはすでに着実に韓国の読者を確保していたわけです。今日を生きる韓国の若者たちは文化開放のずっと前からすでに自分の関心分野を通じて各自の日本に慣れていたわけです。

日本の大衆文化が開放される前までの日本の作家たちの人気について、韓国内の一部では文化侵略に喩える見方もありますが、日本文化の流入に対して「浸透」または「侵略」ということばで表現したがる私たち韓国人の言語習慣から、また日本文化に対する無条件的な警戒心と反感から、もう自由になる時が来たのではないかと思います。文化開放を前後に、韓国内では実に様々な論争がありました。一方では文化界と青少年に及ぼす影響や経済に及ぼす悪い影響にかかわる否定的な見方がありましたし、もう一方では日本文化の開放は逆らうことのできない時代の流れであり、却って質の高い文化を收容することのできる良い機会だと見る見方の、相反した主張がありました。しかし、日本の文化が完全に開放された現時点から見ますと、こうした論争自体があまりふさわしくなかったと見る見方が圧倒的です。なぜなら、今だに多くの部分で自由でない大人たちとは違って、今日の我々韓国の若者たちはインターネットなどを利用した自由な情報吸収を通して、日本文化に開かれた姿勢で臨んでいるからです。

今現在、最も日流が実感できる場所として私は大衆音楽アルバムとDVDの売り場を挙げることができると思います。韓国の代表的な大型書店である「教保文庫」には、昨年J-POP

コーナとDVDの専門コーナが設けられました。ここでは昨年の7月6日に発売されたSMA Pのアルバムが、発売されて一週間目に100枚以上の売り上げを記録したそうです。これは音楽アルバムがあまり売れない韓国ではとてもめずらしい現象と言えます。

このような日流現象は主に1020、つまり10代、20代を中心に広がっていますが、必ずしも彼らに限った現象でもありません。10代や20代の子どもをもった親の世代も子どもたちの影響を受けたせいか、自然に日本に対する関心が高まりつつあります。親の世代はまず、歌や映画などを通してよりは日本の食べ物を通して、日本文化に接する機会が多いようです。最近の韓国の百貨店ではお寿司、納豆、うめぼしなどの日本食はもちろん、その材料までも自由に購入することができます。

ところが、最近韓国には前から日本の社会が抱えている様々な問題、たとえば、いじめ、自殺、引き籠もりなどの問題がそのまま再現される傾向が見えます。

あまり自慢したくない話ですが、先月発表された統計によりますと、韓国の自殺率は2004年現在、日本に次いで世界4位を記録しました。これは2003年の統計をもとにした記録で、2002年から2003年にかけて起きた自殺は前の年に比べ、増加率の面でOECD国家のうち、最大増加率だそうです。最近是有名な社会人や芸能人の自殺が報道されてから、特に中学生や高校生、さらには小学生の自殺が目立つようになりました。自殺の原因は年齢によって違いますが、青少年の自殺は学校でのいじめや成績の落ち込みによるストレスが原因であることが多いようです。韓国は日本以上に大学入試が厳しく、「入試地獄」という言葉があるほどです。

また、引き籠もりが最近の日本の社会問題になっているという、NHKの衛星放送を何年前か見たことがあります。これは日本にだけある特異な現象であるとばかり思っていましたら、韓国でも最近この引き籠もり現象が現れるようになりました。

留学生の頃、私は日本のいじめについて自分なりに思った事をまとめて、どこかでお話をした事があります。その内容を要約してみますと、「韓国にはいじめがない。いじめられる前に両親や教師と相談をして助けを求めるから、日本でのような形のいじめは絶対ありえない」と断言しましたが、今になってみると私は嘘をついた結果になりました。学校でのいじめ、職場でのいじめ、……。様々な形のいじめが最近話題になっています。つい先週は同僚にいじめられた一人の若い兵士が銃を乱射して、8名の若い兵士が死亡する衝撃的な事件が発生しました。今や韓国では「いじめ」という日本語がそのまま通用しています。

このような若者の社会で起きている様々な問題を、ただ単に日本文化の影響であると見たら大間違いです。こうした現象はたいてい、現代の日本社会、あるいは現代の韓国社会が孕んでいる様々な問題点が複合して引き起こされた現象であると思います。消費文化の最先端を生きる若者たちの姿、情報環境の急激は変化に起因する情報行動の変化、これに伴う意識の変化、規範感覚の変化、また個体化現象などが韓国と日本に共通する現代社会の問題点として指摘されるでしょう。

## おわりに

文化の国際化は今日、世界的な傾向です。全世界どこであろうと、インターネットを通じて情報吸収が可能になったこの時期、文化の完全な閉鎖は不可能です。西欧の文化は、それが西欧のものであるからではなく、それなりの必然性—たとえば、それが先進国のものであるとする、そのためより高いレベルの文化に接したいと願う私たちの知的欲求を充たしてくれるという必然性—を持って我々と出会うように、今日の日本文化もやはり日本のものであるからではなく、先進国のそれとして、または我々よりある意味では条件のよい隣の国のものとして、流入されているという事実をまず確認しておくべきです。

これからもおもしろさと感動(これらは大衆文化が消費されるための必需条件と思います)を追求する韓国の若者たちは日本の文化に心を奪われるでしょう。それが文学であろうと、漫画であろうと、映画や歌であろうと、とにかく日本の文化が韓国の若者に引き続きおもしろさと感動を与える限り、韓国の若者たちは日本文化を追い求めるでしょう。逆に日本の文化からこれ以上おもしろさと感動を得ることができなくなったら、彼らは未練なくそれに対する関心を捨てると思います。

文化開放をきっかけに、これからの韓国と日本は、より一層近くなるべきです。これまで「近くて遠い国」という表現がよく言われましたが、今後は互いの文化、社会間の深い交流を通して距離的な近さだけではなく、心理的にも近さを感じる両国になってほしいです。

世間では政治家たちが韓日関係をだめにすると言ったりしますが、日本語を教える立場の教師として、「それは本当かも知れない」と、たまに思う時があります。韓日関係はまだまだとてもデリケートな面がありまして、歴史教科書問題などが生じる度に、大学で日本語を専攻として選ぶ学生の数が一段と減ってしまうような気がします。私供の同徳女子大学は現在学部制になっていまして、1年の終わりに学科を選ぶことになっています。定員は60名ですが、定員の150%までは学生を受け入れる事ができます。今まではほとんど150%、つまり90名の学生が入りましたが、今年初めて定員にも達しませんでした。もちろん後日、人数が再調整され、70あまりの学生が入りましたが、学科で分析した結果としては、やはりいろいろな原因が予想される中で、最近の韓日関係をめぐる否定的な報道も原因の一つではないかと思います。

今同徳の話をしました、ついでに韓国における各大学の日本関連学科の設置現況について若干付け加えて、きょうの私の話を終わりにしたいと思います。

1960年代の2個所の大学を先頭に、70年代の半ばから急速に増加して80年代まで48個所の大学に日本語学科が設けられ、2000年以降も引き続き新設され、現在私が調査したところによりますと、全国104の大学に110の日本関連学科が設置されています。こうした学科では日本語を中心に、日本との国際関係、通商貿易などを教える学科も多いようです。

これから将来は日本の大衆文化はもちろんのこと、より体系的に日本について研究していかなければなりません。そのために各大学の日本関連学科の活躍が期待されるところです。今よりもっと多くの学科が設けられる必要性に先立って、まずすでに存在している学科を中心に内実を期する必要があると思います。

今後は韓国と日本が両国の大衆文化の交流にとどまることなく、互いの有益な文化を積極的に受け入れるべきです。また自国の優秀な伝統文化と現代文化を相手の国に紹介し、それによって一層自国の文化を繁栄させ、さらに人類文化の進歩にまで貢献できる土台を築いてほしいという願いを込めて本日の私の講演を終わりに致します。ありがとうございました。





## 現代日本の〈女の子〉小説 －「かわいい」ってどんなこと？－

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科  
助教授 菅 聡 子

### はじめに

現在の、とくに若い女性たちの文化を考える際のキーワードの一つに「かわいい」という言葉がある。この「かわいい」という言葉は、だいたい1970年代以降の、若い女性たちのサブカルチャーの中心を作っていただけではなく、彼女たち自身の「内面」、「こころ」や、ふるまい、生き方といったものにも大きな影響を持つことになった。たとえば、辞書には「かわいい」の語意として、「①あわれで、人の同情をさそうようなさまである。かわいそうだ。ふびんだ。いたわしい。②心がひかれて、放っておけない。大切にしたいという気持ちである。深く愛し、大事にしたいさまである。いとしい。③愛すべきさまである。かわいらしい。イ（若い女性や子どもの、顔や姿が）愛らしく、魅力がある。ロ（子どものように）邪心がなく、殊勝なさまである。いじらしい。④（物や形が）好ましく小さい。⑤とるに足りない。あわれむべきさまである。やや侮蔑を含んでいう。」（『日本国語大事典』第二版、小学館、2001）が記載されている。けれども、現在、日本人、とくに若い世代の女性たちは、もっと広い意味で「かわいい」という言葉を使う。たとえば、学生たちはしばしば（相手が男性教員であっても）「〇〇先生かわい〜い」というようなことを口にするが、それはその教員を軽くみていたり、自分よりも下にみていることをあらわすわけではない。教員を尊敬していることと、けれども、その先生のことを「かわいい！」ということはけっして矛盾しない。このような「かわいい」という言葉はどのあたりから日本語にあらわれるようになったのだろうか。そのことを、現代の〈女の子〉文化の流れのなかで紹介していきたいと思う。

なお、ここで「女の子」という語を用いているのは、川崎賢子氏や横川寿美子氏等、多くの少女文化研究が明らかにしてきたように、「少女」という語がすぐれて抽象的な概念であり、かつ明治近代以降、意識的に立ち上げられた領域（あるいは階級）であるという点に留意してのことである。そこで、ここでは私たちが日常生活のなかで一般に用いる「女の子」を採用することとした。

### 現代女性文学と少女まんが

韓国の大学で近代日本文学を教えていらっしゃる先生から、韓国の女子大生たちに人気がある作家は、男性ではやはり村上春樹、女性ではよしもとばななや山田詠美、それから江國香織

である、ということをやがったことがある。

これは私にはとても興味深く感じられた。なぜなら、よしもとばななや江國香織の作品は、表現はライトで淡いやさしい感じの文章だが、内容はラディカルで、伝統的な家族観、家族に対する考え方を解体し、新しい関係のあり方を示すようなものだからだ。一方、山田詠美は、表面的にはラディカルだが、内容はとても保守的で、むしろ伝統的な人間関係を大切にする、そのような傾向の強い作家である。両者はその表層と内実が交差するような対照的な作家なのだが、とくに、江國やばななの人気が何に由来するものなのか、その点にとくに興味を引かれた。私の印象では、日本社会に比べて、韓国の人々は血縁に基づく家族の絆をととても大切にしている。そのような韓国の女性たちが、よしもとばななや江國香織のような、家族を解体していくような作品をどのように受け止めているのだろうか。この点については、いずれ機会があれば、韓国の学生たちと語り合ってみたいと思っている。

よしもとばななのデビュー作『キッチン』が書かれたのは1987年で、もう20年近く前のことになる。現在の日本の女子大生たちがこの作品を読んでも、そんなに新しいという印象は受けないだろうし、むしろごく当たり前の内容だ、と感じるかもしれない。しかしこの作品は、発表当時においてはたしかに新しいものだった。『キッチン』をはじめとするよしもとばなな作品に共通する特徴を簡単にまとめるなら、伝統的な家をめぐる考え方、すなわち家父長制度的な家のあり方を解体していること、血縁とは関係のない新しい家族の形を提出していること、そして、トランスジェンダー、またジェンダーロールの越境がなされていることがあげられる。また『キッチン』には見られないが、その後に書かれた作品には様々な形で近親相姦的な恋愛を書いている。これも、見方を変えれば、家族関係における最大のタブーに挑戦しているという点で、やはり、伝統的な家族観への挑戦といえるだろう。

このようなばななの作品は、男性の、それもかなり年長の評論家たちからも高く評価された。しかし、実際のばななの読者、つまり10代から20代ぐらいの若い女性たちにとっては、実はこれらの特徴はまったく珍しいものではなかった。なぜなら、ばななの作品に見られるこれらの特徴は、若い女性読者たちのもう一つの文化、少女マンガの世界においてはばななの登場よりもずっと前から、さまざまに描かれてきたことだったからだ。というよりも、よしもとばななの方が、自分の愛読した少女マンガの影響を強くうけて、小説を書いていた。ばなな自身は、漫画家・岩館真理子のファンだったことを語っているが、それ以外にも、たとえば『哀しい予感』に描かれた叔母と主人公との関係性などは、樹村みのりがすでに描いてきたものだったし、あるいは逆に『キッチン』のテーマのひとつ、「食」つまり「食べること」と家族の関係性は、大島弓子の『ダイエット』というマンガで、より鮮明な問題意識をもって描かれることになる。

こうしてみると、90年代以降の現代女性文学の流れを考えると、さかのぼるべきは、どのような系譜なのだろうか。それは、文学史の教科書に出てくる、主に男性作家によるいわゆるカノンの流れとはまったく別のものだ。そこで、まず、戦後からの〈女の子〉小説の系譜を見てみることにしよう。それから、とくに70年代以降の少女マンガがどのような〈女の子〉の内面を語っているのか、そしてそれが、現在にいたるまでの日本の女性たちにとってどんな意味を持ったのか、考えてみたい。

## 〈女の子〉小説の系譜

〈女の子〉小説の原点として、1910年代前後、つまり大正時代ぐらいから多く書かれた「少女小説」をみることができる。この少女小説の元祖は、吉屋信子の『花物語』という作品集である。この吉屋信子の大ファンで、その後自分も小説を書き始めた、という女性作家は多く、たとえば、田辺聖子などもその一人だ。当時の日本中の女の子たちが熱狂して読んだ作品である。その後、この流れは戦後まで続くのだが、だんだん衰退していく。

ちょうどそのころ、つまり戦後の日本人の女の子たちが出会ったのが、モンゴメリの『赤毛のアン』だった。日本人女性は、世界中で一番アンシリーズを読んでいる人達だと言われている。実際、この作品の舞台であるカナダの女性などは、このアンシリーズはもう古いと言って読まないらしいが、日本では今でも、このシリーズ10冊すべてを読んでいる女性がたくさんいる。なぜ日本人女性はこんなにアンが好きなのか、という点については、心理学者の小倉千加子氏に詳しい分析がある。そのほか、海外の翻訳少女小説として、オルコットの『若草物語』、ウェブスターの『あしながおじさん』などが日本の〈女の子〉たちの読書の定番である。ちなみに、これらの作品についてはアンよりもずっと早く、明治時代から翻訳されている。

1970年代にはいと、現在の少女マンガ文化の基礎が築かれる。ここには大きく二つの流れがあって、「24年組」と呼ばれる萩尾望都・竹宮恵子・山岸涼子らといった、いまやカリスマ的な存在となっている作家たちによって開かれた、非常にラディカルで哲学的な問題意識、また時代の先を行くジェンダー意識などを描いた作品の流れがその一つめである。サブカルチャーとしての少女マンガがアカデミックに研究される際に、その対象となるのは多くはこちらの流れである。

しかし、「かわいい」というキーワードと関係するのはもう一つの流れの方だ。これは、当時、『りぼん』という少女マンガ誌で活躍した、陸奥A子、田淵由美子、太刀掛秀子といった漫画家たちが開いた世界で、評論家の大塚英志氏はこれを「乙女チック」マンガと呼んでいる。この「乙女チック」派が書いたマンガこそが「かわいい」という価値観を〈女の子〉たちに広めることになった。

「乙女チック」派のまんがに登場するヒロインは、いずれも、恥ずかしがり屋で、平凡で、とくに頭がいいわけでもないし、もちろん決して華やかな美人ではない。その「絵柄」、彼女たちのビジュアルはまさに「かわいい」。そしてそれは、同時に「かわいい」内面を伴っている。大塚英志氏は次のように指摘している。

「かわいい」の根源は、「顔はゆし」、つまりこっちが赤面するぐらいみちやいられないほどあぶなっかしい、という意味である。(中略) みっともなく、未熟で、小さなわたし。それはまるで陸奥A子や田淵由美子の少女まんがに書かれた「わたし」と同じだ。これら「乙女チック」少女まんがは、そんな「稚拙」なものとしての「わたし」の「心や魂」をそのままいいのだ、と肯定する言説である。それは作中の王子様によって発せられたが、「乙女チック」少女まんがは、そういう「稚拙」な「わたし」を女性たちが全肯定する表現でもあっ

た。

(大塚英志『「彼女たち」の連合赤軍』角川文庫、2001)

大塚英志氏が述べるように、「乙女チック」派が描いたのは、平凡でだめだけど「かわいい」私、でもそんな私のままでいいんだ、という〈女の子〉にとっての自己肯定のマンガだった。言い換えれば、〈女の子〉たちは、平凡で目立たなくてもいいんだよ、あなたはいまのあなたのままでいいんだよ、がんばって背伸びしなくてもいいんだよ、だってそんなあなたたちが「かわいい」んだもん、と言って貰ったわけだ。

同じくこの70年代に、「かわいい」をキーワードとする〈女の子〉文化にとって大きな出来事が起こる。それは、1974年に、サンリオがハローキティとパティ&ジミーというキャラクターを開発したことだ。現在でも絶大な人気を誇るキティちゃんが生まれたのがこの74年なのである。サンリオの73年の売り上げは18億7000万円だったが、キティちゃんの登場をはさんで、その後の5年間でサンリオの売り上げは300億円を超えるまでに成長した。これは「サンリオの奇跡」と呼ばれている。このころから〈女の子〉にとっての文房具や雑貨などは「ファンシーグッズ」と呼ばれるようになる。この文房具や食器などはそもそも実用品であるはずだが、キティちゃんグッズがそうであるように、このような「ファンシーグッズ」は、その実用性ではなく「かわいさ」を最大の商品価値として展開されている。

ちなみに、このキティちゃんの「かわいさ」が、記号化されたものであることは留意しておく必要があるだろう。キティちゃんは誰がみても一般的に「かわいい」。キティちゃんのデザインは巧みに計算されたもので、日本人がみて、平均的に「かわいい」と思うように作られている。ほぼ二等身で、丸みを帯びていて、目がはなれている。かつ、口がかかれていないのがポイントである。口が存在すると、具体的な表情が生まれ、見る側の心情投影の幅をせばめる。キティちゃんには口がない。シンプルなデザインに徹し、細部は書かれていない。一応、キティちゃんは猫だが、まったくリアルではない。

ともあれ、こうして〈女の子〉の内面にも、そして外側をとりまくモノにも「かわいい」が氾濫するようになった。では、このあと、「かわいい」はどこへ向かうのだろうか。

## 「かわいい」の行方

大塚英志氏をはじめとして、多くの評論家は、この「かわいい」ブームは80年代に入り、フェミニズムの台頭とともにほろびていった、と言うと強すぎるなら、その価値を下げていった、と言う。たしかに、80年代になって現れた松田聖子というスーパーアイドルは、その初期段階においては、まさに「かわいい」ことを演じるかたちで登場したのだったが、そのあり方は「かわいこぶりっこ」と女性たちから呼ばれ、お約束どおりの「かわいい」はここでパロディ化されてしまう。ちなみに、松田聖子はまさに「かわいい」を演じてみせたにすぎず、実はたいへんしたたかな女性で、その後は「かわいこぶりっこ」をぬぎすて、自己の欲望に正直に生き、現在もたくましく活動が続けている。「かわいこぶりっこ」の頃は男性のためのアイドルだった

が、「かわいこぶりっこ」をやめ、自己の欲望のままに自由にわがままに生き始めてからは圧倒的に女性の支持を得るようになり、いまでもそのファンの大半は女性である。

80年代の日本はいわゆるバブルの時代であり、女性たちの消費活動もさかんになった。「仕事に生きるキャリアウーマン」がトレンド・ドラマに登場するのもこのころだ。80年代のキーワードは「欲望」であると言われるが、それは、バブルの崩壊とともに、大きな疲労感だけを残すことになり、80年代から90年代にかけてのキーワードは「自分探し」と「癒し」へと移っていく。このなかで若い世代の読者を獲得するのが村上春樹とよしもとばななだったのだが、この点についてはまた別の機会にゆずろう。

さて、このようにみてくると、「かわいい」はある一時期のモードであったように感じられるが、そうではない。70年代の「乙女ちっく」マンガのテイストは、今度は小説の世界へと引き継がれる。80年代にもっともさかんに書かれる、「コバルト系」作品がそれである。これは、100%〈女の子〉をターゲットとして創刊された集英社の「コバルト文庫」に代表される、最初から読者を〈女の子〉に限定して書かれた作品群のことである。ちなみに、韓国にも「コバルト文庫」にあたるようなレーベル、つまり書き手も女性、読者も〈女の子〉という〈女の子〉限定作品があるのだろうか？そのような作品の内容、つまり〈女の子〉たちが何を考え、何をすてきだと思っているのか、どんな自分になりたいと思っていると描かれているのか、その韓日の比較をおこなってみると、現代の韓日の女性を考えるうえで興味深いと思うのだが。

韓国からの留学生（大学院生）に聞いてみると、韓国の女性はいつまでも「かわいい」と言われたいとは思っていないと言う。「かわいい」と言われるよりは「きれいだ」と言われたいし、そもそも「かわいい」はペットのような、つまりキティちゃんみたいなものに対して使う言葉だ。だから、年齢的にも大人になっているのに、いつまでも「かわいい」と呼ばれるのは嬉しいことではないと言う。一方、これは私の考えではあるが、日本の女性たちはいつまでも「かわいい」と呼ばれたがっている、という一面を持っているように思える。そのことは、+の面と-の面と、ふたつの意味を持っていると思う。そこで、あらためて、この「かわいい」という言葉について考えてみよう。

「かわいい」という語には二面性がある。一つは従来の（辞書的な）用法で、社会において上位にあるものが下位にあるものに対してなげかける言葉としての「かわいい」である。現実の社会における力関係を考えれば、女性が「かわいい」と言われたがることは、伝統的な男性による支配関係へと収まってしまうことになる。これに対して、70年代以降、〈女の子〉たちによって開発されてきた新しい「かわいい」という意味は、大塚英志氏の言葉を借りるなら「女性たちの口から発せられた瞬間逆に現前のあらゆる事象をこの「かわいい」の一言で包括してしまう」という力を持っていると言えるだろう。さらに大塚氏は「女性を支配することばとしてあった「かわいい」が、逆に女性たちが彼女たちをとりまく世界を「かわいい」の一言で支配し直してしまうことばへと変容」したとまで言う。だがこれは「かわいい」という言葉がどこに向けられるのか、そのベクトルによって大きな違いが出るのではないか。

たしかに、「女の子」たちによって、「かわいい」と言う言葉が外の世界に対して発せられるときには、この大塚氏が言うような力を発揮することになるだろう。しかし、その言葉が自分

自身の内側に向けて発せられるときはどうだろうか。つまり「かわいい」私でいたい、というベクトルである。このようなベクトルは、日本の女性たちを「幼い」ままにとどめさせるように働いてしまう側面を持たざるを得ないと私は思う。もちろん、そのとき何を「かわいい」とするのか、その多様性は重要である。いずれにしても、この「かわいい」という言葉が、現在においても日本の社会や若い女性を考えるための重要なキーワードであることは確かである。

## おわりに

さて、最後にもう一度、文学の話にもどろう。よしもとばななが90年代に発表した作品はどれも、いわゆる「文学」の世界では新しいものだった。しかし私は、よしもとばななの最大の功績は、少女マンガの価値を社会に認めさせたことにあると思う。ばななの作品に感心したおじさんたちは、しかし、若い女性たちから「えー、少女マンガではもっとすすんでますよ」と教えられてはじめて、少女マンガがどれほど「文学」の先を行っているかということを知ったのだ。それまで、「女子ども」のものとして馬鹿にされていた少女マンガが、よしもとばななの登場を契機として、はじめてまっとうに扱われることになったのである。

現在では、カルチュラル・スタディーズの影響もあり、日本でサブカルチャーを研究するときに少女マンガにふれない人はいない。女性たちが、自分たちのものとして愛してきた〈女の子〉文化がやっと日の目をみた、その意味で、よしもとばななにはどんなに感謝してもしきれない。それと同じく、たとえば「コバルト系」の〈女の子〉小説なども、これから、様々な視点から研究されるようになると思う。この〈女の子〉文化の流れをおさえておかないと、現代の女性作家を語ることはできない。直木賞を受賞した唯川恵も、日本ではじめてエドガー賞候補になったハードボイルド系のミステリを書く桐野夏生も、いずれもコバルト文庫の作家だった。これから、日本の文化や文学はますます多様なものになっていくだろうし、さまざまな価値観を含むものになるだろう。その一つとして、〈女の子〉文化についても考えていきたいと思う。

## 第3章 シンポジウム テーマ発表

### 〈セッション1〉食



### 日本の伝統的な行事と食

洪 伊 蜚  
森 本 麻 子  
宿 澤 麻利子

#### 1. はじめに

私たち1班は、韓国と日本との身近な面での違い、特に私たちが生きていくうえで欠かすことの出来ない「食」の違いについて興味を持ち、調べてみることにした。しかし、「食」というテーマはとても幅広く、多岐にわたるので、その中でも「伝統行事と関わりのある食」というテーマを決め、行事の中でも特に身近と思われる、正月（おせち・雑煮・鏡餅・七草粥）・七五三・ひな祭り、そして、親しみやすいものとして祭りについて調べてみた。

まず、それぞれの行事で欠かせない料理について調べ、またそれが持つ意味や歴史、地方色などを調べ、また食のみではなく各行事自体の意味や歴史についても触れた。祭りについては実際に行き、肌で感じたことを発表することにした。

日本に古くから伝わり、今でも根強く残っているこれらの行事を伝えることで、日本文化と、その根底にある日本人独特の感性を伝えることが出来ると思う。また、「食」という身近なテーマは、自分と照らし合わせて考えることができ、普段の生活を振り返る良い機会にもなる。韓国の学生だけではなく日本の学生にも、自分の食生活を思い返してもらえるのではないかな。また、祭りは日本人の生活の中にあるもので、『食』とも密接な関係がある。日本人だけではなく、日本を訪れた外国人もたくさん来るほど、祭りは日本の象徴的なものともいえる。祭りは日本の固有の文化であり、その中に馴染んでいる『食』文化を体験しながら日本の文化をより深く感じるができると思う。

なお、韓国の学生にとって初めて聞くであろう情報が多いので、各テーマについてあまり深くは掘り下げず、基礎知識のような構成にし、写真を多く使って発表することに留意した。

## 2. 調査の方法

主にインターネットで検索した。また、文献の「日本人のしきたり」には、さまざまな日本の行事について詳しく書かれていて、とても興味深かった。

祭りについては、三人で実際に行き、写真を撮るなどして楽しみながら調べることが出来た。

### 〈文 献〉

「日本人のしきたり」 編者 飯倉晴武 青春出版社

### 〈インターネット〉

#### 【正 月】

##### ・お せ ち

<http://www.kibun.co.jp/enter/osechi/shogatu/index.html>

紀文 おせち料理大 事 典

<http://www2u.biglobe.ne.jp/~sstudio/index.html>

有限会社エスタジオ おせち料理のページ

<http://www.e-recipe.org/osechi/> E・recipe おせち料理特集

##### ・雑 煮

[http://www.shopper.jp/zouni/zouni\\_1.cfm](http://www.shopper.jp/zouni/zouni_1.cfm) 東京新聞ショッパー

<http://www.konishi.co.jp/html/fujiyama/zouni/>

日本のお正月 お雑煮をめぐる物語

<http://www.rurubu.com/entame/04winter/ozoni/>

るぶ. c o mー全国お雑煮MAP 2005

##### ・鏡 も ち

<http://www.kagamimochi.jp/> 日本鏡餅組合

##### ・七 草 粥

<http://www.kikkoman.co.jp/homecook/college/10shoga/nanakusa.html>

キッコーマン ホームクッキング

#### 【七 五 三】

[http://www.tomato-ks.com/topics/mamechishiki/vol\\_09\\_p01.html](http://www.tomato-ks.com/topics/mamechishiki/vol_09_p01.html)

KAGOME

<http://www.mishimataisha.or.jp/Page/753.htm> 三嶋大社

#### 【ひな祭り】

<http://hinamaturi.com/index.html> ひなまつりドットコム

<http://www.hinamatsuri-kodomonohi.com/>

ひな祭りーこどもの日ドットコム



## 【祭 り】

<http://www.hiejinja.net/eindex.htm> 日枝神社

### 3. 調査の結果

#### 【正 月】

おせちは、日本でお正月に食べるお祝いの料理で、「おせち」とは本来、暦上の節句のこと。おせち料理は「めでたさを重ねる」という意味で縁起をかつぎ、重箱に詰めて出された。また、昆布やえびをはじめとする一品一品にもそれぞれ意味がこめられ、縁起をかついでいる。今では地方や家庭によってオリジナルの料理が付け加えられるなど、さまざまな変化も見られるが、新年の家族の健康と繁栄とを祈願するというコンセプトは今も変わらない。

雑煮は、室町時代に酒宴の前菜であり、現在、正月の祝い料理となった。地域によって、料理に様々な特徴がある。例えば、関西では白味噌、関東ではすましを使う。また、地域ごとに名産を用いるため、具も様々。

鏡餅は、正月に神仏にお供える神聖な食べ物で、人の魂をあらわしている。縁起のよい橙やウラジロ、ユズリハなどとともに飾る。1月11日、鏡開きに、この餅を食べて、新しい生命力をつける。

七草粥は、春の七草を入れて煮たおかゆ。1月7日に食べる。正月料理でつかれた胃腸を休める実用面、また一年を平和に暮らせるという信仰面の両面がある。

#### 【七 五 三】

11月15日に、7、5、3歳の子供の成長を祝う日で、平安時代から行われた儀式がもとになっている。七五三につきものの千歳あめは、江戸時代に、浅草寺で売り出されたのが最初で、子供の長寿を願うとされる。

#### 【ひな祭り】

中国から伝わった習慣と、人形（ひとがた）に厄を移す、という日本古来の習慣と混ざり合ったものが、やがて宮中の人形遊びとも結びついてひな人形を3月3日、桃の節句に飾るという行事となった。女の子の初節句を祝う。菱餅・ひなあられ・白酒など、この行事独特の食べ物は多く、それぞれ意味を持つ。中でも、菱餅は、桃色は桃の花、白は雪、緑は新芽を表すというとても風流な食べ物である。

#### 【祭 り】

祭りは日本の独特の文化で、日本の祭りの国とも言われるくらい、一年中、色々なところで多彩な祭りが開かれる。祭りには神社が中心になる宗教的な色のまつりから、家やある集団内でのまつり、あるいは季節によっても多様なまつりがある。一番有名な日本の3

大祭りは神田祭（東京）祇園祭（京都）天神祭（大阪）である。

そして、お祭りに欠かせないものは出店だ。各地方の名産物や庶民的な伝統の食べ物を売っており、日本の食文化を手軽に感じることができる。

私たちがグループ活動で行ってきたのは二つの祭りで、日枝神社の山王祭りと浪除稻荷神社のつきじ獅子祭だ。色々な出店が出ており、たこ焼き、お好み焼き、あんずあめ、カキ氷、焼きそば、クレープ。食べ物だけではなく金魚救いなどのゲームの出店もたくさんあり、祭りを盛り上げていた。

#### 4. 結論・考察

日本の伝統的な行事は、神仏への信仰と深く結びついている。また、それに欠かせない食べ物には、日本人の人生観や、農耕を主として行っていたことが表れている。地域色も豊かで、地域ごとの名産を大切にしている。過去の行事がもととなって、すこしずつ形をかえているが、その意味するものは今も昔も変わらず、一族の繁栄や、子供の健康などである。



# 日本の和菓子のルーツを探る ～色とデザインはどこからきたか～

陳 雪 萍  
西 澤 あゆみ  
岡 川 真理子

## 1) 初めに

今回の日韓交流セミナーでは「和菓子」をテーマに研究した。ねらいは日本の伝統文化である「和菓子」の紹介を通し、日韓両文化の相互理解を進めることにある。和菓子の特徴を考えた際、様々な要素があるがその中でも色遣いを中心に調べることにした。当初は原料の小豆について調べようとしたのだが、韓国やそのほかのアジア各国に小豆を使用した菓子があることに気づき、小豆を用いるのは和菓子だけの特徴ではない、という結論に至った。また、韓国人留学生に韓菓子について聞いたところ日本と共通の菓子（例えばどら焼き・まんじゅうなど）がとても多く存在することから、日韓では菓자에同じような材料を多く使っているが、それがどのように菓子に表現されているのかが異なる、と考え和菓子の特徴として色遣いを選択した。

和菓子の色遣いと一口に言っても様々な色の組み合わせがあり、そこには一つ一つ意味がある。例えば寒色の組み合わせを目にするとほとんどの人が（同じような気候で過ごしている人のほとんどが）「涼しそうだな」と感じるだろうが、赤・黄・緑・紫の組み合わせを見て「端午の節句の組み合わせである」と感じる人は日本に多いのではないか。そのような意味で和菓子に付随する行事の紹介、和菓子の特徴づけていると考えられる色遣いや季節の表現を紹介することで、韓国の学生に韓国菓子と和菓子との違いや共通点を理解してもらおう。その上で菓子だけにとどまらずそれに派生する文化の交流や、互いの文化に対する認識を深めてもらいたいと考えた。

## 2) 研究方法

和菓子と言っても様々な種類・会社がある。今回はその中でも日本の代表的老舗である「虎屋」にて和菓子の展覧会「素材がいのち展」が開催されていたのでそこで研究をすることにした。また、虎屋文庫研究主幹担当部長の青木直巳氏にお話を伺うことができ、その際に和菓子の色遣いがどのように決定されているかが書かれている冊子をいただいた。それに加えて虎屋のパンフレットやカタログを収集し、文献研究を行った。

## 「素材がいのち展」

最近ではスローフードの概念が広く知られているが和菓子にはそれに通じる原材料が昔から多く存在しており、「素材がいのち展」では原材料だけではなく、包装材料や楊枝、製造道具まで展示してあった。手作業で精製される「和三盆糖」や、厳寒の冬に天日干しされる「糸寒天」、たくさんの葛根からほんの少ししか作ることのできない「葛粉」など和菓子の原材料についての知識を得ることができた。

しかし結果的には展覧会よりも青木氏に伺った話が一番参考になった。事前に質問事項をメールで送っておき、それに答えていただいた。また、参考文献として以下の冊子をいただいた。

- ・「王朝の雅と和菓子」展 ～平安遷都1200年記念～
- ・「茶席の和菓子」展 ～四季折々～
- ・「愛らしい雛のお道具とお菓子」展
- ・「源氏物語と和菓子」展
- ・「和菓子からWAGASHIへ」展
- ・「年中行事と和菓子」展

(全て虎屋文庫編集)

## 3) 研究結果

発表の流れに沿って研究結果を報告したい。

### 1. 和菓子の特徴

#### 和菓子の定義

和菓子とは…植物性の食材を使用していること

日本の文化を表すもの

#### 特に気を遣っていること

虎屋では「和菓子を五感で楽しむこと」を重要と考えている。五感とは、視覚・味覚・触覚・嗅覚・聴覚のことである。

視覚…見た目の美しさ。色の組み合わせやデザインで季節感や物語性を表現する。

味覚…厳選された原材料。

触覚…歯触り・舌触り。また、楊枝で菓子を切るときの感触。

嗅覚…素材のほのかな香り。

聴覚…菓子の名前。例えば、源氏物語にちなんだデザインには、それに適した菓子名をつける。

## 2. 和菓子の色とデザイン性

### 日本独自の特徴とは

様々な和菓子を見る中で、一番印象深かったのがその色遣いである。素材そのものの色だけでなく、白あんや寒天を着色し、それを用いて四季折々の草花や景色などを表現できることに魅力を感じた。

#### 虎屋 水の宿

この羊羹は虎屋が毎年夏に出しているものである。「流れる水」をモチーフにし、透き通る水色で涼しさを表している。また、よく見ると白い部分は細かく刻まれた粒状のものが固められており、あたかも川の流れによって白い泡が生じているかのようになっている。蒸し暑くてつらい日本の夏を、せめて視覚から涼しもうとし、尚かつそれを芸術的なものにまで引き上げたことに和菓子の奥深さを感じた。

この生菓子は先の例と同じ夏を代表するものである。金魚が水面に浮かぶ青葉の陰を泳ぐ様子を表している。透明な中に金魚がぼっかりと浮かぶ様子はガラス鉢や池に泳ぐ金魚を連想させ、彩りも良く涼を呼ぶものとして視覚に訴える。金魚というモチーフ、まだ青い紅葉の葉が夏を感じさせる一方で、透明さが涼しさを呼び起こすものとして用いられている。

#### 虎屋 若葉陰 琥珀製

また、季節だけではなく、古典文学がモチーフとして扱われていることもある。例えば源氏物語に登場する「若紫」を連想させる菓子がある。また、菓子の色遣いはかさね

の色目を参考にすることもあり、平安時代の流れを汲むものが多く存在する。次の章では「かさねの色目」がどのようにデザインに用いられたかを説明したい。

### 3. 和菓子のデザインができるまで

和菓子のデザインを決定する際に何を参考にするか、という質問に対し青木氏は興味深い回答をしてくださった。まず、社内に残る古文書や社内資料を参考にして復刻版を作ったり新菓を作ったりするそうだ。また、季節の行事やその年の干支、四季、自然をモチーフにするとおっしゃっていた。私たちが特に興味深く感じたのは、「かさねの色目」を参考にするということである。これは私たちの予想を上回るものであった。今回のセミナーの目的の一つに日本文化の紹介もあったので、発表ではかさねの説明や色目の紹介をした。

#### 『「かさねの色」と菓子』

「かさねの色」とは、平安時代の衣装に特有の色合わせのことで、それぞれに季節の植物名などがつけられている。表地と裏地の色の対比や調和、重ね着（いわゆる十二単など）の袖、襟、裾口に見られる色合わせに工夫が凝らされ、「紅梅重ね」「山吹重ね」などと呼ばれた。かさねの色には、季節の他に性別や年齢などによる決まりもあり同色でも季節によって名称が変わったり、同名でも色が異なることもある。

菓子でもその美意識が好まれ、色を組み合わせやすい羊羹類やきんとんに「かさねの色」からの菓銘が見られる。

※ 近代以降「かさねの色目」と呼び習わされるが、色目はもともと品目を意味する言葉で、平安時代には「かさね」と呼ばれていた。』

『「源氏物語と和菓子」展』 虎屋文庫 1998年発行

和菓子におけるかさねの色の影響は、かさねの色に因む名称、かさねの色の配色に因む色遣いの二点が挙げられる。例えば「山吹の里」という羊羹は黄色と緑の組み合わせであるし、「一重梅」という羊羹には白と赤が用いられている。このように普段私たちが特に意識しない色遣いを菓자에用いることが、色彩的な季節感を身に付ける役割を担っていると言うこともできるのではないだろうか。

### 4. 和菓子の国際化

現在では「和菓子」は日本だけにとどまらず、世界中で見られるようになった。虎屋でもパリやニューヨークへ出店し、和菓子文化を海外へ発信する基地としての役割を担った。和菓子は洋菓子とは異なり原材料に油分をあまり使わない。よって健康志向の欧米人に受け入れられやすかった。また和菓子の素材と現地の素材を組み合わせたり、モチーフを日本文化に由来するものだけでなく、欧米文化に由来するものも取り入れたり工夫もされ

ている。

昭和59年に発売された「羊羹de巴里」は、小豆・ライム・パッションフルーツ、フランスの特産であるカシスなど果物の風味を付けた羊羹を、銀紙のカップに流し込んだものである。現在では逆輸入され日本でも購入できるようになった。この他にも、「餡ブッшон」「焼きりんご羊羹」「いちぢく羊羹」などの菓子もフランス人向けに開発されている。

#### 4) 考 察

和菓子の文化は日本人にとってなじみがあるような気がする一方で、実際には理解できない部分がとても多い。例えば一つの菓子を見てそれにどれだけのメッセージを見いだすことができるか。季節や行事に因んだものはわかりやすいが、その色彩が「かさねの色目」に由来するものだとか、名前が「源氏物語」に由来するものだとかはなかなかわかりにくい。そのような意味で和菓子とは私たちに日本文化への敏感な反応を要求するものとも言えるのではないだろうか。

今回の発表を通じて、同徳女子大の方々に日本文化の一部を伝えることができたが、私たち自身も日本文化の再確認をすることができた。また和菓子について調べる過程で台湾や韓国の菓子についても調べたが、日本文化の伝統や美しさを実感するとともに、どの文化にも独自のすばらしい行事や季節の捉え方があり、自然や文化を愛でる気持ちはどこでも変わらないものである、と感じた。ただその表現の仕方が異なるだけである。菓子に限らずその他の部分にも相違が見られるのは、当たり前のように見えてなかなか興味深い。国際化が叫ばれる今日、互いの国の文化がより多く入ってくるようになった。どこからどこまでが自国の文化で、どこからどこまでが相手の文化なのかがわかりにくく、いわば「ボーダレス」の状態になりつつある一方で、近年「ネオ日本文化」とも呼べるような風潮があるように思える。例えば着物・浴衣ブーム。従来の伝統的な柄に加えて、新しい柄が毎年のように登場している。若い人の中には全く新しい着方をして楽しむ人も多く、実際アンティーク着物の値段は毎年徐々に上昇しているようだ。そのような複雑な文化の中で私たちはそれに柔軟に対応することを求められている。今回のセミナーは日韓の文化の相違

点を共に学んだとともに、各文化に対する敬意を払うことを改めて気づかされた。

最後に、本レポートは「虎屋」の文献・虎屋文庫研究主幹担当部長の青木直巳氏へのインタビューを元に作製したのであり、全ての和菓子がこの通りではない、ということを断っておく。また、青木氏の協力があってこそ本レポートは完成することができた。この場を借りて感謝の意を表明したい。





# 菓子と人生

佐藤 陽香  
竹内 冬美  
黄 怡君  
リ ス

## 1. はじめに／問題の所在

### ○動機：

日本の菓子と書いて「和菓子」、韓国の菓子と書いて「韓菓（ハングァ）」。星の数ほど存在する菓子の種類。おそらく世界各国・各地域に何らかの「菓子」は存在するだろう。そしてそれは生活の中のふとした瞬間に登場してくる。「菓子」というものから、人間の生活や関係性が分かるのではないかと興味を持った。また、テーマ選出の際に「女性には甘いものを好きな人が多いのではないか」という一般論を踏まえてこのテーマを決定し、調べてみることにした。

### ○目的：

日本の菓子である「和菓子」を代表例として、台湾・タイの菓子を調査し、菓子が私たちとどのように関わっているかを調査・考察する。人間の生活において、菓子が果たしている役割とは何であるか。

### ○意義：

この調査研究をすることには、人間が他者と円滑に関わっていく方法や、それによって構築される関係の豊かさを考察することで、人間関係と人生を豊かにする意義を持つ。

## 2. 調査の方法

### 〈文献・インターネット〉

- ・『和菓子』守安正 毎日新聞社
- ・『茶席の菓子』お茶の友3 世界文化社
- ・『カラー京都の菓子』淡交社刊 鈴木宗康
- ・全国和菓子協会 <http://www.wagashi.or.jp/>
- ・和菓子大坂（大阪府生菓子協会） <http://www.wagashi-osaka.or.jp/index.html>
- ・和菓子でいっぱい <http://www3.plala.or.jp/wagashi/index.htm>
- ・韓国ソウル旅行情報ガイド ソウルナビ <http://www.seoulnavi.com/index.html>

- ・ My Soul Seoul. 韓国！ <http://myseoul.hp.infoseek.co.jp/>
- ・ 韓国同居暮らしと育児 <http://plaza.rakuten.co.jp/overreacting/>
- ・ 韓国語 1 年生 <http://www5d.biglobe.ne.jp/%7Eragna/gottani/>
- ・ 亜洲糖果行 <http://www.asch.com.tw/>
- ・ 發糕 <http://home.kimo.com.tw/cillinbaby/ch36.htm>
- ・ WCN 世界之旅 <http://www.wcn.com.tw/eating/moon/2000/>
- ・ タイ国政府観光庁 <http://www.thailandtravel.or.jp/top.html>
- ・ カラダのごちそうアタマの栄養 <http://kodawari.lin.go.jp/ryori/index.html>

### 〈インタビュー〉

対 象：茨城県つくば市にある和菓子屋『いとう』店主、伊藤昭さん（男性、65歳）  
調査時期：6月8日

### 〈留学生による自国菓子の調査〉

対 象：台湾（黄怡君 担当）、タイ（リス 担当）

## 3. 調査の結果

### 3-1. 文献調査

#### ○和菓子の種類

…饅頭、羊かん、餅菓子、干菓子、生・半生菓子、焼き菓子、飴菓子など

#### 一生菓子

- ーもち物 もち、おはぎ、赤飯、新粉もち、大福、だんご
- ー蒸し物 蒸し饅頭、蒸し羊羹、蒸しカステラ、ういろう
- ー焼き物 平鍋物（どら焼き、桜餅、金つば、茶通、唐まん）  
オープン物（饅頭、桃山、カステラ）
- ー流し物 きんぎょく、羊羹、水羊羹、缶詰め水羊羹
- ー練り物 練り切り、こなし、ぎゅうひ、雲平
- ー揚げ物 あんドーナツ、揚げげっぺい

#### 一半生菓子

- ーあん物 石衣
- ーおか物 もなか、すはま、鹿の子
- ー焼き物 平鍋物（落とし焼き、茶通、草紙）  
オープン物（桃山、黄味雲平）
- ー流し物 きんぎょく、羊羹
- ー練り物 ぎゅうひ

－干菓子

－打ち物 打ち物種、落がん、片くりもの、雲きん種、懷中しるこ

－押し物 塩釜、むらさめ

－掛け物 おめで糖、おこし、砂糖漬け

－焼き物 蒸し焼き、丸ボーロ、卵松葉、米菓

－あめ物 有平糖、おきなあめ

※和菓子には多くの分類がある。上記は「全国和菓子協会」のHPを参考にした一例。

## ○和菓子と行事（年間）

※上節句（一年で主な5つの節句）と和菓子

正月7日 人日（じんじつ）……花びら餅

3月3日 上巳（じょうし）……桜餅

5月5日 端午（たんど）……柏餅、ちまき、梅もろは

7月7日の七夕（しちせき）……天の川や星にちなんだお菓子

9月9日の重陽（ちょうよう）…着せ綿

- ・正 月……………鏡餅、年賀の和菓子

- ・節 分……………立春大福、福豆、厄除け饅頭

- ・春の彼岸……………祖先の供養。牡丹餅、十六団子

- ・桃の節句……………娘の無病息災を祈る。菱餅、桜餅、雛あられ、有平糖、ひな菓子など

- ・端午の節句……………子供の日、菖蒲の節句。邪悪を取り除く菖蒲（尚武の意も）により、男子の元気を祈願する。ちまき、柏餅、節句祝菓子など

- ・母 の 日……………母親に感謝する。季節の和菓子など

- ・和菓子の日……………嘉祥の日、疫病を払い福を招く。季節の和菓子、笑わず餅（大坂）など

- ・父 の 日……………父親に感謝する。季節の和菓子など

- ・七 夕 祭……………中国伝承と日本信仰の習合。七夕餅

- ・お 中 元……………お盆の中日を指す。日頃お世話になった人へ品物を贈る。和菓子全般

- ・土 用……………年4回のうち、夏の土用。鰻と同様、元気を出すために食べる。土用餅

- ・敬老の日……………老人を敬愛し、長寿を祝う。養老饅頭、赤飯、季節の和菓子

- ・月 見……………陰暦の八月十五夜に、風流を感じる。月見団子

- ・秋の彼岸……………祖先の供養。御萩、団子

- ・お 歳 暮……………日頃お世話になった人へ、感謝の気持ちを込めて品物を贈る。和菓子全般

## ○和菓子と行事（一生）

- ・ 出 産……………生後3日目に「3ッ目」のおはぎを近所に配る。7日目に仲人、親類、知人を招く。おはぎ、赤飯、紅白まんじゅう、紅白鳥の子、おめで糖、飴など
- ・ 初 節 句……………誕生して初めての節句。菱餅、草餅、柏餅、粽（ちまき）など
- ・ 七 五 三……………男子は3才と5才、女子は3才と7才。髪置、袴着、帯解の祝ともいう。  
千歳飴、鳥の子餅、鶴の子餅、祝菓子など
- ・ 入 学 祝……………赤飯、鳥の子餅、鶴の子餅、祝菓子など
- ・ 卒 業 祝……………お世話になった方々への御礼として。紅白まんじゅう、鳥の子餅など
- ・ 誕 生 祝……………満1才時に誕生餅を背負わる。誕生餅、赤飯、鳥の子、祝菓子など
- ・ 成 人 祝……………満20才に達した人の門出を祝う。赤飯、祝菓子など
- ・ 結 婚 祝……………祝用引菓子、紅白まんじゅう、巢ごもりなど
- ・ 年 祝……………男女の大厄明けや賀寿の祝（還暦・古稀・喜寿・米寿・卒寿・白寿など）。引菓子、羊かん、打物、翁飴など
- ・ 仏事法事……………ご霊前に供える菓子、会葬した人々に配る供養菓子、香典返礼に。打物、饅頭の盛菓子、塩釜、式菓子、しのぶまんじゅう、上用饅頭など
- ・ そ の 他、新築祝、開店祝、記念日に  
…赤飯、紅白饅頭、紅白餅、青白饅頭、塩釜、式菓子など

## ○和菓子の特徴

- ・ 五感の芸術、日本の心  
色や形（視覚）に加え、味（味覚）は勿論手に持った感覚（触覚）や食べる時の音、匂い（聴覚、嗅覚）に至るまでのこだわりが、日本の伝統美を象徴する。
- ・ 季節を大事にしている  
季節を捉え菓子に表現すること、すなわち季節を感じる「心」を重視している。
- ・ ひとつひとつが丹念に手作り  
和菓子は人間の手から生み出され、菓子里に命が吹き込まれる。
- ・ 健康的  
植物性たんぱく質・食物繊維が豊富で、体に大切な糖分も摂取可能。その他リノール酸、リノレン酸、アミノ酸、ポリフェノール、サポニン、カリウム、鉄、ミネラル類、ビタミンなど多量の栄養成分を含む。
- ・ 人生とのかかわり  
年間行事、生涯における行事において、名脇役として登場する。

### 3-2. インタビュー

#### ○和菓子職人インタビューより

##### ・伊藤さんの経歴

中学を卒業し、担任が願書を提出し忘れたせいでやむなく和菓子の道へ。

15歳～22歳 水戸で7年間修行。

22歳 自分の店を持つ。

30歳 全国菓子博覧会という4年に一度開かれる大きな大会で金賞を受賞。

現在 「工芸和菓子」という芸術的な和菓子を息子と二人で作っている。

##### ・和菓子のこだわり

衛生面と原料には非常にこだわっている。饅頭の粒餡に使用するのは北海道産の「大納言」である。非常に高価な豆であるため、茨城県の和菓子屋では伊藤さんしか使用していない。芋を大量に注文しても、少し味が悪いと全ての芋を使わないという話から、そのこだわりぶりがうかがえる。味は「どこにも負けない」と自負する。

##### ・和菓子の作り方

6月のお菓子「紫陽花」

①手亡(てぼ)という北海道産の白い豆(甘納豆に使うようなもの)を蒸かし、白玉粉と砂糖・水を混ぜる。半分は紫色に染める。

②紫と白の練り切りをこして、紐状にする。

③ ②を集めて形を整え、中に粒餡を入れる。

④ ③の上に寒天を細かくしたものを乗せる(雨の雫を表している)。

「紫陽花」…淡い紫の花が雨中に咲く姿は思わず足を止めたくくなるような優艶さ。

花の色が紅などと種々に変化するので、七変化の異名がある。

##### ・インタビューをおこなって

伊藤さんは、本当に和菓子に愛着があり、和菓子がお客さんの自転車のかごの中で野菜や肉に押しつぶされているのを見ると泣きたくなるそうだ。和菓子作りに使う道具を作る職人さんが今東京で一人しかいなくなってしまった。伝統文化の衰退が進んでいるのを心配している。若い私たちに少しでも和菓子のことを知ってもらいたいという強い想いが伝わってきた。

### 3-3. 留学生による自国菓子の調査

#### ○台湾のお菓子と人生

##### ・正月【2月上旬～中旬(旧暦1月1日)】

最も華やかな節句で、旧暦の1月1日から3日までの旧正月は祝日となり、皆が色々なキャンディーを食べたり伝統的な餅(甜糕・發糕)を作って賞味したりして祝う。

##### ・元宵祭【2月中旬～下旬(旧暦1月15日)】

新年最初の満月の日。ランタン(灯籠)を灯して、寺や公園などでイベントが開催される。湯圓(日本の団子にあたる菓子)を食べる。

- ・中秋祭【9月上旬～下旬（旧暦8月15日）】

一年で最も美しいとされる満月を鑑賞し、一家団欒を図る。月餅（ムーンケーキ）を食べる習慣がある。

#### ○タイのお菓子と人生

- ・フォイトーン、トーンイップ

おめでたい時に食べるお菓子。「トーン」＝「金」「黄金色」のことで、縁起が良いとされる。結婚式や出家の時に皆で集まって食べる。

タイでは男性の出家が非常におめでたいこととされ、生涯のうちに一週間もしくは三ヶ月の出家をおこなう。日本でいう出家・還俗のように重いものではなく、8割ほどの男性が出家する。

## 4. 結論／考察

### ○菓子とコミュニケーション

年間行事の中で、生涯の行事の中で、何気ない生活の中で、「菓子」は色々な形で登場する。お中元やお歳暮、感謝の気持ちを込めた品として、お世話になった人に贈られる。また対人関係を円滑にするためにも、得意先や訪問先、家族の間で贈られたり一緒に食べたりもする。来客や招待客には、もてなしとしてこちらの誠意を表すことができる。それは「菓子」贈答文化といってもよい。コミュニケーションツールのひとつとして、菓子が機能しているのである。

日常生活に密着して人の心のつながりをつくるこの存在は、単なる嗜好品ではなく、「人生と共に生きる『菓子』」といっても過言ではないだろう。私たちと共にあって、人と人を繋いでいく「菓子」という文化を捉え直し、「菓子」によって紡がれる私たちの生活と人間関係を今一度見つめてみたい。



# 日本の家庭料理について

ルーシー ギブソン  
范 丹 明  
長 倉 茉妃子  
東 麻衣子

## 1. はじめに

10班では、日本の家庭料理について調べることにした。家庭料理というテーマの中からさらに対象を絞り、「漬物」、「大豆で作られる物（味噌・納豆など）」、「おせち料理などお正月料理」、「副菜や主菜」をトピックとして設定した。

### 動機・目的：

私たち一般人の生活の中で最も文化と深い関わりがあるのは、食の分野であると思ったから。

その理由は次のことからである。

テーマを考えるきっかけとして、グループメンバー各自の母国文化について話し合った。グループメンバーの構成は、日本人二人、台湾人一人、そしてニュージーランド人一人であった。そして各国の文化や社会の違いを挙げ、話し合った結果、メンバー各人が知識の多く、共通に興味を持っている料理というテーマにすることになった。

自分が母国で食べていた料理や好きな食べ物で、その国の文化などが分かると気づいたためである。

それからさらにテーマを絞り、家庭料理に焦点を当てることに決定した。

その理由は、一般人における現在の日本文化を代表する食べ物に違いないと考えたことと、韓国の学生たちにとっても自国のそれと比較しやすいだろうと考えたからだ。

そして、家庭で毎日食べられている料理や特別の日の料理を調べるため、「漬物」、「大豆で作られる物（味噌・納豆など）」、「おせち料理など正月料理」「副菜や主菜」という四つのカテゴリーに分け、各自に調べることを任せた。

### 意 義：

私達は日本の家庭料理を紹介することは、韓国の学生に日韓の食生活を身近な分野から比較してもらえするという意義があると考えた。

そのため、準備の段階において私達が最も注力したのは、発表形式の工夫である。

どのように家庭料理について発表するかということを考え合った結果は、パワーポイントを使いながら家庭の小話を演じ、各役割で説明することに決めた。

それは発表の中で日本の一般的な家庭を再現し、より一般家庭の食文化に親しみを持ってもらうためだ。

ママ、パパ、娘の明子さんというホームステイ家族役割を決めてから、ニュージーランドからの留学生ルーシーさんの役も決めた。家庭料理を説明するため、留学生のルーシーさんがその家庭で過ごす一年中に初めて試す食べ物を発表会で演じながら、韓国から来日した同徳大学生達にも説明することにした。

私達は日本韓国それぞれの日常的な食生活の比較、また日本の伝統的な味と文化を確かめるために、このテーマを、このように調べることは大切だと思って選んだ。

## 2. 調査の方法

調査は主にインターネットによって行った。

### 参考文献・資料：

#### 1) 正月料理

おせち料理のページ

<http://www2u.biglobe.ne.jp/~sstudio/>

おせち料理

<http://www.shufu2.jp/season/osechi/>

紀文情報館>おせち料理大事典

<http://www.kibun.co.jp/enter/osechi/shogatu/>

雑煮を巡る文化圏

[http://www.konishi.co.jp/html/fujiyama/zouni/zouni/zouni\\_map.html](http://www.konishi.co.jp/html/fujiyama/zouni/zouni/zouni_map.html)

#### 2) 梅 干

UMEBOSHI MENU

<http://www.shejapan.com/jtyeholder/jtye/living/umeboshi/ume0.html>

NHKきょうの料理 2005年6月号（発売年月日2005年5月16日）

なんでも雑学 日本人と梅干の由来

<http://www.minabe.net/gaku/rekishi/yurai.html>

紀州梅干のいなみの里 梅園

<http://inaminosato.co.jp/history.html>

#### 3) 味噌汁

米五のみそ「味噌屋どっと混む」レシピ集/味噌汁レシピ

<http://www.misoya.com/recipe/misoshiru.html>



### 3. 調査の結果

#### ① 梅干しについて

由 来：

原産地は中国。今から約1500年前、遣唐使の小野妹子によって中国から日本に伝えられたといわれている。当時は漢方薬として用いられ、貴族の間で珍重された。

その後、時代の変遷と共に様々な階級に広まるようになる。以下、梅干と日本人の歴史を略図化したものである。

梅干と日本人の歴史	
奈良時代	貴族が観賞用、薬用に競って自邸に植樹。 生菓子として食べられていた。
平安時代	貴族の間で薬として用いられる。 病気が治った梅干しが申年に漬けたものだったため、『申年の梅』と言われ、今でも珍重されている。
鎌倉時代	僧家に広まり、点心やおやつとして食されるようになる。
室町時代	武家階級に広まり始める。
戦国時代	武士階級の間で健康効果が有名になる。 息切れ防止剤として、また疲労回復薬として戦場に携帯することが一般的に行われていた。
江戸時代	梅が一般の家庭に広まり始める。 江戸中期には冬が近づくと梅干売りが街を呼び歩き冬を告げる風物となった。
明治時代	全国的に流行したコレラや赤痢の予防・治療に梅干が用いられ、日清・日露戦争でも重要な軍糧として重宝された。

効 用：

梅干しに含まれるクエン酸やリンゴ酸には疲れにくい体にする効果や、梅干しの持つ酸味が胃腸を活性化し、食欲を増進させる効果がある。

#### ② おせち料理について

由 来：

そもそもの由来は「お節供（おせちく）」と呼ばれた宮中の正月行事。

古代においては節日に神に供え物をする風習があり、宮中では1月1日、7日、3月3日、5月5日、7月7日、9月9日といった節日には神に神饌（しんせん）を供え祭り、宴を開いていた。この際振舞われた料理が「おせち」の原型だと言われている。

そしてこのような宮中のしきたりが民間に広まっていったが、やがて正月にふるまわれる御馳走だけが「おせち料理」と呼ばれるようになった。

現在のおせち料理の原型：

おせち料理が現在のような形になったのは江戸時代の後半頃、つまり日本の伝統料理といっても、『おせち料理』の歴史は200年余りということになる。

現在のおせち料理は、江戸の粋やユーモアを凝縮した庶民文化が基盤となり、その土地や時代によって変化を遂げていった。

おせち料理の意味：

おせち料理の品目にはそれぞれ食材の形状や料理名が縁起をかついでおり、一年の無病息災を祈るものである。

海老は、長いひげをはやし、腰が曲がるまで長生きすることを願ってお正月飾りやおせちに用いられる。

昆布は喜ぶのことばにかけて、お正月の鏡飾りにも用いられている。

### ③ お雑煮について

由 来：

お雑煮は室町時代からあったという説があり、庶民の間から始まったと言われている。縁起物や神聖なものとして扱われてきた「お餅」を中に入れいろいろな野菜や貝類などと一緒に煮込んで作ったもので、めでたい正月に食するようになった。

各地の雑煮：

また、地方色が豊かであるのも雑煮の特徴である。主に関西以东では角餅、以西では丸餅が好んで汁の中に入れられる。

汁についても、関西地方では味噌仕立てであるのに対し、それ以外の地方では澄まし汁が一般的である。しかし山陰地方の一部では小豆汁である。

また岩手県の一部では澄まし汁仕立てだが、具を別添えのくるみだれにつけて食べるような珍しい食べ方もある。

### ④ 赤飯について

由 来：

いつ頃赤飯が作られるようになったかは不明。

しかし古代より赤い色には邪気を祓う力があるとされ、また、米はとても価値の高い食糧と考えられてきたため、古代には既に赤米を蒸したものを神に供える風習が存在していた。その際に、お供えのお下がりとして人間も赤米を食べていたと想像される。

赤飯古今東西：

現在は祭りや誕生祝いなど吉事に赤飯を炊くのに対して、古くは凶事に食べていた。赤い色で邪気を祓う効果を期待してのことと言われる。いつ頃から反転したのかは不

明であるが、本来吉事（または平時）に食べる白飯を凶事に食べ、逆に凶事の赤飯を吉事に食べることで縁起直しを図ったと考えられている。

現在でも吉事以外に、地域によっては女兒の初潮を祝して赤飯を振舞う習慣がある。

## 4. 結論／考察

今回の調査を通して、日本の家庭料理にはそれぞれ興味深い来歴があること、また歴史とともに変遷しながら庶民の間に広まり現在の形になったことがわかった。

例えばおせち料理。調査を開始する前、私たちはおせち料理はかなり古い時代から存在していただろうと予想していた。また見た目も美しいため、宮中料理が基礎になっているのではないかと考えていた。しかし実際は江戸時代からと比較的新しい料理であり、料理の発想も元々庶民的なものであるとわかった。

そして現在もその文化は変化し続けている。元来おせち料理は家庭料理の一部であり、年末に主婦が作り、正月家族や親戚で集まりながら食べるものであった。しかし現在は自分で作る家庭が少なくなり、むしろデパートの年末商戦の花形として高額な有名料亭のおせちが流行している感がある。中の料理も、黒豆や昆布など、縁起を担いだ伝統的な食材に加え、最近ではかにや松坂牛、キャビアやフォアグラのような高級食材まで使われるようになった。

また梅干しも、時代の変遷と共に様々な品種と味付け、また加工品のバリエーションが増えている。はちみつ漬けなど甘い味のもの、また品種改良が進み、紀州など有名産地では贈答品用などに高級梅干が登場するようになった。また古代に日本に取り入れられた時のように、その栄養価が近年の健康ブームで再注目されるようになった。梅干しはもちろん、梅エキスの入ったジュースや酢など、様々な加工品が売り出され、人気を集めている。

このように、伝統的な食材、料理も、形や意味合いを変えて一般庶民の食卓を賑わせつつづけているのが、食文化の興味深いところだと実感した。

また、調査を通じて日本食の魅力を再発見できたのも大きな収穫であった。

実は今回赤飯を主要トピックの一つに設定した理由は、留学生メンバーの一人が熱烈的な赤飯ファンであったためである。日本人にとっては身近なだけに普段特に意識していないが、同時にほかの国にはない、珍しい食べ物であるものがある。自分たちに最も身近な食を通じて日本の文化を振り返ることで、海外のそれと比較、また紹介できるようになった。日本人の学生、留学生両方のメンバーにとって大変意義のある調査ができ、本当に良かったと思う。



## 韓国の食文化（味を混ぜる）

史	暁	銀
崔	寶	璟
鄭	ピョル	
鄭	眞	雅

### 1. はじめに

#### 1) 動 機

食欲は人間の一番基本的な欲求で、これによって食文化というのは人間において抜けることができない文化になってある。それで我々は人間の本能と一番近い食文化に目を向けるようになった。特に同じ東洋圏の国だが、韓国と日本の食文化は分かれば分かるほど微妙に違って関心を持つようになった。

最近、日本では韓国の様々な文化がブームになっていると聞いた。テレビでは‘チャングミの誓い’という韓国のドラマが放送されていて韓国の料理にも興味を持つようになったことを知って、韓国の料理についてもっと詳しく伝えたいと思った。

韓国と日本の食文化の中ですぐその違いを見つけることができる部分は混ぜるのか、混ぜないのかの問題だった。我々は韓国の混ぜて食べる文化の代表的な料理で一番有名なビンパとチャプチェ、カキ氷を選んで調査を続けた。

#### 2) 目 的

日本人は韓国の混ぜて食べることを見て「汚い！」と思うかも知れない。

しかしこれは文化の差であり、汚いこととは関係なく味の質を増進させるための一種のレシピで見られる。こういうことを日本の学生たちにも知らせて、こんな過程で我々韓国の文化についてもっと詳しく調べるきっかけを用意するためだ。

#### 3) 意 義

韓国と日本はとても近い国だが、さまざまな文化の差で実際に我々が感じる親密感はいくらも遠いかも知れない。文化の違いを理解するのは時間がかかる。お互いにこのような交流を続けて小さな部分をはじめ、少なくとも両国の距離感を短くするのがこの調査の意義である。

## 2. 調査の方法

書籍 — 伝統韓国飲食、金徳姫  
韓国飲食、ジョシンホ

インターネット — <http://www.gogung.co.kr>  
<http://www.careforyou.co.kr/cook/bob/bibimbob.htm>  
<http://www.hansbibimbap.com>

## 3. 調査の結果

### 1. ビビンパとは？

ビビンパはご飯にナムル、肉、やくみなどを入れてごまあぶらとやくみで混ぜ合わせたご飯のことで、ビビンパは日本語で混ぜるの意味を持っている。ビビンパの中では全州ビビンパが一番有名で、季節によって材料を変えて作る。一般的にはご飯を程よく炊いて、その上にあらかじめ準備したさまざまなナムル、肉、たまごなどを色を合わせてのせ、食べる時に混ぜ合わせて食べる。ナムルと言うのはいろいろな野菜を煮たり、炒めたりして味をつけたもので、季節に合わせて選び、できるだけ色と栄養素の配合が良いようにする。



ビビンパの混ぜる前



ビビンパの混ぜた後

ビビンパが初めて文献に出たのは1800年代末の‘是議全書’という文献で、そこではビビンパをブビムパと表記している。これは、もう炊いたご飯にさまざまなおかずをまぜて一緒にまぜたことを意味するのである。韓国語ではビビンとブビンは発音が似ており、意味も似ているのでブビンからビビンになったのではないかと思う。

ビビンパと言えば、全州ビビンパが一番有名である。

全州ビビンパは全州の有名な米で炊いたご飯に、春には春野菜、夏には夏の果物、秋に

は栗、くるみ、ぎんなん、松の実など季節ごとに30種類の新鮮な材料を入れて作る。全州ビビンパは炭水化物、脂肪、タンパク質、ビタミンと無機質をきちんと取ることができる栄養食品で、先祖たちの知恵が入っている科学的な食べ物である。全州では約200年前から、もうビビンパを好んで食べていたことが分かり、歴史的、地理的な環境などに関して見ると、全州で特によく発達した理由は、平野から出る豊かな食材料と女性たちの料理の腕前などによって言われている。

#### \*ビビンパの主要栄養分析

一人前(g)	エネルギー(kcal)	水分(g)	蛋白質(g)	脂 質	糖 質	繊維質
460(100%)	557	332 (70.0%)	24.8 (5.4%)	18.9 (4.1%)	71.8 (15.6)	16.6 (3.6)

#### \*ビビンパの主要無機質含量

一人前(g)	カルシウム(mg)	磷(mg)	鐵(mg)	ナトリウム(mg)	カリウム(mg)
460(100%)	83(18.0%)	239(18.0%)	3.2(18.0%)	1156(18.0%)	529(18.0%)

#### \*ビビンパの主要ビタミン含量

一人前(g)	ビタミンA	ビタミンB 1	ビタミンB 2	ナイアシン	ビタミンC
460(100%)	83(19.2%)	1.01(0.2%)	1.52(0.3%)	17.9(3.9%)	32(7.0%)

## 2. チャプチェとは？

チャプチェははるさめを透明に煮って、炒めた様々な材料を入れて混ぜた後、暖かくして食べることだ。普通チャプチェと言えばさまざまな材料を入れたとしてチャプチェと思いがちだが、元々はさまざまな野菜を入れたからチャプチェという名前が付いたと言われている。



チャプチェ

だったと言う。このごろははるさめに野菜だけを入れた平凡なチャプチェよりは海産物を入れたもの、じゃがいもを薄く切って入れたもの、きのこを入れたものなどのチャプチェがもっと人気がある。

チャプチェは朝鮮時代に李虫という人が王にさしあげる贈り物として作った食べ物から始まる。さまざまな野菜を炒めて混ぜたその味が大好きだった王がとても喜んでその人に高い官職をあげたという話である。

元々チャプチェは野菜だけ入れて作った食べまのだが、はるさめが発達した1900年代の初期からチャプチェの材料ではるさめを入れ始め、その時にははるさめが他の野菜よりもっと人気がある材料

### 3. カキ氷

昔の韓国では今の冷蔵庫みたいな西氷庫というところがあって、そこにある氷を分けて、それを削って冷たい食べ物を作って食べたという記録が残っている。今のかき氷は1900年代に日本から伝わった日本食で、削った氷の上にあんこをのせて食べるものである。最近では果物かき氷、コーヒールかき氷、緑茶かき氷、ヨーグルトかき氷などが流行っている。



カキ氷の混ぜる前



カキ氷の混ぜた後

### 4. 結論／考察

人間の暮らしにおいて断じて除くことができない食欲という人間の基本的な欲求と連携し‘韓国と日本の食文化’というテーマの中、一番著しくて面白い差はなにがあるかを議論した所、韓国の“混ぜて食べる文化”について調べをはじまる事にした。

食べ物を食べる時、五感で食べるという日本文化の視覚的の側面から見ると、一番目立つ事が色んな食材料を混ぜて食べる事であるだろう。かなり目覚しいし、気がさすのがこの食べ物を一緒に混ぜて食べる文化の事だろう。

しかしややもすると醜く感じられることになる、この‘食べ物を全部混ぜ合わせてしまう行為’が一つの文化として定着することまでは、食べ物を適当に混ぜ合わせることをもってできるさまざまな長所が大きい役割をしたことに気づいた。それでこの混ぜて食べる文化の淵源とその長所を調査した結果を、セミナーを通じて一緒に研究して、基本的な食文化から始まったお互いの文化の差をもう少し一緒に共有して理解することができるようになったことに最大の意義があるのではないかと言う気がする。

‘目で食べるような美しい食べ物とともに集まって分ける睦まじい食べ物’の親しみ関係のように。

お互いに違う国の文化を対面させるようにすれば、いろいろ多様な文化的の差による葛藤や誤解はいつも生ずるのは当然だ。このような葛藤や誤解を（ともすると他の文化に嫌悪や自文化中心主義にまでつながることもできる！）理解と共感に変えるために相互間の文化的理解は我々がきちんとついて行かなければならない人類の宿題かも知れない。

しかし、他の国の文化が分かって受け入れるためには先に自分の文化をよく理解するのが先行されなければならないことは言うまでもないだろう。

我我はそれを私たちの未来の暮らすための、初めの課題だと名前を付けて見た。

2005 SUMMER SEMINAR 成功！



## 〈セッション2〉大学生活



### 入試制度について

本 多 茜  
川 崎 智 央  
崔 寶 允

#### 1. はじめに

動機：日本と韓国の大学生活について話し合いをしているうちに、みんなは目標の大学にはいるためにどのような受験勉強を経験したか気になった。変わりつつある韓国の入試制度に比べ、日本の入試はセンター試験やAO入試など、一貫性を持っていることが分かった。日韓の入試制度を調べ、比較し、今の受験生たちの役に立ちたい。また、両国の入試に関するまじない文化も紹介する。みんなが初心に戻って大学生活を満喫して欲しいという望みでこのテーマを選んだ。

目的：日本の入試と韓国入試を、文化やしきたりの観点から比較検討することにより、異文化交流をすること。また、日韓の学生の学業に取り組む姿勢、それをとりまく環境はどのようなものなのか、文献などには載っていない部分の文化を明らかにすること。入試は誰しもが乗り越えた山であり、私たちににとっても韓国の学生にとっても身近な話題であるので、この特徴を利用して文化交流ができることを目的とした。

意義：この調査を研究することによって、受験勉強で実際にやったこと、受験勉強を通して感じたことを改めて思い返し、「入試」に反映される日韓の文化の違いを知ることができ、また、初心に戻って、より充実した学生生活を過ごすことができるという意義がある。

#### 2. 調査の方法

日本の入試制度：インターネットの活用（口コミのサイト、神社のサイト）

湯島天神：<http://www.yushimatenjin.or.jp/pc/>

北野天満宮：<http://www.kitanotenmangu.or.jp/>

日本の予備校生活：浪人していた時に通っていた予備校（代々木ゼミナール）での体験  
大手予備校のホームページ、夏期講習パンフレット

（代々木ゼミナール：<http://www.yozemi.ac.jp/>）

駿台予備校：<http://www.sundai.ac.jp/yobi/>

河合塾：<http://www.kawai-juku.ac.jp/>

韓国の入試制度：インターネット（修学能力試験）

入試のおまじないについて自分が知っていること

### 3. 調査の結果

日本の入試制度：日本の受験生は試験前になると神社に願をかけに行き、おまもりを買う。

試験に受かるためのおまじないがたくさんある。特にお菓子の名前と試験合格をかけたものが多い。これらの商品は、受験シーズンになると売り上げが増す。

日本の予備校生活：日本の予備校は韓国の予備校と比べて、拘束されて勉強するのではなく、比較的自由に勉強する環境であると考えられる。予備校で勉強を教えてはくれるものの、自由にさぼることもでき、自分で自分をコントロールする力も必要である。

韓国の入試制度：かつては「大学別本考査」というテストを行っていたが、塾にかかる費用や高額家庭教師などの問題で政府により廃止された。現在では「修学能力試験」によって入試を行っているものの携帯を使ったカンニング事件が起きて信用度を問われている。これからは「内申書+修学能力試験」で入試を行っていく予定だが、同級生を敵と見る「内申戦争」を起こす恐れがある。韓国の御まじないに関しては、100日酒を飲む、100日指輪をもらう。また、鏡（問題をよ〜く見て）、ティッシュ（よ〜く解いて）、フォーク／斧（やまを張って）、磁石／接着剤（希望の大学に受かる！）を持っていくのも定番である。

### 4. 結論／考察

日本の教育制度：日本では、試験合格とお菓子の名前をかけたものが合格グッズの定番として浸透している。お菓子はコンビニやスーパーなどで手軽に手に入るため、プレゼントとしても好評である。合格グッズは様々な種類があるが、中にはきちんと根拠があって売り出しているのか疑わしいものもあった。神社に行ってお払いをしたり、絵馬を書いたりする祈願は日本独特のものであるということがわかった。日韓で様々な合格祈願があり、おまじないの方法は違っても、受験にかける気持ちは日本も韓国も同じだと感じた。

日本の予備校生活：日本の予備校の授業の様子は決して知識やテクニックを叩き込むような授業はせず、「人はなぜ勉強するのか」、「自分が本当にやりたいことは何なのか」を考えさせるような授業をおこなっているように、私は感じた。予備校は、様々なことで悩み、

答えを探している青年たちに答えを見つけるヒントを、勉強を通して伝えているような気がした。

韓国の入試制度：韓国では入試制度がしょっちゅう変化するため、受験生たちも戸惑っている。また国家試験であるにも関わらず毎年変わるようでは信用も失うので、早く安定した受験制度にするべきだと思う。



# 日韓の大学生活の違いと共通点

稲 田 明 子  
李 少 蓮  
久保田 霞

## 1. はじめに

- 動機：① 私たち3人がグループを結成して何とはなしに始まったおしゃべりが、文化的影響を少なからず受けているお互いの生活の違いについてであったから。話をする中で、日本と韓国の似ている面と異なる面を見つけるたびに互いに面白く感じ、これを他の参加者にも味わってもらいたいと感じた。
- ② 大学生活は、大学生としての私たちに最も身近なテーマであり、より興味をひくことができるはずだし、互いに大学生であるという共通点にたった上で日韓を比較してみる面白さがあるだろうと考えたから。
- ③ 他の大学生活のグループがテーマを絞っていく方向だったため、あえて大学生活全体を扱ってみてもいいのではないかと感じたから。

目的：日本と韓国の大学生はどのような生活を送っており、またその背景にはどのような文化的影響があるのだろうか。生活上の違いは文化差のみならず個人差によるものも多い。その点に注意しながら、日韓の大学生活の違いと共通点を示すことで、その背景にある文化の相違点と類似点を指摘し、互いの文化と考え方を理解することが目的である。

- 意義：① 全ての相違を文化差に求めるのではなく、個人差を指摘することで、相手を国籍や人種で判断するのではなく、個人として捉え付き合っていく姿勢の必要性を感じることができる。
- ② 自分たちの生活という、身近であるがために当たり前すぎて見過ごしがちな事象を、異文化を通してみることで再認識・再発見できる。

## 2. 調査の方法

インターネットでの調査とインタビュー調査である。

インターネット調査：日本→全国大学生活協同組合のホームページで、大学生の生活実態調査を参考にした。

韓国→さまざまなホームページを参考にした。

インタビュー調査：個人の実際の生活を紹介すると良いという佐々木先生のアドバイスにより、班員3人の実際の生活を調査した。

・対象者…日本の大学生2名（19歳・20歳、共に女）

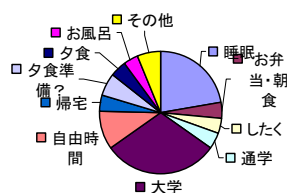
韓国出身の大学生1名（23歳、女）

・韓国出身の大学生は、日本の留学生活ではなく、韓国での大学生活を調査した。

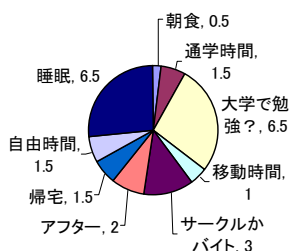
## 3. 調査結果と考察

班員3人の一日の生活スケジュールは以下の通りである。

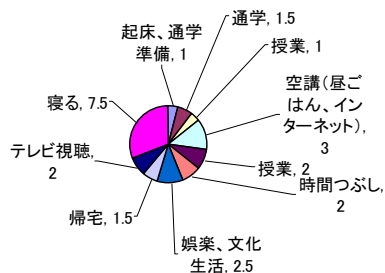
Kさん



I 田



Sさん



この3人のデータを基に起床から就寝までを時間を追いながら比較する。

### 登 校

- ・通学時間 〈日本〉 自宅生平均71分・自宅外生およそ20分以下  
〈韓国〉 約1.5時間 首都圏の大学は自宅生が大半
- ・交通手段 〈日本〉 電車・徒歩・自転車  
〈韓国〉 自宅生のためのスクールバスもある
- ・登校日数 〈日本〉 平均4.7日  
〈韓国〉 平均4.5日

以上のように登校日数・授業日数には大きな差はみられなかった。韓国では学生の一人暮らしは一般的ではないようで、交通手段もニーズに応じた形となっている。日本でスク

ールバスといえば幼稚園・小学校というイメージがある。家や登校時間が個人によって大きく異なる大学生にスクールバスというのは少し想像し難い。←①

## 昼ごはん

日本の大学生は昼に設けられた一時間前後の昼休みを利用して学生食堂・生協やコンビニエンスストアのお弁当・自宅から持ってきたお弁当を食べる場合がほとんどである。韓国では昼休みは設けられていない場合が多く、自分の授業の空きコマに食事をとることが多い。大学近郊には大学生のためにさまざまな施設があり安くておいしい食堂も数多くあるため、そこを利用するのが一般的なようだ。←②

## サークル・MT

日本の大学は高校のように明確にはクラス分けされていないため、サークルやバイトなど自分から行動を起さない限りは友人関係が広がらない。それに対し韓国の大学では学科ごとにMembership Training (MT) が用意され、そこで先輩・同期・後輩との親睦を深めることができる。

サークル…運動系や文化系など趣味や目的を共有するものが集まりおこなう活動。趣味ができる、友達の輪が広がる、大学をこえた友人ができる (Inter College) などの利点があるが、お金がかかり束縛される時間が増えるのは難点である。←③

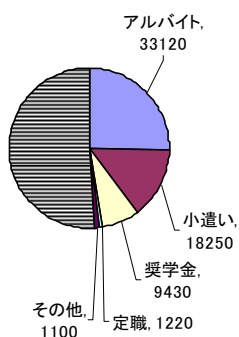
MT…同じ学科やサークルで山や海、テーマパークなどに旅行に行きスポーツ・飲み会などを通してお互いの親睦を深める。多い大学で年に4～6回、少なくとも1、2回はある。

## バイト

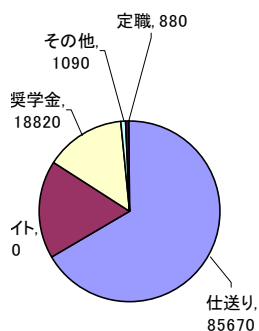
ここでは大学生の悩みどころであるお金についてみていく。

まずは日本の自宅生・自宅外生、韓国の大学生3者の収入の内訳を見てみる。

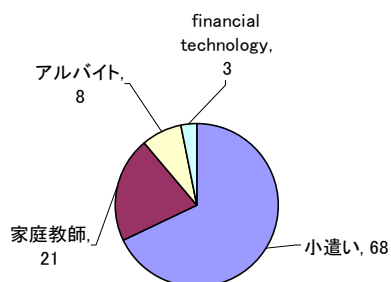
自宅生 (Sum¥631120)



自宅外生 (Sum¥129090)



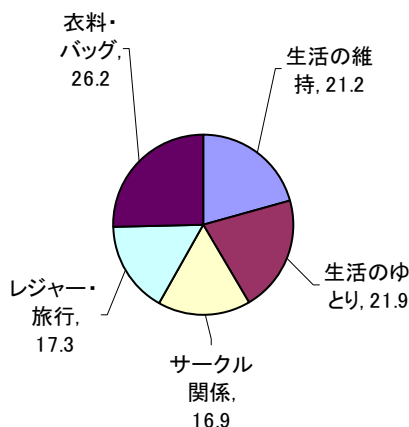
韓国 (%)



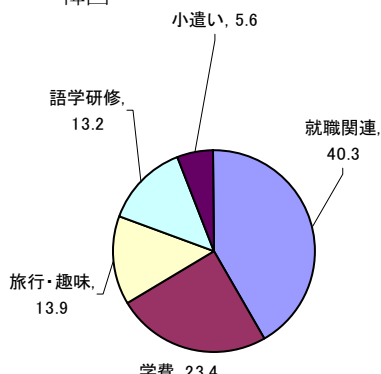
アルバイト (家庭教師も含む) をしたことがある学生 (日本) 75.2%  
(韓国) 30.1%

以上のことから日本の学生のほうが多くバイトをし、韓国の学生はお小遣いが中心となっていることがわかる。日本の学生はバイトは人間関係を広げる場でもあり生活の一部となっているが、韓国の学生はバイトは普段はせず長期休暇中にすることもあるといった程度のようなのだ。この差はどこから出てきたものなのか。

アルバイトの目的 日本

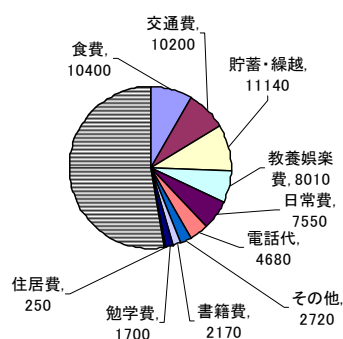


韓国

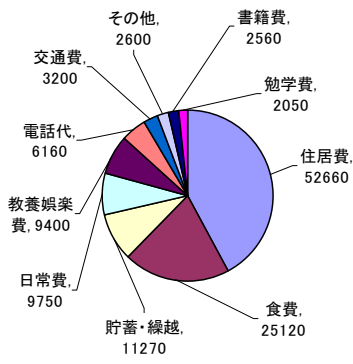


グラフから日本の学生は生活のために、韓国の学生は将来を見据え経験をつんでおくためにアルバイトをしているのだということが読み取れる。つまりバイトの目的が異なることが原因だったと考えられる。日本の学生のふところは生活のために働かなければならないほど逼迫したものなのか。支出の内訳は以下の通りである。

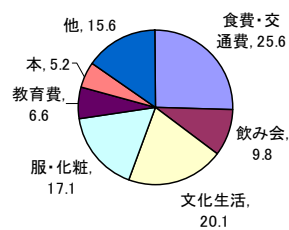
自宅生 (Sum¥58820)



自宅外生 (¥124820)



韓国の大学生 (%)



更に日本の大学生の2004生活実態調査によると、自宅外生の食費は過去十五年の中で最も少なく、半年の支出も過去十年間中最も少なかった事がわかった。収入に支出ほどの顕著な差は見られないことから、日本の学生は食費を削ってでも貯蓄にまわしているのだと考えられる。それに対し韓国では無計画で消費思考の大学生が増え、カードと過消費で信用不良者となる大学生も多く社会問題にもなっているようだ。

## 自由時間

家に帰ってからの自由時間の活用法としてインターネット、TVなどが挙げられるだろう。インターネットで利用するサービスとしてどちらの国もメール、ホームページが1、2位に挙げられ用途に大きな差はないようだ。インターネットを使う人もいれば使わない人もいる日本に比べれば韓国のほうがよりインターネットを使用するといえるかもしれない。

韓国ではテレビドラマが週2回のペースで放送され人気を呼んでいる。日本は週1回のペースで放送され韓国同様人気があるが見ない人は見ない。

以上班員のデータを軸に日本大学生協のデータ・韓国のデータを加え検証した。

データの検証のみでなく班員3名に韓国大学生1名を加えた4人で、お茶の水女子大学・早稲田大学・東京大学駒場キャンパスの3大学を回った。

### ① 授 業

実際にお茶の水女子大学での授業を体験した。韓国の大学生は授業で使われる器具(スライド等)の設備が多いことに驚いていた。ただ授業形式の講義に少し眠くなったようだ。

### ② 昼ごはん

早稲田大学のキャンパス内の学生食堂を利用した。ガラス張りの吹き抜けで、種類も豊富だった。班行動で訪れてはいないが東京大学本郷キャンパスには地下に巨大な食堂があるし、駒場キャンパスの端にはフランス料理まである。日本の大学の特徴といえる学生食堂だが、その大きさは大学の規模によって大きく異なる。お茶大は小さい。







### ③ サークル

いつも合気道のサークルが使用している東大駒場の体育館柔道場に行った。

- ④ 実際に大学を訪れた上での日本の大学間の類似点・相違点、日本と韓国の大学間の類似点・相違点を探したが、キャンパスの構造に大きな違いはないようだ。大学近郊の学生街のような存在が韓国の大学には多くみられるようであるが、日本にもそういう特色を持った大学がないわけではない。国の違いよりも大学の方針、大学の規模によって違いが出てくることがわかった。小中高と違って国の方針に必ずしも縛られずにやりたいことを選択することができる大学の特色によるものだろう。

また大学を見て回る以外に、日本の大学生が空き時間に訪れそうな場所も巡った。

下北沢 ショッピング好きは共通

渋谷 学生に金がないのは共通

表参道 ケーキ好きは共通 ※ただ、韓国には洋菓子のみを扱うよう店は多くないようだ。

## 4. ま と め

韓国と日本の大学生の生活の相違点として昼食・金銭感覚・スケジュールなどに多く異なる点も見られた。ただ、その違いはお互いの国の環境に適応し発展したものであったし、いままででは思い浮かばなかったような新しい生活の営み方を提示されたようで興味深く面白いものだった。

大学生活とは一番自分の好きなことができる時期であり尚且つ自分の将来の指針を見定め、準備する時期でもある。今回の調査で大学生へのイメージが広がり、固定観念に囚われることなく自分なりの大学生活というものを見直すきっかけにもなった。自分なりの生活を営むことはグローバルなコミュニケーションの中で必要とされる個を形成する。また、様々なコミュニケーションの中から個に気付かされる事も少なくあるまい。大学生という時期にこの調査を行えた事に大きな意義を感じた。



## データで比較する日本・タイ・中国の大学生生活

姜 燕

ケード (チャワンラット・チョンワッタナ)

中 濱 良 美

福 山 翠

### 1. はじめに

私たちの班の特徴は、タイと中国からの留学生がいることだった。テーマの決定の話合いの際、一人がテーマとなりうる言葉を挙げると、それぞれの国ではどのような特徴があるのかという話でもり上がった。その中でも特に、発表者と参加者の双方が興味をもてる内容、例えば食事や寮生活など自分たちにとって身近なテーマが調査や発表に向くのではないかと考えた。

今回は韓国との交流セミナーということだったが、タイ・中国との比較も知識が増えてよいのではないか、という意見がでた。まずは韓国側に自分たちの情報を公開し、比較してもらい、交流セミナーの期間中に情報交換しあうことを期待した。互いの国については、知っているようで実は知らないことが多いような気がするが、ニュースやドラマからは得られない情報を交換しあうことで、新しい視点から互いの国について考えるきっかけになることを狙いとした。

そこで、サークルや人間関係など自分たちが興味のある項目や、学費や授業時間など基本的に知っておきたい項目を挙げ、その中からさらに差が顕著なものを選び、比較しようということになった。客観的に比較できるように、主に数値によるデータを用いることにした。

### 2. 調査の方法

班員がそれぞれ自分の出身国の大学生生活について調べることにした。ただし、国内でも大学によって差があるので、自分が入学した大学について調べた。日本については、本校の他に全国データも引用し、より比較材料を増やそうと考えた。(ここでは紙面の都合上割愛する)

韓国については、セミナーに参加していた学生に協力してもらい、データを得た。

項 目…食堂 (店舗数・営業時間・その他の特徴)、学費、学期、長期休暇、寮 (場所・設備・費用)、先輩・後輩の関係、学校行事、アルバイト、授業時間、生活時間

調査方法…インターネット (大学のホームページ)、新入生向け資料、文献 (『キャンパ

スライフの今』1996年)

大 学 名…お茶の水女子大学 (日本)、Chulalongkorn (チュラーロンコン) 大学 (タイ)、  
威海外国語学院 (中国)、同徳女子大学 (韓国)  
配布資料…項目ごとに表にまとめた。各国とも同じ形式にして、一目で見比べることが  
できるようにした。全国データについてはグラフを作成した。  
発表形式…パワーポイントを用いて、各自が自国について発表した。主な内容は配布資  
料に掲載したため、パワーポイントは写真やグラフをメインにし、補助的に  
用いた。

### 3. 調査の結果

共通点 それぞれの項目について少しずつ異なっており、明らかに共通な点はなかった。  
ただし物価については、授業料の差は物価の差に影響されており、どの国も年  
間の授業料は1ヶ月の食費の約10～15倍 (日本での食費は30,000円と設定) だ  
った。

相違点 制 服……日本・韓国・中国→なし  
タイ→白ブラウス・黒か紺のスカート・ベルト・ブローチ  
新 学 期……日本・タイ→4月  
韓国→3月  
中国→9月  
就寝時間……日本・韓国→24時以降就寝・6時以降に起床 (夜更かし)  
中国→22時就寝・6時前に起床 (早寝早起き)  
寮の場所……日本→キャンパスの外  
韓国→なし  
タイ・中国→キャンパス内  
昼休みの過ごし方…日本→1時間、学内で友人と昼食をとる (食堂・お弁当)  
韓国→昼休みはなく、授業の合間に学外で昼食をとる  
タイ→昼休みはなく、授業の合間に食堂で昼食をとる  
中国→2時間半、  
食事のあと運動・(寮で) 昼寝・勉強をする  
先輩と後輩の関係…日本→学校で支援、講座・コース単位  
韓国→大人数で合宿  
タイ→学籍番号ごとの縦割り、密接な個人のつながり、  
一対一  
中国→年齢ではなく出身ごと

## 4. ま と め

同じ項目について比較してみて、「全く同じ」というものはない、と感じた。

国民の生活習慣や価値観、宗教や政治に対する意識も大学生活に影響しており、そのため国による違いが生じるのだということがわかった。特に昼休みの過ごし方、先輩と後輩の関係に国ごとの特徴が表れていると考えた。日本では学校のみならず企業でも昼休みの時間を確保し、昼食をとれるようにしている。他方、韓国やタイでは昼休みの時間を特別に設けることはない。中国では昼食に加えて昼寝の時間まで確保し、その後の作業効率が上がるように考慮している。先輩と後輩の関係では、日本よりも韓国や中国の方が、学生が主体的になって組織を作っている、という印象を受けた。

調査対象が、それぞれの国内にある大学全ての平均データではなく、一つの大学のデータになってしまったことは、正確なデータを得られなかったという点で反省すべきであったと思う。しかし、それぞれの国ごとに一つの大学を比較しただけでも、様々な背景が見えてくるのではないだろうか。これをきっかけに、互いの国について新たな視点から柔軟に考えることができたように思う。

## 日本の大学生活～お茶の水女子大学～

食堂	営業時間	・ リモーネ 11：30～15：00 ・ マルシェ 11：00～14：00、17：00～19：00
学費	入学金	282,000円
	半期	267,900円
	年間	535,800円（2005年度）
学期	一学期	4月～9月
	二学期	10月～3月
休み	夏休み	8月上旬～9月末
	冬休み	12月末～1月上旬
	春休み	2月中旬～3月末
		ゴールデンウィークや祝日…学校は休み
寮	人数	一部屋1人（全体400人程度）
	場所	板橋区（大学から電車・徒歩で30分程度）
	設備	風呂・キッチン共同
	門限	6：00～24：00
	寮費	月4,700円＋光熱費9,000円
先輩と後輩の関係	ピア・サポートプログラム	・ 昨年度から実施 ・ 同じ講座内で、学年を越えてたがいに支援をする ・ 委員を中心に、交流会・就職活動報告会などを実施
	T・A	・ ティーチング・アシスタントの略 ・ 各学科・コース・講座に1名ずつ ・ 院生が週一回、履修や進学について、学部生の相談にのる
行事	徽音祭	・ 11月初旬の土日2日間、模擬店・ステージなど ・ 一般の人でも出入り自由
	創立記念日	学校は休み。シンポジウムが開かれることもある
バイト		家庭教師・塾・飲食店が多い
授業時間		・ 1 講義90分 ・ 9：00（1時限）～18：10（5時限） ・ 昼休み12：10～13：20
学生数	学部生	2176名（留学生23名）
	院生	1111名（留学生158名）（2004年5月現在）
奨学生		学部生全体の約26％
生活費	支出	食費27,000円 住居78,000円 勉学費6,000円
	収入	仕送り120,000円 バイト36,000円

## タイの大学生活～チュラーロンコン大学～

食堂	営業時間	7：00～19：30
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業がないときに昼食をとる</li> <li>9：00～15：00まで授業、というような人は教室でパンを食べることも可能（先生による）</li> <li>・各学部には食堂があり、それぞれ違うメニューや名物がある</li> <li>・食堂の料理が安いので、皆だいたいご飯かラーメンを食べる</li> <li>・パンや弁当はめったに食べない</li> </ul>
学費	文系	8,000バーツ＝21,000円（半期）
	理系	12,000バーツ＝31,500円（半期）
		100円＝38バーツ、あんぱん2個＝100円
制服	あり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タイの大学はみな同じ制服</li> <li>・半袖の白いシャツ、黒または紺のスカート</li> <li>・各大学に独自のブローチとベルトがある</li> </ul>
学期	一学期	6月～9月
	二学期	11月～2月
休み	雨季休み	10月
	夏休み	3月～5月
寮	人数	一部屋4人
	場所	キャンパス内、男女別
	設備	食堂あり、バスルーム共同、キッチンなし
	門限	24：00
	特色	どの寮にも必ずお化けの話がある
先輩・後輩の関係		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部内にそれぞれ自分の「家族」のような関係がある</li> <li>・先輩は、学籍番号が同じ番号の後輩を「妹」「弟」として家族に受け入れ、面倒をみる</li> <li>・2年生「お姉ちゃん」3年生「おばちゃん」4年生「おばあちゃん」</li> <li>・入学歓迎会や卒業祝いは、みな一緒に祝う</li> <li>・必修科目は変わらないので、先輩は自分の「家族」の後輩に教科書やノートを譲る。ひいおばあちゃんの時代から受け継がれたものもある</li> </ul>
行事	創立記念日	あまり大切ではなく、知らない人もいる。休みではない
	体育大会	新入生だけのもの、全校のものがあり、学部ごとに競う
バイト		あまりやらない。やるとしたら家庭教師
授業時間		1限は8：00～、昼休みの時間は決まっていない

## 中国の大学生活～威海外国語学院～

食堂	営業時間	6：00～22：00（食堂によって違う）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・10以上の食堂があり、たがいに競争している</li> <li>・学生の民俗習慣を大切にしている（例：イスラム教徒のために、豚肉を使用しない料理を用意している）</li> <li>・現金ではなく食事専用のカードでお金を払う</li> </ul>
学費		4,000～6,000元＝55,000～75,000円（年間）
		100円＝7元 あんぱん3個＝100円
学期	一学期	9月～1月（新学期9月1日）
	二学期	2月～7月
休み	夏休み	7月中旬～8月下旬
	冬休み	1月中旬～2月下旬
		ゴールデンウィーク…学校は休み 祝日…休みじゃない日もある
寮	人数	一部屋4～6人
	場所	キャンパス内 男女別
	門限	24：00消灯
	寮費	年500～1,000元＝7,100円～14,280円 ・値段によって寮のレベルが違い、好きなところを選べる
先輩と後輩の関係		<ul style="list-style-type: none"> <li>・語学系の学部では、専攻している国の文化の影響を受ける</li> <li>・同じ出身（省や少数民族）で「老郷」という組織を作る</li> <li>・教科書を売る「古本市」が頻繁に開かれる</li> </ul>
行事	5.4青年節	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1919年5月4日の学生運動を記念して行われる</li> <li>・学生は大型公演やパーティーに参加</li> </ul>
	創立記念日	・学校は休み 「建校〇年祭」と大切にする
	運動会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・競技場で大規模に行われる</li> <li>・教師だけの大会もある</li> </ul>
バイト		家庭教師・塾以外のバイトはあまりしない
授業時間		<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学・学部によって異なる</li> <li>・8：00（1時限）～17：10（4時限） 1講義90分</li> <li>・昼休み11：30～14：00 たいてい寮や学校で昼寝をする</li> </ul>
睡眠		<ul style="list-style-type: none"> <li>・起床5：30～6：00 朝食7：00 就寝22：00</li> <li>・朝食前に運動や読書、英語の朗読をする（スポーツの効果重視）</li> </ul>
その他	政党推薦	3～4年生で優秀な者は、本人の希望で政党への入党推薦をもらえる。政治家としてではなく、政党の一員として大学に通いながら政治活動を行う。光栄なことであり、就職にも有利
	軍訓	入学すると、一定期間、軍事訓練をさせられる

# 韓国の大學生生活～同徳女子大学～

食堂	営業時間	学生食堂 10：00～6：00
学費	半期	2,543,000won（25万円）
学期	一学期	3月～6月
	二学期	9月～11月
休み	夏休み	6月末～9月1日
	冬休み	11月末～3月2日
		その他の祝日
寮	なし	
先輩と後輩の関係	O. T	オリエンテーションの略語
	M. T	メンバーシップトレーニングの略語
行事	大同祭	5月末ごろ
	學術祭	10月末～11月のはじめ
バイト		家庭教師、飲食店
授業時間		昼休みなし 7、8、9時限は夜間学部 1講義75分 9：00（1時限）～22：05（9時限）
奨学生		成績優秀奨学金 その他 奨学金 上位10%





# 大学生活のランチタイム

田 淵 雅 子  
洪 瑞 英

## 1. はじめに

韓国からお茶大に留学生として来た人たちと話してみると、お茶大での大学生活をしていて、一番印象深かったことが、お昼休みが時間割に組み込まれていて、学生たちが時間にゆとりを持って食事ができることであった。それ以外にも、日韓の様々な相違点を見つけ、興味を持ったので、この機会に日本の大学生活のランチタイムについて調べることにした。日韓のランチタイムを調べ、日韓の大学生活の相違点を明らかにすることは、日韓の相互理解を深めることに意義があると思われる。

## 2. 調査の方法

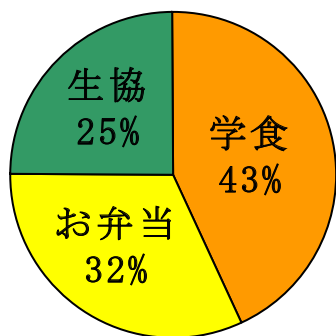
お茶大のある学科約50名を対象にランチスタイルに関するアンケート調査を行った。

他大学のランチタイムを知るために、他大学生にインタビューしたり、他大学の学食を調べたりした。

インターネットを用いて、韓国の大学生にインタビューしたり、ネットで検索したりして必要な資料を得た。

## 3. 調査の結果

### 3-1.



これがお茶大生を対象に行ったランチスタイルについてのアンケート調査結果である。

学食：学生食堂を利用

生協：校内の売店や校外で購入

お弁当：手作り弁当を持参

まず、一番多かったのが学食である。お茶大には、マルシェとリモーネという2つの学食があり、リモーネはパスタを中心としたもの、マルシェは定食から麺類や丼物などの様々なメニューを比較的安い値段で提供している。昼休みになると、非常に混雑し、席に座れず待っている人たちであふれるほどだ。そのため、ここで料理を受け取り、それを別の教室に持って行き、食べるという学生もいる。

他大学の一つの例として、東大を調べた結果、東大には学食が10個ほどあり、本格的なフランス料理を味わえるレストランや喫茶店、そしてこのマルシェのような形態をとる学食など、多彩である。しかし、学生たちが、学食などを利用し、校外まで食べに行くということは少ないという基本的なランチスタイルは同じであった。

次に、お弁当は、実家通いの人が親に作ってもらっているケースもあるが、自分で作って持ってくる人が多数である。また、お茶大ではこのお弁当を持ってくる学生の割合が多いということが、他大学と比較してみても分かった。

最後に、生協では、お弁当やおにぎり、パン、サラダなどからデザートやお菓子なども手に入り、便利なので、ここを利用する人も多い。そのため、生協も昼休みになると大混雑になる。

### 3-2.

#### 日本（お茶大）の時間割り

	月	火	水	木	金
1、2限					
3、4限					
お昼休み					
5、6限					
7、8限					
9、10限					

#### 韓国の時間割り

	月	火	水	木	金
1限 8：00～					
2限 9：00～					
3限 10：00～					
4限 11：00～					
5限 12：00～					
6限 13：00～					
7限 14：00～					
8限					
9限					
10限					
11限					

日本の大学は時間割りに昼休みが確保されている。お茶大の昼休みは12:10から1:20までとなっていて、この1時間10分というのは、他の大学と比較すると少し長く、50分程度が一般的だ。

韓国の大学では昼食をとる時間が確保されていない。そのため、韓国では空きコマに食べることになり、自分の組んだ時間割りによって、曜日ごとに変わる。空きコマがある場合は、校外に出て食べたり校内の学食で食べたりするが、ない場合は、のり巻き（ギムバプ）やパンを買って休み時間に食べたりする。

#### 4. 結論／考察

日本と韓国の大きな差というのが、昼食をとるのが、校内か校外かになる。これは、まずは、学校周辺の環境に違いがあることに気が付いた。

日本では、大学の周辺が繁華街になるということは少ないが、韓国では大学の周辺は繁華街になると一般的に考えられている。大学から一歩出れば、周りはレストラン、カフェなどの飲食店の他にも、本屋、文具店、美容室などが立ち並び、韓国のほうが、外に出て食べやすい環境になっていると言える。

また、値段の差にも関係していることに気付いた。学食や生協というのは、日本全国大学生生活協同組合連合会の一部であり、経済事業体でありながらも、利益だけを求めているわけではなく、組合員の健康や安全、勉学をサポートするという役割も担っている。したがって、比較的安い値段で安全な食べ物を提供しているのだ。韓国の大学の学食というのは、企業から入ったものではあるが、日本と同じく比較的安い値段で提供している。しかし、韓国の場合、大学周辺の飲食店は安くておいしいというのが、鍵を握っていて、学食とあまり値段が変わらない。それなら、時間があるときは、校外で食べる方がいいというふうに学生の間では考えられている。

次に、お弁当に対する日韓の相違点を見つけた。日本は買うにしても作るにしてもお弁当が多いが、韓国では買うのも少なく、大学生となると手作り弁当はほぼない。この背景を探してみると、これは文化や習慣の影響を受けているということに気付いた。日本では、お弁当文化というのが昔から定着し、今でも引き継がれていて生活に馴染んでいる。また、近年「ひとりごはん」という風に言われているように、一人でご飯を食べるのにあまり抵抗がないように思われる。お弁当というのが、一人で手軽に食べるにはちょうど良く、広く普及している。

しかし、韓国で全くお弁当が食べられていないわけではない。日本のお弁当は、弁当箱の中にご飯とおかず3～4個を一緒に詰めるというのが主流だが、韓国でいうお弁当というのは、のり巻きなのである。遠足の時は必ずといっていいほど、のり巻きを持参し、大学の周辺でも、日本でお弁当屋さんがあるようにのり巻き専門店がある。お弁当＝のり巻きと考えると、韓国でもお弁当は好んで食べられているということになる。ただ、大学

生で家から持参する人はいないので、手作りかどうかで日本とは異なる。

また、韓国では、ご飯と一緒に食べるというのが習慣である。例えば、韓国ではチゲやチヂミ、ビビンバなどを食べる時も、一つのお皿に盛って、複数で取り囲み一緒に食べるのが一般的だ。そのため、ひとりだけで食べるに適したお弁当が定着しにくいと考えられる。

この調査を通じ、大学生のランチスタイルの相違点だけにととまらず、日韓の食文化についても知ることができた。日本には古墳時代から携帯食として糰（ほししい）というものがあり、お弁当文化は予想以上に古くから始まっている。様々な変化を遂げてきたお弁当は日本の歴史を映し出しており、日本の食文化の奥深さを知ることができた。また、韓国の複数人で食べるという食スタイルは、食事を楽しむために一番大切なことを日本人に教えてくれているように思う。

これから、それぞれの長所を活かした、新しい食事のスタイルというものを築いていくことで、お互いの食文化を見直し、より深い興味を抱き、日韓の理解を深めることでより親密な交流ができると思う。



# 大 学 生 活

卞	智	慧
全	璿	姫
趙	惠	貞
金	美	政

## 1. はじめに

当たり前のことですが私たちは大学生です。何気もないように日常を過ごしていますが実はその中にもさまざまな出来事が起きているのです。私たちのグループは韓国の大学生生活知り尽くして今頃の大学生は何をしながら生活してゆくのかなぁと思い、このタイトルを選びました。

この調査によって韓国の大学生が日常生活の中何をしてすごしているかなどを調べ、残りの大学生活をもっと有意義にしようという意義があります。

## 2. 調査の方法 私アンケート／インタビュー

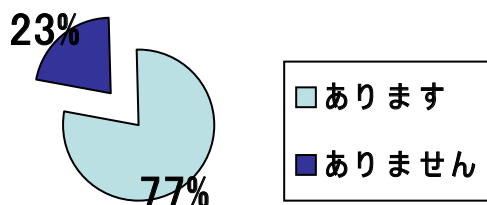
私たちの調査は基本的にミーティング、エムティ (M. T)、バイトについて調べました。これらは大学生たちが勉強以外の時間に主にすることです。これらを通じて大学生が勉強時間以外に何をするのか、なぜこう言うものをするのか調べたいと思います。基本的な内容はインターネットで調べました。各大学のホームページやサークルのホームページに入り必要な情報を切り取りました。大学生の生活について詳しい論文もないため、参考するものもありませんので直接大学生たちにアンケート調査をしたり、リサーチ専門サイトに入って資料を探したりしました。アンケートに参加した人たちはほとんどが20代の大学生たちで男が10人くらい女が40人くらいでした。参考した本とかは特にありませんが、社会科学学生たちが作成した大学生生活のレポートや資料を基に作りました。

## 3. 調査の結果

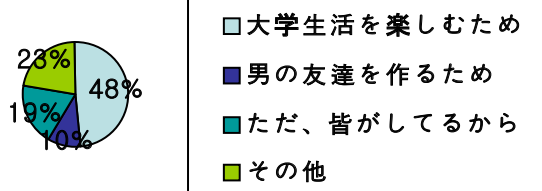
まず、ミーティングについてです。ミーティングは同じ大学または違う大学の学生同士行われます。韓国のほとんどの学生がミーティングをしたことがありました。ミーティングをする理由については大学生活を楽しむため、彼氏、または男の友達を作るためなどがありました。



### I. ミーティングの経験

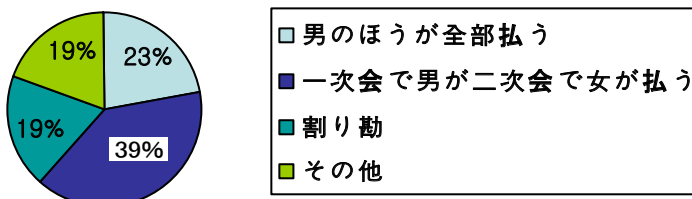


### II. ミーティングをする理由



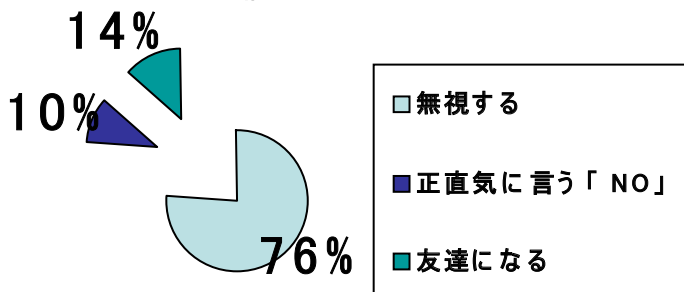
ミーティングに出て人と出会う度必ずお金を使うことになります。個と戸着お金の支払いはどうするのかと思い聞いてみました。

### III. お金を誰が払うか



グラフに現れているように男女公平精神にもとずき一次会は男子が二次会は女子が払う場合が多いようです。その他の意見には相手が気に入ったら払って相手が気に入らなかったら払わないという意見もありました。嫌いなタイプにかかった人はどうでしょう。

### IV. 相手が気に入らなかったら



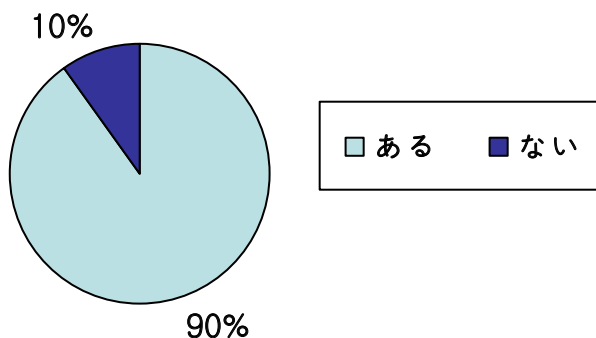
ミーティングに出たといっいつも理想的な素敵な人に出会えると限りません。時には変なのになすかれて厄介なときもあるでしょう。そんな時どうするのかも聞いてみました。ミーティングの相手が気に入らなかったら、その相手から電話が来ても電話に出ないすなわち、その人があきらめるまで無視するが圧倒的に一番多かったです。そして勇気のある人は正直に断ったりもします。

次、はエムティーです。エムティーはMembership Trainingの略語です。お互いの親密感や信頼感を高めるため学科別に学期の初めにいくことがあります。新入生はこの場を通じて先輩と知り合うことができます。人脈を注視する韓国人には欠かせない行事の一つだともいえるでしょう。エムティーに欠かせないのがお酒です。入試からの開放感によるストレス解消のためできてしまった風習でもあります。人間関係のため、短期間で親しくなる方法として愛用されています。特に新入生の場合、緊張感をほぐしてくれます。しかし、今この風習が社会的問題になっているのもまた事実です。飲みすぎで意識不明なまま死んでしまったり、転落事故がおきるなどのさまざまな後遺症があります。



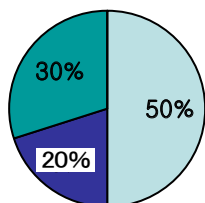
最後に大学生のバイトについてです。バイトは世界どこへ行ってもあると思います。韓国の90%の学生がバイトをしたことがあると答えました。私たちは残りの10%の人たちになぜバイトをしないのかと聞いてみました。

#### 1. バイト経験





## II. バイトをしない理由



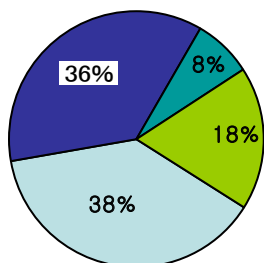
**時間的余裕がない 10人  
(50%)**

**お小遣いで足りている 3人  
(30%)**

**やりがいを感じない 2人  
(20%)**

‘勉強のためバイトをする時間的余裕がない’と答えた人がほとんどでした。そのほかおこずかいで足りていると答えた学生や、バイトをしてもやりがいを感じれないからと答えた学生もいました。

## III. バイトの種類



- 家庭教師、塾の講師
- レストラン、Beer Pub
- 企業内のInternship
- その他

バイトをしたことがある、またバイトをしている人たちにどんなバイトをしているか聞いてみました。多くの人は中学生や高校生の家庭教師をしていました。飲食店や居酒屋でバイトをしている人も見られます。大学生の家庭教師が多い理由は、何年前までの自分が受験生だったためセンター試験に詳しい、ほかのバイトよりも値段がいい、自分の勉強にもなるからなどがあります。

## 4. 結論／考察

大学生活に何の結論がありましょう。韓国の大学生たちは皆、がんばって生きているのです。自分がしたい勉強をしながら時間を有効に使って自分がやりたいことをやる……。いろんなことを経験した人こそが一人前の大人になれるのです。まだ、大学生活を楽しんでないと思っているお方は、ぜひこれらを参考にエンジョイな大学生活を送っていただきたいと思います。

## 〈セッション3〉女 性



### 着 物 と 浴 衣

脇 坂 真彩子  
永 尾 知 子  
成 セ ミ

#### 1. はじめに

今回の日韓セミナーを準備する過程で私達4班が一番力を注いだのは韓国側から来る人々に日本の伝統、日本の美しさをどうやって伝えるかということである。韓国人は日本のどういうところに関心があるのだろうか。日本のどこからどこまでを知っているのだろうか。そのようなことを考えながらいくつかのキーワードを出し、私達はいろいろ話し合った。セミナーのアカデミックな性格を活かしつつも、楽しく韓国の方々には何かを教えたあげたかった。このような考えを全て踏まえて出てきたのが今回の発表の主題、「着物と浴衣」である。昔ながらの日本の伝統、美しさを着物と浴衣を通して教え、韓国の方々にはわかってもらいたかった。着物の伝統や着物と浴衣の違い、着物の着付けなどを発表することでアカデミックな発表もできるのではないかと思った。偶然にも、着物や浴衣、衣についてテーマを決めた班もなく、班員である兵庫県の城崎温泉出身の脇坂真彩子さんが着物や浴衣に詳しくあったこともあり「着物と浴衣」というテーマでセミナーの発表をすることにした。その後、本や雑誌などを調べていく中でも、外国人が一番知っている日本語が「着物」ということがわかった。しかし、着物という言葉は外国人100人の中で99人ぐらいが知っているとしても着物という言葉以外、着物に関する他の知識、情報はほとんど知られていない。しかも私達の班の留学生である成セミさんによると、外国人は着物と浴衣の違いすらあまりわからないということであった。そのため私達はまず、昔の縄文時代から現代までの着物の歴史について簡単に説明し、その後少し変わった現代のおしゃれな着物についても説明することにした。その後で浴衣や、着物と浴衣の違いについても説明することにした。私達は、あまりにもアカデミックすぎると眠けを誘い、つまらなく感じられるだろうと思い、着物に関する〇×クイズも準備することにした。自分たちだけが前に立って発表をするのではなく、聞いている日本人も韓国人も一緒になって参加できるような、楽しい発表をしたいというのが私達の望みであった。また、せっかく着物と浴衣について発表をするので絵や写真などを見せるところで終わらず、実際に自分たちが着物や浴衣を着て発表をするほうが良いのではないかと話し合い、結局浴衣を着ることにした。同じ班の韓国人の方には花火などで着る浴衣を着てもらい、日本側の私達は湯上りの浴衣を着

ることにした。少し残念だと思ったのは、発表の中心が浴衣よりも着物であったので、着物を実際に見せたり、韓国人に着物を着させてあげたりすれば良かったということである。こうして私達は、セミナーに向けてさまざまな意見を出し合い、そして話し合いを重ね、自分たちなりに一所懸命頑張ってきた。

## 2. 調査方法

以上をふまえ、私達はできる限り着物と浴衣を身近に感じてもらうことを目標として、調査を行った。無論、私達自身も着物と浴衣に精通しているわけではないため、まず基礎知識の習得から始めた。着物と浴衣の歴史を紐解き、その次に現代の着物がどう変化していったのかを調べ、実際に着て、私達自身も親しんできたところで、実際に老舗の呉服屋を訪れることにしたのである。

歴史などの知識面では、本、雑誌、インターネットなどを主な手段とした。また、浴衣のシーズンであったため、デパートの浴衣コーナーに足を運んだ班員もいた。脇坂さんの両親が浴衣について詳しくあったため、そこからの情報も得た。着物や浴衣は日本の伝統的な服飾であるにもかかわらず、意外にも知らない事が多く、勉強になった。

知識や写真だけでなく、実際に着てこそ素晴らしさが伝わる。その思いから、浴衣を実際に着て発表をすることにしたのは前述の通りだが、これが実に良かった。袖から入りこむ風は本当にすがすがしく、その着心地は、まぎれもなく浴衣の良さそのものであった。浴衣の素晴らしさを、まさに身に染みて感じた瞬間だった。韓国側の学生にも実際に着てもらったのだが、彼女も非常に喜んでいて。百聞は一見に如かずとは、まさにこのことであらう。

こうして得た浴衣への親しみ、知識を携え、私たちは最後のステップとして銀座にある創業300年の老舗「くのや」さんに赴いたのだった。実際に一級品に触れることは、セミナーのきっかけが与えてくれた、素晴らしいチャンスであり、これは知の財産になっていく。これこそ着物のプロフェッショナルな調査方法であると考えます。

## 3. 調査の結果

まず、今回のセミナーで扱った「着物と浴衣の歴史」についての記述をする。学術的な面からみた着物ということで、時代をおって紹介していく。

着物の起源は紀元前一万年前、日本の呼び方でいうと縄文時代と呼ばれる時代から始まる。

当時、まだ布を織る技術などはなく、衣服の形態をしていなかった。獣皮、羽毛、樹皮などを利用して腰部を覆っていたものと思われる。弥生時代に移ると、衣服の形態をしたものになっていく。この時代、女性は布の中央に頭を通す穴をあけて着用した貫頭衣、男性は一幅の布をそのまま巻き付けた袈裟衣というものを着用するようになる。3世紀ごろ

になると、女子は衣裳（きぬも）という上衣とスカート形式のもの、男子は衣襖（きぬばかま）という上衣とズボン風の下に分かれた二部形式の衣服をきるようになった。これは大和時代が、韓国を通じて大陸との交流もさかんに行われた時代であったことが大きく影響していると思われる。一方、奈良時代になると、直接中国と交流するようになり、文化などすべてに渡って中国の模倣をするようになり、支配者階級の服装も中国のものをそのまま取り入れたものへと変化していった。しかし、この流れも平安時代になると、九世紀末に遣唐使が廃止されたことにより、次第に薄れていく。国風化の傾向が強まり、衣服も自然、日本の風土に適した形態へと変わっていった。たとえば、衣服は風雅を好む公家達によって日本独特のものが生まれた。

鎌倉から室町時代になると、衣服は武士の生い立ちを示す庶民服へと移行し、より人々の生活に身近なものになっていったようだ。日常的な狩衣や武士の平常服や直垂なども誕生し、女性の服装も儀礼的な裳や袴が省かれ、小袖が表にあらわれるようになった。

その後も服飾の主役は小袖であり、この基本的な形は現代でもあまり変わっていない。このころ、染織技術が飛躍的な発展をみせた。染色技術は小袖の模様の上にもあらわれ、生きいきとした美しさをふりまいたものが多く出回った。

1600年代にはいと、服装は町人の財力と趣味とを反映するようになっていき、大名、旗本などの武家階級が貧しくなるに従い、豪華な町民服飾があらわれるようになった。江戸時代には着物は人々にとっての日常服であった。

しかし、明治時代に入り、開国を余儀なくされてから、西洋からさまざまなものが日本国内に流入したことによって小袖の流れが洋服と合流することになった。初期には洋服文化が日本に溶け合わず不自然さをみせていたが、やがて融合していくことになる。さらに、大正以降になると、女子が職業を持つようになったことや、洋行帰りの外交官婦人などから洋装が広まっていく。このころ、人々の日常服は洋服へと移行した。一方で、着物は高価なことに加えて着付けが難しいことなどから、徐々に敬遠され、第2次世界大戦後には着る人がめっきり少なくなってしまった。私たちが洋服を日常的に着るようになってから、着物はさらに儀礼的な、特別の意味をもったものへと変化した。

また、浴衣について少し触れておく。浴衣は従来、江戸時代に入浴時に着ていた単衣の木綿の着物のことをさし、「湯帷子」と呼ばれていた。しかし、着ると涼しいことから徐々に入浴時などに関係なく夏に着られるようになり、現在の当て字「浴衣」になった。これも時代の流れによる適応であろう。

このような経緯を経て、現在の着物、更には浴衣が生まれるに至ったのである。現在、私たちが日常的に着物を着ることはほとんどない。しかし、七五三や成人式や、結婚式など儀礼的な場所では着物を着ているのであり、その文化的位置づけは変わったとしても、私たちが、今なお着物に魅力を感じていることに変わりはない。着物の伝統はこれから先も継承されていくだろう。何千年もわたって歴史が移り変わるに連れて、日本人にとっての着物の文化的位置づけも変わったが、わたしたち日本人にとって着物は精神に根付いた、誇るべき遺産であるのではないか。

次に、本やネット、フィールドワークにおいて得られた最近の傾向について記述する。現在、若者のなかで新しい形としてのスタイリッシュな浴衣が注目を浴びている。たとえば、レースをつけたたり、帯にかんざしを付けたり、色もカラフルなものになってきている。また、銀座の老舗「くのや」さんの店員の方の話によれば、今年の注目される傾向は、へこ帯やムーンライトと呼ばれる蓄光糸をつかった“夜光る帯”だという。また、今年の着こなしは「浴衣を着物のように着る」と言うのが一種のテーマになっており、生地は浴衣なのだがデザインは着物風なものや帯締めをつけるのがスタイリッシュとされる。このような形で私たちは変化の中で、浴衣にも新たな楽しみを開拓し続けている。

これから先も着物の伝統は継承されていく。それはさまざまな情勢変化の中で新しい形を付け加えながら、その時代時代に適した形で完成されるだろう。しかし、着物の伝統は消えることはない。私たち日本人にとって着物はいつまでも魅力的なものであると改めて実感する。



#### 4. 結論／考察

今回のセミナーではとても貴重な体験ができたと考える。外国人が日本という国を思い浮かべるときに一番に思い浮かべるもの、それが「着物」であるにもかかわらず、実際には自分たちが着物についてほとんど知識を持っていなかった。それを調べていくことを通して、より着物が日本人にとって重要な意義のあるものだとの認識させられた。また、銀座の老舗「くのや」や「阿波屋」を訪れた際には日韓交流セミナーという名目でとても詳しく説明していただくという幸運に恵まれた。

また、今回のセミナーで、私たち3人が当初からめざしていた「着物を通して、韓国から来る人々に日本の伝統、日本の美しさを伝えたい」というテーマに沿った発表ができた

のかどうかは明確ではないが、私たち自身楽しく発表することができたことはとても嬉しく思う。今回日本に来てくれた韓国の方たちは日本語学科の方ということで、日本語も驚くほどうまく、日本の文化、事情についても精通しているということだったので、あえて学問的な内容を取り上げた。日本の最も伝統的な文化の象徴である「着物」を通して、韓国の方々が、より日本文化の美しさを感じ、日本という国に興味を持ってくれることを望んでいる。







# 仮面の美～化粧で華麗に変身！～

實 方 鮎 美  
引 地 多佳子  
洪 玉 苓

## 1. はじめに

日本で一番若者が集まっている街―渋谷―を歩いていると、女性たちの化粧の仕方が違っていているということを発見した。一時ブームになった顔黒を塗っている人もいれば、女性タレントのように自然に化粧している人もいる。デパートや店を巡っていても、化粧品が溢れるほどずらりと並んでいる状況を目にした。女性にとって、化粧と化粧品は確かに魅力的である。化粧品メーカーもそれを商機とみなして、絶えず新しい化粧品を押し出している。また多くの女性が人の前で必ず化粧するというイメージがあるが、素顔をみると驚く時がある。例として、あるテレビ番組でスタッフが女性タレントの寝起きのスッピン顔を映すため、いつも朝早く起き部屋にこっそり入っていく。そうすると、素顔とテレビに映る顔とではかなり差があり、化粧は本当に魔法のようである。否定できないことに、顔がどんなに普通であっても化粧道具や色を使ったら、別人になる可能性が高いと私たちは信じている。いや、多分90%以上の女性は信じているだろう。化粧というのは、女性にとって、かけがえのないものだろう。

では、女性たちはどうして化粧を必要としているのだろうか？化粧する女性たちには、どんな意識を持っているのだろうか。今回の調査によって、女性たちが抱えている化粧意識を明らかにしたい。調査研究をすることには、女性にとっては化粧というのはなんだろうかと改めて考えることができ、また男性にとっては自分のためにも他人のためにも化粧する女性の努力を分けることができる。

## 2. 調査の方法

今回の調査方法としては、アンケートとインタビューで行った。アンケートの対象としては、お茶の水女子大学の日本人女性で、年齢不問である。私たちが調査用紙を作り、皆に答えていただいた。調査時期は2005年5月27日から二週間で、回収したアンケートは35人分ある。

また、インタビューはデパートの化粧品売り場の店員を対象としている。日本にある化粧品ブランドが多いため、日本製かつ化粧品や化粧道具が多い「Shu uemura」を選定する。インタビュー内容について、現在の化粧ポイントや化粧の仕方の変遷などを中心としてい

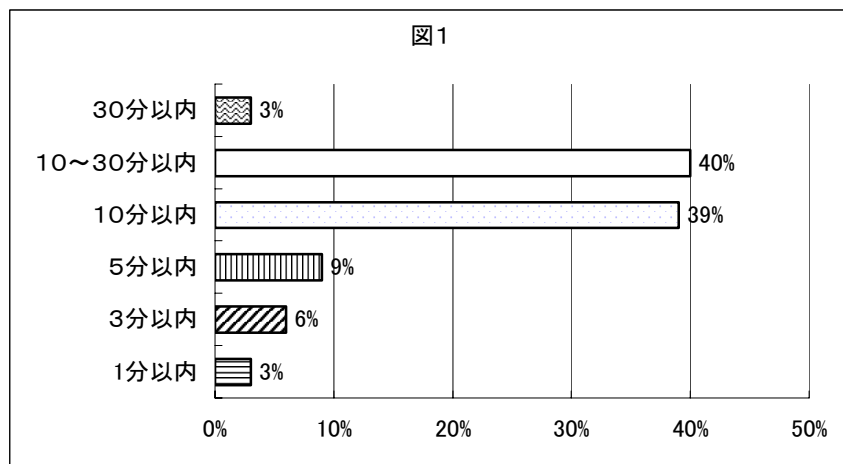
る。

### 3. 調査の結果

#### 3.1. アンケート

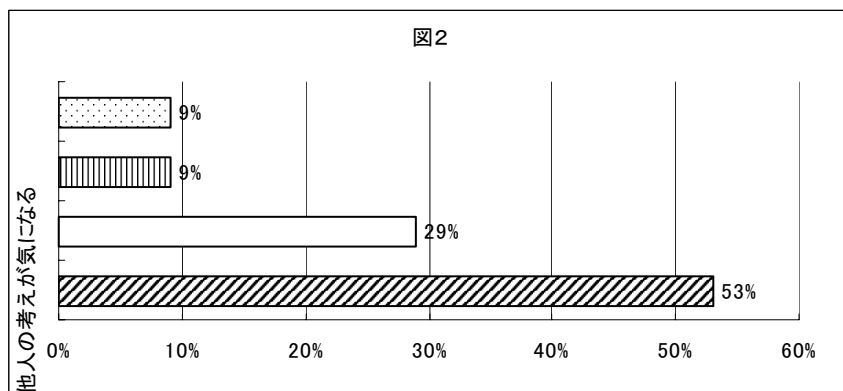
現在の化粧について、私たちは、お茶大の日本人女性35名対象にアンケートを実施した。全部で5問あり、結果をそれぞれ図にまとめてみた。

まず一問目、「毎日化粧にかかる時間はどれくらいですか？」という質問に対して、1分以内、3分以内、5分以内、10分以内、10～30分以内、30分以上、と予め私たちが決めたものを皆さんにチェックしていただいた。結果（図1を参照）、一番多かったのは、10～30分以内（40%）、次に多かったのは、10分以内（39%）だった。

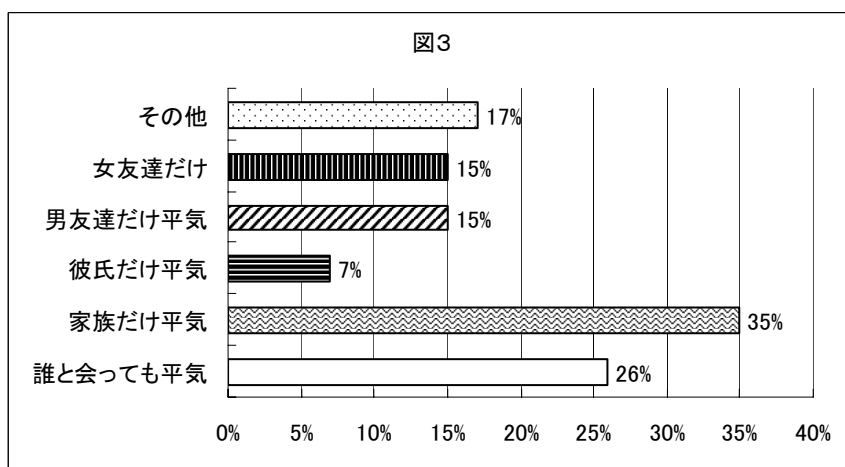


二問目、「何のために化粧をしますか？」という質問に対しては、自由に書いていただいた。これは、様々な回答があったのですが、インタビューした後で、それぞれ「他人の考えが気になるから」と「自分のため」と2つに私たちが分けた。その結果（図2参照）、「他人の考えが気になるから」が一番多く53%、「自分のため」が29%だった。また、「自分のため」と選んだ理由には、「やる気をだすため、UV対策、自分が好きだから」というのがあり、「他人の考えが気になる」と回答した人たちの理由は、「エチケット、人に害を及ぼさないように」などが挙げられた。また、「その他」では、「習慣」というのもあった。

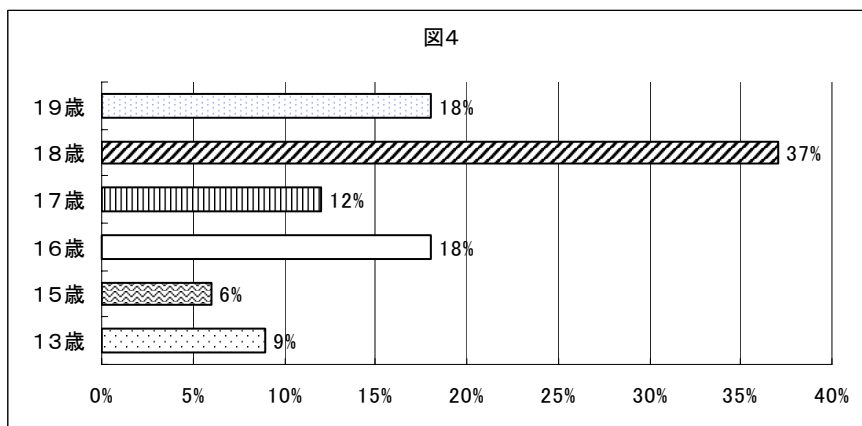




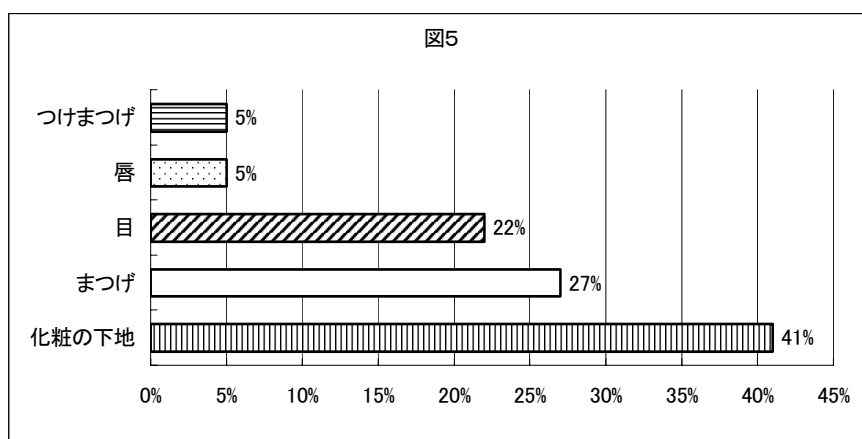
三問目、「スツピンの時あなたは人と会うことが平気ですか」という質問に対して、誰と会っても平気、家族だけ平気、彼氏だけ平気、女の友達だけ平気、男の友達だけ平気、その他と、予め私たちが回答を作っておき、チェックしていただいた。その結果、(図3参照)「家族だけ平気」が一番多く35%、意外にも「誰と会っても平気」が次に多く26%だった。



四問目、「化粧は何歳からはじめましたか」という質問に対して、自由に書いていただいた。その結果(図4参照)、お茶の水女子大学の女性は、殆ど18歳から化粧をしており、つまり高校が終わってから、し始めることがわかった。しかし、全体的に見れば、中学校から化粧するほうが多いといえる。



五問目、「化粧で一番力を入れるのはどこですか」という質問に対して、予め私たちが回答をつくっておき、チェックしてもらった。その内容とは、化粧の下地、目（アイシャドー、アイライン）、まつげ（マスカラ、つけまつげ）唇、その他だ。その結果（図5を参照）、お茶の水女子大学の女性は殆ど化粧の下地に力を入れることがわかった。もともと私たちは目やまつげのほうが多いと予測していたが、意外にそういう結果ではなかった。



### 3.2. インタビュー

最近の化粧のポイントや流行色について、デパートの化粧品売り場「Shu uemura」の店員さんにお聞きした。

「最近のポイントは何か」と尋ねたところ、インタビューした時期は7月上旬だったが、「6月までは美白を中心に行っていましたが、7月も続けています」とのことだった。「流行色は何ですか」と聞いたところ、「今はグリーン、ブルーが売れ、パープルとゴールドは一年中売れる」とのことだった。しかし、日本人に似合う色は決まっていないようで、

肌色、髪の色、ひとみの色によって人それぞれ違うそうだ。また、「他に変化したことは何ですか」と尋ねたところ、「昔リップグロスなどは色が目立たなかったが、最近は割とはっきりした色を使うようになった」とおっしゃっていた。つまり、総合的に言うと、自分にあった、自然に化粧をつけることが大切であると分かった。

#### 4. 結論／考察

アンケート調査や実地調査を終えて、化粧の持つ役割やその活かし方について、考え、「真の女性」とはということについて考えてみた。

今回は化粧をする対象を女性に限定して考えてみたが、自分のために化粧をする女性が最近では増えてきている。というのも、そもそも、化粧の目的は、種族の違いを証明するためのものであった。時代を経るにつれ、身分を表現するものへと目的が変化していき、昭和に入ると、女性の社会進出が進む中で、人に会う時の礼儀の一つとして、化粧が行われるようになった。このように、常に相手を意識して、化粧をする女性が多かった。しかし、現在では、時や場所に合った適切な化粧を、自分なりの感覚・センスで自由に行うことにより、自分自身が楽しむために化粧をする女性が増えてきた。つまり、常に相手にどう思われるかというのはもちろんであるが、それ以上に、自分のために、おしゃれの一つとして化粧を楽しむ方向に変わりつつあるのだ。

このように化粧をすることは、「自分のために楽しむもの」ととらえることができる一方で、「素顔を隠すことができるもの」ともとることができる。つまり、自分のありのままの姿ではなく、気に入らない部分を隠そうとして、化粧をするということも考えられる。もちろん、外見をきれいに見せたり、自分の見られたくない部分を隠すために化粧をしたりすることで、自分の気持ちに変化を持たせることになる。しかし、化粧がうまくいき、気持ちが盛り上がるためには、肌の調子も含め、自分の体調なども整っていることが大切なのである。やはり、気持ちを伴ってこそ、さらに自分に自信を持ち、プラスになるのだといえる。実地調査の時に、お話をしてくださった店員さんも話されていたが、どんなに化粧をきれいにする技術を身に付けたとしても、その技術以上に大切なのは、毎日の洗顔や肌の手入れなど、基礎部分であるのだ。今回のサブテーマとして、「仮面の美」あげたが、化粧というのは、いい意味でも、悪い意味でも、自分を隠す事ができる「仮面」の一つであるとも言える。本来は「仮面」がなくても自分のありのままの姿を表現できればいいのだろうが、まずは、化粧をすることで、自分を盛り上げつつ、その上で、自分の内面も磨いていく事が大切なのだ。その一つのツールとして、化粧があるのである。しかし、内面を鍛えるためには化粧だけでは、不十分である。何らかの教養、常識、優しさ、そのようなどできるだけ幅のある女性になることで、真に輝く女性に成長していくのだと思われる。

今回のセミナーを通して、韓国と日本の双方の新たな一面を知る事ができ、内面を多少なりとも充実することができたように感じる。外面でも、それぞれの化粧や服装などの特徴を見つけられたのではないだろうか。セミナー活動などの様々な活動を通して、内面と

外面のどちらかに偏るのではなく、ともに輝くように女性としての生活を続けていくことで、「真の女性」に近づいていくのだろうとし、今回の活動のまとめとする。



# 日本の大学生の恋愛事情

思 勤  
佐々木 えりか  
高 原 友 美

## 1. はじめに

近年日本では『冬のソナタ』をはじめ韓国の恋愛ドラマが人気である。そのブームはだいぶ落ち着いてきたとはいえ、ほぼ毎日テレビでは韓国のドラマを目にすることができるほどである。どの国や文化でもTVドラマや映画などにはその国の独特の考え方や行動様式が反映されやすい。『冬のソナタ』があればほど人気になったのは中高年の女性に昔の恋愛を思い出させたからだ、という説があるが、では韓国と日本では恋愛の仕方や恋愛に対する考え方にどのような違いがあるのだろうか。それを知るためにまず日本の大学生の恋愛スタイルを解明することにした。

また、大学生である私たちにとって恋愛はもっとも興味のあることのひとつで、それはおそらく日本も韓国もかわらないだろう。日本の大学生の恋愛スタイルや恋愛・結婚に対する考え方を紹介することで、ガイドブックや教科書ではわからない日本の若者文化を知ってもらいたい。

## 2. 調査の方法

WEBから引用したアンケート調査と私たちの身の回りの大学生を対象にしたインタビュー調査の二種類を行った。アンケートではより広範囲の大学生の本音を知ること、インタビューはより詳しい大学生の本音を聞くことを目的とした。

### 1) アンケート調査

このアンケート結果は<http://www.ritsumeai.ac.jp/ba/~mozawa/mr/wedding.pdf>から抜粋したものである。標本対象は大学生200名で、そのうち男性45%、女性が55%である。質問内容は、以下に説明する5つの質問を選び、大学生の恋愛事情を統計の結果から数量的に探ることをねらいとした。

### 2) インタビュー調査

- 男性3名（24歳・男性／大学生）（23歳・男性／大学生）（20歳・男性／大学生）
- 女性5名（24歳・女性／大学院生）（20歳・女性／大学生）（20歳・女性／大学生）

(22歳・女性／大学生) (21歳・女性／大学生)

※お茶大を含む東京都内および東京周辺のいくつかの大学。

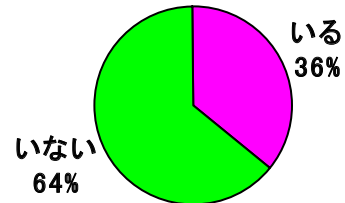
●調査時期 2005年 5 月

### 3. 調査の結果

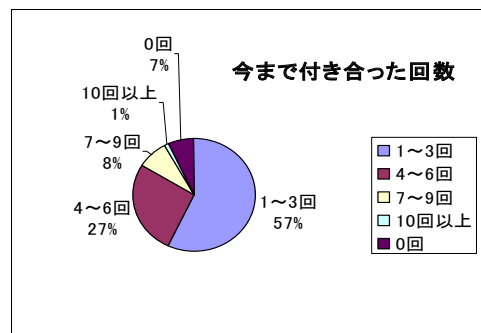
#### 彼氏・彼女の有無

#### 1) アンケート調査の結果

質問 1：まず、「現在彼氏または彼女がいますか」という質問に対して、「いる」と答えた人は36%、逆にいないと答えた人は64%であった。恋愛は大学生活の中でも重要な要素の一つであるが、この結果から、意外にも大学生活で恋愛を楽しんでいる人の割合は少ないということがわかった。



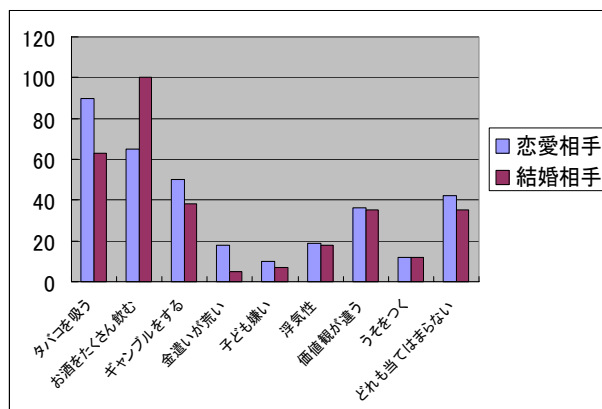
質問 2：次に、「今まで何人の人と付き合ったことがありますか」という質問に対しては、「1 回から 3 回」と答えた人がもっとも多い57%、次いで、「4 回から 6 回」と答えた人が27%いた。また「今まで付き合ったことがない」という人は7%しかおらず、ほとんどの大学生にはすでに恋愛経験があるということがわかった。



質問 3：次に、いくつかの項目の中から、結婚相手と恋愛相手それぞれについて、許せる性格・習慣として、今まで付き合った恋愛相手については当てはまる項目、理想の結婚相手に対して許せると思う項目について選んでもらった。(ただし、複数回答してもよい。)

この結果は、次のように見ることができる。たとえば、「タバコを吸う」ことに対しては、今まで付き合った人がタバコを吸っていたと答えた人は90人ほどいたが、理想の結婚相手に対し、タバコを吸ってもかまわない、と答えた人は約60人だった。つまり、理想の結婚相手に対しては今まで付き合った相手よりも条件が厳しくなっているといえる。

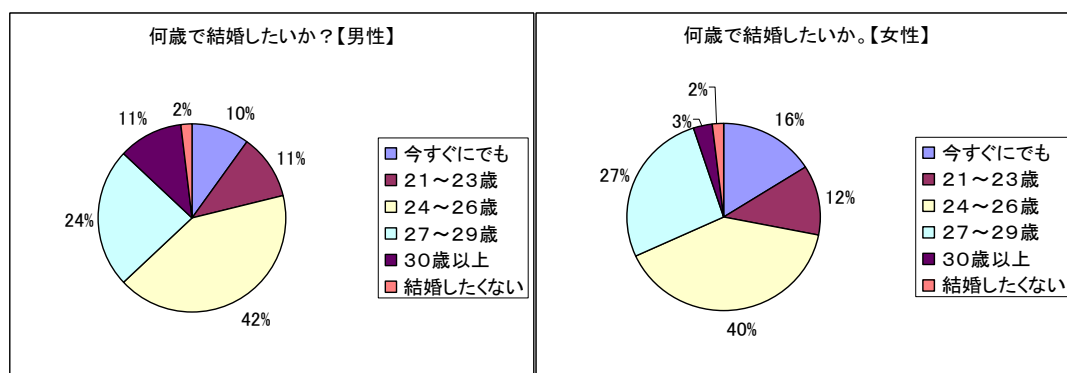
逆に「お酒をたくさん飲む」ことに対しては、理想の結婚相手に対して許せると答えた人が多く、「お酒をたくさん飲む」ことに関して大学生はそれほど厳しく考えていないということが言える。



質問4：大学生の結婚観について、

「何歳で結婚したいですか」という質問に対しては結果に多少の男女の差が見られた。

まず、男女とも、結婚したい年齢でもっとも回答が多かったのは「24歳から26歳」だった。合計すると、20代のうちに結婚したいと考えている人は男性では全体の87%、女性の場合は全体で95%もあり、非常に高い数値である。このように、結婚したい年齢には男女の差はあまりないが、ほとんどの女子学生が20代のうちに結婚したいと考えていることから、女性の方が結婚年齢に対してより執着心が強いといえるだろう。また、結婚したくないと答えた人は男女両方ともほとんどいなかったことも注目すべきことである。

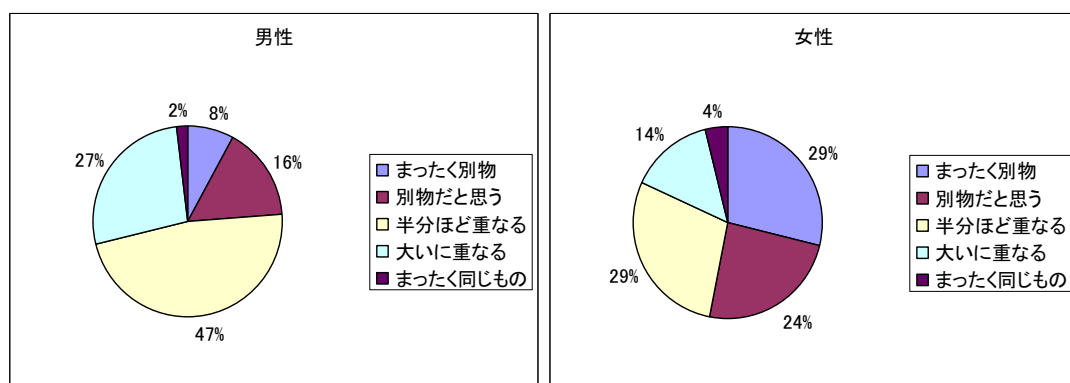


質問5：最後の質問は「結婚相手は恋愛相手と違いますか」というものだが、この結果も男女の間に違いが見られた。

たとえば、男性の場合、「半分ほど重なる」と答えた人が47%と、半分近くを占めている。「大いに重なる」と答えた人を含めると、結婚相手と恋愛相手は同じである、と考えている男子学生は全体で4分の3いることがわかる。

しかし、女性の回答では、恋愛と結婚を「まったく別物」あるいは「別物だと思う」と答えた人が約半数いた。男性では、恋愛相手と結婚相手は同じと考えている

人が大半であったことと比べると、男性と女性の間には、結婚についての考え方に大きな差があることがわかる。この理由としては、結婚したら男性は家族を養っていく・女性は養ってもらう、というように特に経済的な面での結婚に対する根本的な意識の違いが、男女の差に出たのだと考えられる。つまり女性にとって結婚とは、相手に自分の生活の面倒を見てくれるという保証があって初めて成立するものである、という考え方がいまだに残っているのではないだろうか。



## 2) インタビュー調査の結果

質問1：「今、彼氏または彼女がいますか」という質問に対して、YESと答えた人は4人で、NOと答えた人も4人だった。

YESと答えた人には「どこが好きですか？どこに惹かれましたか」という追加質問を行い、23歳の男子大学生は「若さ」、24歳の女子大学院生は「自分と価値観が合うところ」、20歳の女子大学生は「面白いところ、自分と感性があっているところ」、22歳女子大学生は「気が利くところ」と答えた。

NOと答えた人に対しては「理想な相手はどんな人ですか？」という追加質問を行い、20歳の女子大学生aは、「経済力がある人、自分を尊重してくれる人」、21歳の女子大学生は「自分のことを認めてくれる人」と答えました。また、20歳の男子大学生は「理想の相手は特にいない」と答えた。

質問2：「結婚相手は自分で選びますか」に対しては、4人は自分で選ぶと答えた。

YESの理由として、20歳の女子大学生は「それが普通だから」、23歳の男子大学生は他人に人生を決められるのがいやだから、24歳の男子大学生は自分の気に入らない人と結婚したくないが金持ちだったらよい」と答えた。

NOの理由としては、22歳の女子大学生は「自分の両親もお見合い結婚だけど、仲がよいので、お見合いも、別に悪くないと思うが、最終的判断は自分一人で決めたい」と答えました。21歳の女子大学生は「自分で決めたいが親がうるさいので完全に自分で決めるというわけにはいけないかもしれない」、24歳の大学院生は「結婚するつもりがないので、なんとも言えない」と答え、また、20歳の男子大学生は「状



況次第」と答えた。

質問3：「パートナーの許せない習慣や性格は何ですか？」という質問に対し、20歳の女子大学生は「浪費、怠け者」、21歳の女子大学生は「自分勝手」、23歳の男子大学生は「電車内で大声で話すこと」、24歳の男子大学生は「自分の責任を転嫁する人」、22歳の女子大学生は「一緒にいるわけではないので、あまり気にならない」24歳の女子大学生は「気にならない」20歳の男子大学生は「状況次第」20歳の女子大学生は「服を脱ぎっぱなし、出したものを片付けない」と答えた。

質問4：「結婚相手と恋愛相手は一緒ですか？」という質問に対して、YESと答えた人は2人だけだった。

YESの理由24歳の男子大学生は「恋愛の延長線は結婚だから」21歳の女子大学生は「結婚してもいいと思える人と恋愛したいです」。

NOの理由20歳の女子大学生は「恋愛は楽しむもの、結婚は人生にかかわるもの」、23歳の男子大学生は「理想と現実違うから」、20歳の女子大学生は「結婚は契約、惚れただけではだめ」、24歳の女子大学院生は結婚しないと決めているので恋愛相手は結婚相手にならない」、22歳の女子大学生は「結婚したいと思う時期が来たら、そういう視点で相手を探す」と答えた。なお20歳の男子大学生は、状況しだいと答えた。

質問5：「いつか結婚したいですか？」という質問に対しては、20歳の女子大学生2人が結婚したいと答え、21歳女子大学生は「30歳くらいまで働いた後ならしたい」と答え、残りの5人は「したくない」、あるいは「わからない」と答えた。

YESの理由として20歳大学生は「さみしいから。」、21歳女子大学生は「30歳くらいまで働いたあとなら」20歳女子大学生は「子供がいなかったら老後寂しいかもしれないから。」と答えた。

NOの理由として24歳女性の大学院生は「結婚願望はない」、24歳男子大学生は「自分みたいに苦労させたくない」、23歳男子大学生は「一度失敗しているから」、また、22歳女子大学生は「まず働きたいので、結婚のことはまだ考えてない」、20歳男子大学生は「先のことはわからない」と答えた。

## 4. 結論／考察

### 1) アンケート調査から

現在、付き合っている人がいると答えた人は意外に少なかったが、ほとんどの人に恋愛経験があることから、基本的には大学生活には恋愛が付き物だといえる。また、結婚観としては、20代のうちの結婚を望む大学生は多いが、恋愛相手と結婚相手を分けて考える女子学生が多いことから、20代のうちに結婚したいといっても、今すぐに、というわけでは

なく、漠然とした結婚願望であると見ることができる。

## 2) インタビュー調査から

8人の調査対象のうち彼氏がいる人といない人は1：1だった。今回の調査により、理想の相手は経済的にも、社会地位的にも自分と同じレベルかより高いレベルの人が好ましいと考える学生が多いことがわかった。また、結婚相手自分で選ぶのは50%だった。この現代において、少し意外な結果となった。恋愛と結婚は別に考える傾向が強く、結婚したくない人は半数以上いたこともわかった。

以上の調査より、私たちのグループは以下3つの特徴を見つけることができた。①日本の大学生は、恋愛観と結婚観に差がある。特に女性にその傾向がある。②結婚願望自体は少くない。③男女ともに現実思考の傾向が強い。

国際化が進んだ現代では日韓の文化の交流も盛んになり、韓国と日本の学生が相互に行き来するようになった。それに伴って、これからもっともっと日韓の若者の出会いの機会も増えるのではないだろうか。お互いの恋愛スタイルをよく理解して、より良い友情を築くことが出来ると良いと思う。



# 女性の仕事と晩婚化について ～日本の負け犬現象を通して～

石 原 翠  
金 亮 善

## 1. はじめに

女子大生の多くが将来仕事もして結婚もして自分の夢をかなえたい！と思っているはずだ。結婚と仕事、それを両立させるためにはどのような困難があるのだろうか？キャリアウーマンとしてバリバリ働いて、かつ素敵なパートナーと結婚し家庭を築き幸せになることは本当に可能だろうか？

日本の社会問題として晩婚化が挙げられているが、昨今結婚している女性、していない女性を勝ち犬・負け犬と命名し、なぜキャリアウーマンが結婚できないのか新たな観点から分析する『負け犬の遠吠え』というエッセイが現れた。私たちはこの本を通してなぜ働く女性の婚期が遅くなるのかを真剣に考えてみることにした。

## 2. 調査の方法

我々ははじめに雑誌の記事やインターネットなどから女性の仕事と結婚についての資料を集め始めた。『負け犬現象』については現在とても注目されているので大学の図書館にある雑誌の中から関連した記事を見つけることができた。

その雑誌は以下の三冊である。

『YomiuriWeekly』 2005年2月20日発行

『marie claire』 2005年3月1日発行

『marie claire』 2005年5月1日発行

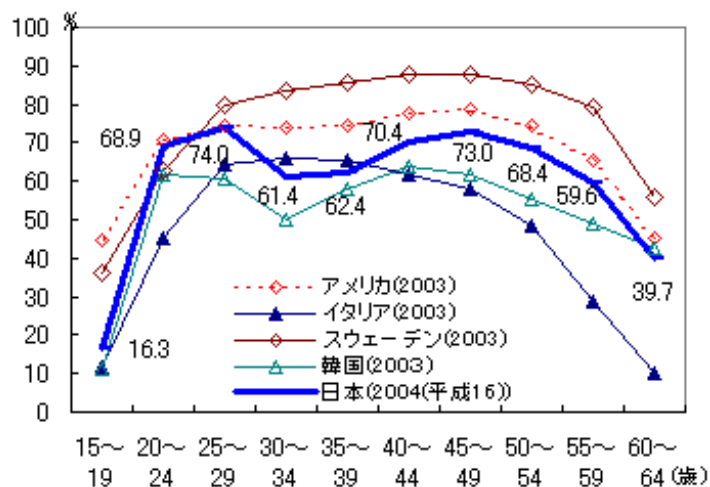
また、補足として男女平等参画に関する図書・行政資料が多く所蔵されている図書館（東京ウィメンズプラザ）で資料を探し考察をする際の参考にした。

『結婚の比較文化』 小檜山ルイ、北條文緒編 2001年 勁草書房

次に、晩婚化と女性の仕事についてエッセイだけではなくインターネットで総務省統計局の「労働力調査」、男女共同参画社会に関する世論調査（平成13年9月）や厚生労働省のホームページを検索、資料の参考にした。厚生労働省の雇用均等・児童家庭局では、毎年、働く女性に関する動きを取りまとめ、「働く女性の実情」として紹介している。負け犬についての考察を始める前に、政府が女性の晩婚化と結婚についてどのような調査を行っているか、またその調査結果から分析したことを紹介したい。

### 3. 調査の結果～働く女性の現状 国際比較～

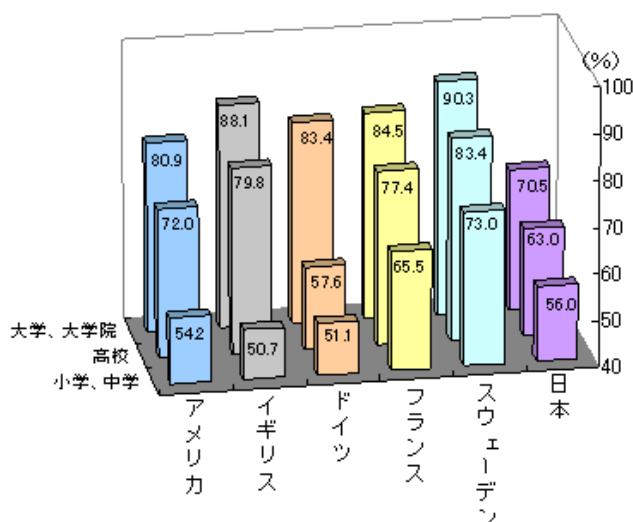
#### 女性の年齢階級別労働力率 国際比較



M字型のグラフになっているのは諸国の中では日本、韓国の2国のみである。その他はU字。つまり先進各国では結婚出産、育児期においても労働力率の現象は見られない。

しかし、さすがに近年はそのM字型の谷の部分も上昇傾向にある。30～34歳の労働力率さえも60%を超えている。M字型が消えつつあるがその理由は結婚、出産、育児と仕事との両立が進んだ事によるものではなく、晩婚化とそれに連なる晩産化によって結婚、出産年齢にばらつきが生じたからである。

#### 女性の学歴別労働力率 国際比較 (25～64歳)

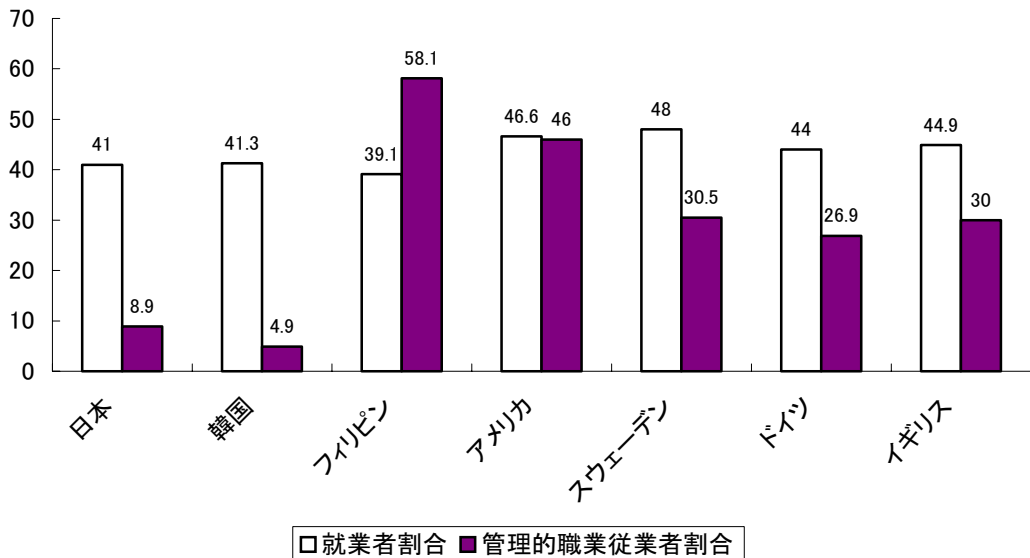


日本以外の国においては大学、大学院卒の女性の労働力率は8割を超えている。日本の労働力率が低い理由はなぜなのだろうか。会社で女性に重役を任せがらない現状やまたは日本の言葉にある寿退社のように結婚したら仕事を止めるのが当然だと言う考え方が女性を働けない様にしているのではないだろうか。

高学歴の人材の労働力率が低い事は、国家の発展などにおいても他国のそれに比べ特にこれから大きな差が出てくると思う。

厚生労働省の「男女間の賃金格差問題に関する研究報告」の内容によると、職階別に女性の割合は部長3.1%課長4.6%係長でもわずか9.4%に過ぎないと書かれていた。仕事をすすんで、女性の会社内、または社会での地位や立場は保証されていないのではないだろうか。

### 女性の就業者割合と管理的職業従業者割合



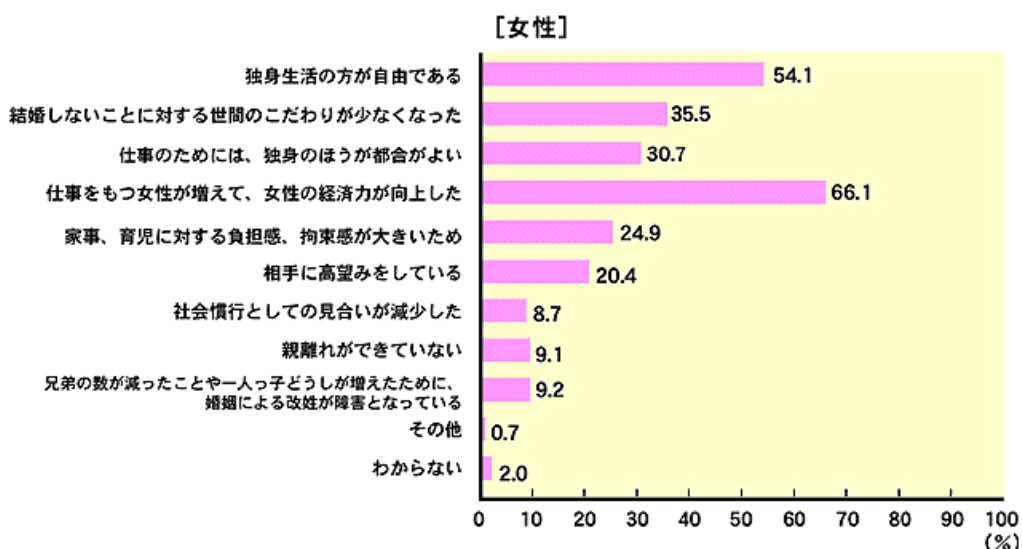
I L O 『Yearbook of Labour Statistics』(2002年) より作成

上のグラフを参考にすると、就業者の割合は他国とあまり差はないが、管理的職業に就いている女性の割合は日本と韓国がとても低いことが分かる。

結婚後育児に追われ働きにくい環境、そして女性を重役に置かない会社の方針などが原因で同じ職場で長く働けず、管理的地位に立つ機会も減ってきているのではないだろうか。

自分の国の社会情勢や状況だけでなく他国の状況知ること自分の将来のあり方、方向性が見えてくるのではないだろうか。是非参考にして欲しいと願う。

## 女性が結婚しない理由



資料：男女共同参画社会に関する世論調査（平成13年9月）総理府広報室

## 女性の晩婚化～負け犬現象について考える～

### 1. 『負け犬の遠吠え』とは

『負け犬の遠吠え』は発売以来売り上げが30万部を越し、大ベストセラーとなっている。

「負け犬」という言葉は『負け犬の遠吠え』の発売以来テレビ番組や雑誌などで頻繁に使われるようになり、今や現代女性を象徴する形容詞の一つとしてマスメディアの間で定番化している。この「負け犬」という言葉は昨年の流行語大賞のトップテンにも選ばれた。

「負け犬」は私たちの日常会話の中にすっかり浸透している。YAHOOで「負け犬」というキーワードで検索をしたところ、なんと494662件もの検索結果が出たことが証左である。

著者の酒井順子氏によると

「負け犬とは・・・狭義には『未婚・子ナシ・30代以上の女性』の事を指します。この中で最も重要視されるのは『現在結婚していない』という条件です。」

ということなので晩婚化している女性はまさに負け犬である。

私はマスメディアや友人との会話などを通してこの言葉を聞き、「負け犬」という言葉に対してとてもネガティブなイメージを抱いていた。経済的にも精神的にも自立した生き方をしている女性たちを「負け犬」と命名するのは女性を不当に扱っているように思えたからだ。『Yomiuri Weekly』という雑誌で負け犬ブームに対してどんなイメージを抱くかという女性対象のアンケートを行った結果、「負け犬」という言葉に対して多くの女性が不快感・反論を持っていることが分かった。

しかし今回晩婚化について考えるために著書を読んでみて、実はこの言葉は自ら「負け

犬」を自負する酒井順子さんが戦略的に使っていた言葉だったのだと気づいた。

「既婚子持ち女に勝とうなどと思わず、とりあえず『負けました〜』と自らの弱さを認めた犬のように、おなかを見せておいたほうが、生きやすいのではなかろうか」

これが酒井さんの考え方だ。

酒井さんは「勝ち犬」つまり普通の家庭を持っている女性に対して本当に負けたと思ってこの言葉を使っているのではない。未婚女性と既婚女性の間の、あるいはキャリアウーマンと主婦との間の対立は不毛なものだとし、この対立に終止符を打とうとして酒井さんはあえて「負け犬」という言葉を使ったのではないだろうか。

## 2. 「負け犬」という価値観

なんだかんだ言って結婚していないと『負け』とみなされるのはなぜなのか？その背景には30歳以上の女性にとって生きにくい今の日本社会の現実がある。昨年10月、同書が第4回「婦人公論文芸賞」を受賞した際、酒井氏は執筆の動機について

『私たちはこれでいいのだ』と強がりつつ日々を過ごす負け犬の存在感、負け犬を取り囲む世間の態度に感じていた何ともいえない気持ちの悪さを突き止めたかった。何だかんだ言ったところで、結婚していないと『負け』とみなされるのはなぜなのか、というところを考えてみたかった。』と記している。

### ① 「負け犬」と反対に賞賛される「おひとりさま文化」

「負け犬」という言葉がマスメディアに多く登場するようになったのと同時に「おひとりさま」という言葉も女性雑誌や女性向けのグルメ本、情報誌などによく登場するようになってきた。

「おひとりさま」とは女性が一人でカフェやレストラン、バーなどの飲食店に出かけたり、旅行に行くなどの行為のことを指す。こちらもYAHOOの検索にかけてみたところ19382件と「負け犬」には到底及ばないもののかかなり多くの検索結果が出てきた。

「おひとりさま」はカッコいい大人の女性の行為として取り扱われる傾向にある。なぜおひとりさまをする女性が「負け犬」とは線を逸してカッコいい女性として扱われるのだろうか？それは女性側の「負け犬現象」への反論なのだろうか？それともマスメディアや飲食産業や観光産業側に女性をターゲットとした市場を開発したいという目的があるからだろうか。ラーメンやビジネスホテルなどの男性向けの市場は開発されつくした観があるので、新たに女性向けの繊細な味付けや盛り付け、健康面を考えた料理を出してくれるお店や雰囲気のいいレストラン、安全面の強化された旅行プランなどがビジネスチャンスとしてとらえる動きは確かに存在するような気がする。その点については4の結果・考察のグループ活動のところでももう少し詳しく論じたいと思う。

### ② 「負け犬」よさようなら、フランス流独身謳歌術、「セリベルテ」

セリベルテとはフランス語の「セリバテール＝独身」「リベルテ＝自由」を合わせた造語のことだ。フランスで増え続ける「セリバテール」のために今年で連続して三年目の

展示会を開催した主催者たちによってこの造語は作られた。この展示会では独身者専用のパッケージツアーや出会い系イベントを紹介するスタンドが軒を連ねている。パリ地域圏には800万人、国内では、400万人もの独身者がいる。

フランスでは独身女性が「負け犬」として肩身の狭い思いをすることがなく自由を謳歌するソロ・ライフの文化が根付いている。

フランスは日本と違ってカップル社会が根付いている。1999年11月にPACS（市民連帯契約）という法律が新設された。婚姻ではなくパートナーとの共同生活関係を承認して、さまざまな法的保護を与えようとするものだ。例えば社会保険を持っていない人を同棲相手の保険に受給権者として申請できることや、賃貸住宅の契約書の名義人が突然亡くなった時、もう1人はそれまでと同じ条件で居住し続けてよいことなどである。

また、フランスでは国家的に非婚化に対する対策として事実婚を認めている。これが日本における独身女性に対する見方・扱い方との違いの大きな要因となっていると言えるのではないだろうか。

### 3. 「負け犬」はなぜ結婚しないのか

「負け犬」が増え続ければ、当然晩婚化は進みそれに伴い少子化も加速度を上げて進んでいく。「負け犬」にとって結婚とは何であるのか？

酒井氏は第一に、統計的に高学歴の女子と低学歴の男子が余っていることから男性が低方婚を望んでいることを挙げている。伝統的に日本の男性は学歴や収入などで女性のほうが「低」であることを望むし逆に女性は「高」な男性を望むため「負け犬」は結婚できないというわけだ。

第二にゲームやアニメ上の女子などに対してしか恋愛感情を抱かないいわゆるおたく君が男の「負け犬」として存在するからだとも言っている。

「負け犬」が結婚に対して消極的だったり仕事に熱中するあまり婚期を逃したりしているということは同書の中で何度も言われていることだが、それだけではなく結婚したくても30代後半を迎えると相手がいなくなるという問題が起きているようだ。

昨今この問題は国レベルで大きく取り上げられるようになり経済産業省は「結婚プロジェクト」に乗り出した。その方針の一つは結婚業者の適正化を図ることである。一部の業者については「望む相手と出会えない」「解約に応じてくれない」などの苦情が寄せられているので結婚情報サービスの総点検を行おうとしている。もう一つは「ライフサポート関連産業の創出」だ。キャリアの継続の難しさから結婚に踏みとどまっている女性や、自分自身のライフスタイルに合う男性と出会えないという悩みを持つ女性の人生設計の相談を行うことなどが目的である。



## 4. 結論・考察

### ① 発表後の反応～ユン先生と菅先生のコメント～

私たちの発表の後にユン先生と菅先生がとても重要なコメントをしてくださった。ユン先生は

「負け犬という言葉は韓国にもあるのだろうか。日本で以前使われていたハイミスという言葉は韓国では使われていない。韓国には30過ぎた未婚を指す「老処女」という言葉はあるが「負け」と言う意味は含まれていないで「負け犬」とは少し違う。」

という内容のコメントをしてくださった。この報告書では省力されているが韓国にも負け犬に相当する言葉はあるのではないかという考察があったのでそれに対して訂正をしていただいたのだ。菅先生は

「男性には「負け犬」にあてはまる言葉がないのは何故だろう。晩婚化、少子化問題など、女性にその責任を負わせるような社会の雰囲気を感じられるのは気のせいだろうか。」

という内容のコメントをしてくださった。この点についてはグループの話し合いにおいても意見が出ておらず盲点であった。ということは、男性だけではなく、女性の間でも晩婚化・少子化の責任を女性に負わせる考え方は根付いているということではないだろうか。

### ② グループ活動の調査結果

グループ活動では主におひとりさま現象の実状について調査してみることにした。OLが多い街の代表である銀座を歩いてみると、まず大手化粧品メーカーであるファンケルの大きなビルが目に入った。中に入ってみるとレストランやデリ、カフェ、エステ、サロンなどがあってどのフロアも大変美しい内装でありまるで女性にとっての都会の疲れを忘れさせるオアシスのようであった。ここにはおひとりさまの女性も数多く来店するはずだと思いファンケルの広報担当者へおひとりさまのお客様に対してどのような工夫をしているのか、インタビューを試みた。すると以下の三点において工夫をし心にかけているとのことだった。

- |   |
|---|
| I おひとりさまの女性でも入りやすい入り口の雰囲気を作るように努力している。              |
| II 一人で来ても商品を手に取りやすいように工夫していること。                     |
| III お客様がに入った瞬間には近づかないで、お客様が何かを探している瞬間をキャッチして話かけること。 |

ファンケルの担当者の方は突撃インタビューに親切に答えてくださったがアポイントメントがないとお店に入ってインタビューすることが難しいので、次に、メンバーが行ったことのある、おひとりさまの多いBAR（店名：ラヂオホール）の店長にEメールで、おひとりさまに対しての工夫について聞いたみた。返信していただいた内容をまとめると以下の通りであった。

- I 居心地をよくするための工夫としてカウンター席に案内して手の空いているスタッフが積極的に話しかける。
- II 他に一人で来ている女性がいればうまくくっつける。
- III 名前を聞いて積極的に名前で話しかける。
- IV 変にかしこまらない。
- V 料理をハーフサイズにする、メニューにないカクテルを作るなどワガママオーダーに喜んで対応する。

またメンバーがアルバイトをしているAFTERNOONTEA TEAROOMでは

- I おひとりでも座りやすい席の配置、目線の配置など工夫する。(窓側、壁側など)
- II 料理の中の苦手な材料を抜いたり、増やしたりわがままを言えるようにする。  
(ダイエットのために油を減らしたり、野菜の量を増やしたりする。)

などの工夫をしているとのことだった。

グループ活動の結果を総括すると、日本では確実におひとりさまをターゲットとした産業が成長していること、お店側もおひとりさまの需要に答えて様々な工夫をしていることが分かった。おひとりさまの女性が全て負け犬の条件に当てはまるかというと、必ずしもそうではないだろう。しかしおひとりさまの入りやすい店が増えるということは結果的に負け犬の居心地のよいお店が増えるということだといえる。たとえ負け犬として世間から冷たい目で見られても、これからもっともっと負け犬の生活は快適なものになっていくだろう。この相反する現象の中で、最終的には私達女性ひとりひとりがどんな価値観を持ってどんな選択をして生きていくのが晩婚化と女性の仕事のありかたを考えていくポイントになるのだろうと思った。



# イヴの進化 ～韓国的女性観の変化について～

蔡	ハウ
蔡	恩 惠
李	敏 姫
鄭	妍 珠

## 1. はじめに

最近韓国でも、日本でも女性の社会的地位が昔に比べて非常に高くなったのが目立つ。昔は家での育児や家事だけが女性の仕事だったけれど、最近は社会のいろんなところで多くの女性が活躍している。私たちは、女子大学に通っていて、女性について高い関心を持っていて、女性の社会的地位を高めることを主張しているけれど、現代の女性については詳しく知っていないことに気づいた。それで、韓国的女性について調べて、昔の女性と比べながら現代の女性を理解し、私たちが目指す理想的な女性像を探すためこの調査を行うことにした。

## 2. 調査の方法

まず、恋愛・結婚・離婚・職業の4つのテーマを決めて、恋愛のテーマではインターネットアンケートの資料を探し、また、記念日文化などについても調べてみた。結婚と離婚のテーマでは統計庁の資料を使い、職業のテーマではテレビ番組の放送、インターネットの資料を活用してまとめてみた

## 3. 調査の結果

### 恋 愛

#### 〈理想的な男性像〉

大学女性100人にアンケートを実施した。

#### 1. どんなタイプの男性を好みますか。

1 位 ユーモア豊かで面白い男性 (64名)

2 位 賢く知的な男性 (19名)

3 位 背が高くハンサムな男性 (11名)

4 位 家が裕福で金に困っていない男性 (4名)

その他 手がきれいな男性・自分だけを愛してくれる男性

男性100人にこのアンケートの結果を予想させたところ、大体同じ結果を予想した。

その結果彼らの答えの2位が裕福な男性であったが、女性は男性が裕福かどうかより彼らの賢さやルックスを重んじていた。これは女性が経済的に男性に頼らなくなったことが反映されたのだと思う。

2. 1) 初対面の男性のどこが一番目に入りますか。

1位 特に目立ったところより全体的な雰囲気 (44名)

2位 マナー (25名)

3位 背・顔たちなどのルックス (16名)

4位 ファッション (8名)

その他 ヘアスタイル・靴・かばん・最初の挨拶

男性が女性の特定のところが気に入ったら高い点数をつけたのにくらべて女性は男性を見る時、特定のところを見ないで全体的な雰囲気を重んじることが分った。以前は女性もルックスに結構こだわっていたが、現代にはルックスのみならず複合的な観点で男性を評価するように変化した。

2) 付き合う時に何を一番重んじますか。

1位 スタイル (60名)

2位 家庭環境 (24名)

3位 性格 (11名)

4位 学閥 (4名)

その他 マナー・顔たちなど

男性に会う時のように付き合うかどうかを決める時においても女性はスタイルを優先視することがわかった。スタイルがいいと付き合うとき負担がかからないという理由を挙げた。3位の性格と答えたところは当たり前として、家庭環境や学閥が上位にランクされたということは現代の女性においてちょっと意外な結果である。

3) 付き合う時に一番気にしないところはなんですか。

1位 家庭環境や経済力 (55名)

2位 学閥や知的能力 (30名)

3位 マナーや言い方など (9名)

4位 背・見かけなどのルックス (6名)

2) の質問とは反対の質問に家庭環境・経済力・学閥などが上位にランクされたのは男性の経済的なところだけ考慮しないということを反映する。この質問でも現代の女性に男性の経済力に頼ってた過去の姿があまり残っていないことが分かる。

4) 付き合いたい男性と結婚したい男性は一致しますか。

① 一致する (26名)

② 一致しない (48名)

③ 無応答 (26名)

女性も結婚と恋愛を確実に区別していることが分かる。以前は女性がたくさんの男性と付き合い、結婚年齢になっても結婚しないと恥だと思われたが、今は返ってた

くさんの男性と付き合い、自分と一番よく合う男性と結婚するのが理想になっている。

2. の質問は女性も男性と同じく恋愛と結婚を区分けしているかを調べるためのアンケートだった。やはり、結果はちゃんと恋愛と結婚を区分けしていて自立心も昔に比べ高くなっていることが分かった。

### 〈同 棲〉

韓国において同棲はタブー視されてきた。同棲は結婚式をあげられないくらい貧乏な若者を中心に水面下で行われてきた。また同棲というと必ず結婚しないといけないものとされた。また同棲に対するタブーとなくすため進取的な若者を中心に行われてきたりもした。しかし、今は性についての認識の変化によって結婚を前提にしなく、昔より同棲に対する責任も持たなくなった。こういった同棲文化を完全に社会が受容したわけではないが、昔よりは目に見え入れられるようになった。でも、いくら受容されても、それについての責任の意識がなくなってしまうことはないように気をつけたいといけないと思う。

### 〈記念日文化〉

韓国の若者の間では恋愛の時にたくさんの記念日を決めてお互いに祝ったり慰めたりする独特の文化があるので、具体的に調べてみた。

### 〈表〉

1月14日 ダイアリーデー	好きな人にダイアリーをプレゼントする日
2月14日 バレンタインデー	女性が好きな男性にチョコレートをプレゼントする日
3月14日 ホワイトデー	男性が好きな女性にキャンディーをプレゼントする日
4月14日 ブラックデー	バレンタインデーかホワイトデーにプレゼントをもらえなかった人がジャジャンメンなどの黒い食べ物を食べる日
5月14日 ローズデー・イエローデー	イエローデーはブラックデーまで恋人ができなかった人がカレーを食べる日で、ローズデーは恋人にバラをプレゼントする日
6月14日 キスデー	恋人が一番首を長くして待つ日
7月14日 リングデー	カップルリングを買う

8月14日 ミュージックデイ	恋人同士が好きな音楽を一緒に聞く日
9月14日 フォトデイ	遠足を行って写真を撮る日
10月14日 ワインデイ	恋人同士がワインを飲む日
11月11日 ペペロデイ	ペペロをプレゼントする日
12月14日 抱擁デイ	恋人同士が抱き合う日 クリスマスのイブをどう過ごすかを計画したりする
TWO TWO DAY	付き合って22日目を祝う
100日目お祝い	付き合って100日目を祝う

## 結 婚

韓国の女性3人の中1人は結婚は義務ではないと考えている。1998年度の調査で1998年度の調査で、「結婚はしてもせずも良い」と答えた女性が28.9%だったのが2002年度の調査では34.1%となった。反面、「結婚は必ずしもするべきだ」と答えた人は、30.5%から21.9%へと下がり、結婚はもうすでに必修ではなく選択の問題だという認識が高まったと思われる。このような認識は年齢が低いほど高く、職業においては専門職に勤めている方で高く現れた。しかし、結婚をした場合、家事の分担を望む女性は35.9%だが、実際に分担を行っている家庭は8.1%だという結果から、女性の社会活動が増えたのにも関わらず、家事は女性一人ですするという認識が半分残っていることがわかる。

## 離 婚

以前は、夫婦の間に「愛」を感じれなくなったとしても、夫によるDV（Domestic Violence；家庭内暴力）があっても、自分が就きたい仕事に就けず家事しかしなくても、簡単に離婚できなかった。それは、子供のため離婚できないという考え方が強かったのと、俗語でバツイチになるとたん、周りからまるで罪人のように見られてしまって社会に適応することができなくなったからである。また「娘は出家外人」という言葉でもわかるように女性は一度結婚したらそれが最後で、もし離婚しても実家には戻れなかった。

それが恋愛観の変化と、結婚観の変化、後で触れる職業観の変化、ここでは触れていないが家族間の変化、また、離婚した女性に対する社会的な偏見の変化などが絡まって離婚率の増加の形で再現したのではないかと思われる。

また、今韓国で問題になっているの是一緒に暮らした期間が20年以上の老夫婦の離婚率が急激的に増加しているのである。こういう老夫婦の離婚を「黄昏離婚」と称す。この黄

昏離婚は、若い時には離婚したくても子育てのためいやいや結婚生活を続けてきた夫婦が、子供が大きくなり自立できた後になって離婚するという傾向が反映されたのだろう。

# 〈表〉離婚率の統計

## 〈資料 1〉 韓国の離婚率の統計

	離婚件数 (件)	離婚率 (1000人)	同居期間(%)	5～9年	10～14年	15～19年	20年以上
			0～4年				
1993	59,313	1.3	34.7	26.1	21.3	10.7	6.7
1994	65,015	1.4	33.7	25.4	21.3	11.6	7.2
1995	68,279	1.5	32.6	25.1	20.6	13.1	8.2
1996	79,895	1.7	32.1	24.6	19.6	13.8	8.9
1997	91,159	2	31	24.3	19.5	14.6	9.8
1998	116,727	2.5	29.4	23.3	19.2	15.5	12.4
1999	118,014	2.5	29.2	22.8	18.9	15.6	13.5
2000	119,982	2.5	29.3	22.3	18.7	15.3	14.3
2001	135,014	2.8	28.2	23	19	14.8	14.9
2002	145,324	3	26.9	23.2	19.4	14.7	15.7
2003	167,096	3.5	24.6	23.1	19.6	14.9	17.8
2004	139,365	2.9	25.2	22.9	18.9	14.7	18.3

## 職 業

### Contra Sexual

「CONTRA SEXUAL」はイギリスの未来学研究所によって生まれた言葉で、‘伝統的な女性像’に反する新たな2、30代の女性を表す言葉で、彼女たちは社会的にも成功して多くの金を稼ぐのを優先視し、30代前半までは結婚とか出産に関心を待たないのが特徴である。しかしCONTRA SEXUALは単純に結婚に関心がない女性ではない。自分の仕事に情熱的で実力のある女性を意味する。

### 出産率の低下

仕事に中点が置かれ、出産にあまり関心を持たなくなって今の韓国の出産率は大変低い。2004年の調査によると1.17%だそうである。

## 4. 結論／考察

女性の考え方が変わってきたと漠然と思っていたが、調査してみて女性の考え方が一人の人間としての自立を目指して変わってきたことがわかった。私たちも女性としての独立だけでなく、一人の人間としてこの社会に貢献しながら生きていく道を探さないといけないとグループのみんなは考えている。

特に私たちは職業のテーマに興味を持った。一部の女子大学生の間では卒業の後適当に就職して、良い相手に出会い結婚すればいいだろうという考え方があるが、そうじゃなくて自分の適性に合う仕事を見つけて頑張って社会を変える力を持った女性になるのがもっと理想的であろう。私たちはこういう女性を目指すことにした。



## 第4章 セミナーを終えて

### お茶大側参加者の感想 ー終了後のアンケートとインタビューからー

お茶の水女子大学国際教育センター  
非常勤講師 鈴木伸子

#### 1. はじめに

今回は、同徳女子大学との共催で行われる本セミナーの第二回かつ、日本における第一回の開催にあたる。何から何まで初めてづくしで、運営を担当した教員チームは手探りの毎日であった。国内では他に例を見ない取り組みだけに、参考にできる事例は、昨年の日韓交流セミナー以外に無い。連日のように議論を重ねて開催に漕ぎつけたものの、期間中にはいくつかの反省点や改善点が浮上し、参加者のみなさんにご不便をおかけした点もあったように思う。今回の貴重な実践を、今後さらに充実したセミナーへと還元するために、また、国際交流プログラムの開催を検討中の他学のために、参加者によるセミナー評価は不可欠と考え、各自の感想をアンケート形式にて提出してもらった。本稿は、その集計結果に、補足的に実施したインタビューによる感想を加えて総合的に考察を行うものである。

#### 2. 調査の方法

##### 2.1. アンケート

セミナー終了後、以下の通り全13項目の質問より成る自由記述のアンケートを実施した。対象者はお茶の水女子大学側よりセミナーの最終授業まで参加した35名<sup>1</sup>だが、期日までに回答の得られた人数と内訳は次の通り。1年生5名、2年生5名、3年生7名、4年生3名、研究生および日本語日本文化研究生（以下「日研生」）11名の、計31名である。

なお、アンケートを提出した学部生と研究生のうち6名は留学生で、日研生を合わせると計11名が留学生である（韓国5名、台湾4名、タイ1名、中国1名）。アンケートの内容は、コースコーディネーターの森山が作成し、佐々木と鈴木が若干の追加を加えた。

---

<sup>1</sup> 当初の履修登録者は41名。学部生のほか、単位取得の不要な研究生や日本語日本文化研究生を含む。

表組１・アンケート回答者の学年

※カッコ内は（日本人学生/留学生）の各人数

	一年生	二年生	三年生	四年生	研究生・日研生
合計	5名（4/1）	5名（4/1）	7名（6/1）	3名（3/0）	11名（1/10）

## 2.2. インタビュー

インタビューは、アンケート提出後、その記述に不明な点や興味深い点が見られた参加者11名（全体の35%）に対して筆者が個別に行った。時間は一人30分程度で、基本的にはアンケートの回答用紙を見ながら質問をしたが、「ほかに何か話したいことがあったら自由に話して下さい」という問いかけをし、自由に語ってもらった。

図版２・アンケート項目

〈日本学生〉セミナーのご感想をお聞かせください。

0. なまえ、大学・学部・学科、学年
1. 4月、5月の事前の授業についてどう思いましたか。
2. 事前にどのような準備をしましたか。
3. 事前の準備で、何か困ったことや、わからなかったことがあれば教えてください。
4. 自由時間などでどんなところに行きましたか。  
(1)お台場（27日） (2)グループ活動（30・1日） (3)放課後
5. セミナーの感想をお聞かせください。  
(1)お台場（27日） (2)歓迎会（27日） (3)講演会（28日） (4)グループ別研究発表（28・29日） (5)グループ活動（30・1日） (6)報告会（2日）
6. 同徳女子大の学生たちについてどう思いましたか。
7. グループで一緒に活動した仲間との関係はどうでしたか？（セミナーを通じて変化した点、良かった点、困った点などがあれば詳しく書いてください。）
8. セミナーを終えた今、お茶大と自分たちお茶大に学ぶ学生についてどう思いますか？
9. セミナーを通じて、韓国についてどのようなことを感じましたか。
10. セミナーの開催時期や日数、学期中の開催などについてどう思いますか。
11. 言葉、文化の問題はありませんでしたか。
12. 旅行中、病気、事故などのトラブルはありませんでしたか。
13. その他セミナーに関し、ご意見、ご希望があればお聞かせください。

### 3. 分析結果

#### 3.3. 既成概念・ウチ・ソトを『混ぜる』体験

まず、セミナーへの全体的な感想として、「楽しかった」「有意義」「良かった」「大変だったが充実していた」という肯定的な評価が全員のアンケートのどこかに記されていたことを記しておきたい。しかし、その肯定的な評価のポイントは複数に分かれる。

本学における今回のセミナーの目標は、言うまでもなく日韓交流にある。それも、マスメディアを通じた理解ではなく、個人レベルの交流によって韓国や韓国文化への理解を深めるのが狙いである。そこで、質問9「セミナーを通じて、韓国についてどのようなことを感じましたか」に対する回答のうち、韓国人留学生を除く27人分の回答を分類した。すると、〈韓国文化〉と〈韓国の若者〉という次元の異なる対象を同時に眺めての感想が多い。即ち、韓国は「日本とは違う文化」だが「若者は同じ」、或は「日本とほぼ同じ文化」だが「価値観や感性は違う」という意見である。これは、共通項に注目するか、差異に注目するか、という各人の視点の違いによるものかもしれない。さらに、「排他的で団結力の強いイメージが強かったが、個人的に理解しあうことができた」というステレオタイプの緩和に繋がった参加者（1名）や、「韓国について知らないことがまだたくさんある」ゆえに、韓国語や韓国の政治経済などを「もっと学びたい」「行ってみたい」という参加者（8名）がいた。

これから今後に繋がる感想を導いたものとして、参加者の評価が高かった二つの要素が挙げられる。一つは、シンポジウムにおける尹先生及び菅先生の素晴らしい御講演と両校のグループ発表。そしてもう一つが、同徳女子大生との出会いである。つまり、セミナーを通じて、知的好奇心を刺激されるアカデミックな側面での学びと、人間同士のふれあいの双方が体験できた、ということである。ちなみに、講演会の感想は「勉強になった」「面白かった」という声が圧倒的で、両校の発表に対しても31名中29名が「面白かった」「興味津々だった」「新鮮だった」「勉強になった」と肯定的評価を書いている。

また、全回答のうち10名の参加者が、本セミナーによって〈自分の国を新しい目で眺める〉という新しい体験ができた、と指摘しているのは特筆すべきだろう。発表準備をするうちに自文化（特に伝統文化や都内の観光名所）に対して無知な自分を実感した参加者や、同徳女子大の参加者とともに街を歩くグループ活動で彼女たちと自分たちの微妙な感性の違いを発見した参加者がいる。後者の場合、「日本人だけで歩いている時には絶対に目につかないような点に気づいたり、新しい場所を知ることができたのでとても面白かった」「（今回のセミナーを通じ）『外国人から見た日本』の視点を知った（中略）浅草に行った時に感じたことだが『かわいい』と思うものに違いがある」と感想を記している。

この体験は、日本人学生に限らない。韓国人学生を含む複数の留学生からも同様の意見が聞かれた。「日本と韓国のことを聞きながら母国のことを考えた。自分にも母国のことでわからないことがまだたくさんあると気づいた」「日本にいながら韓国の発表を聞くのは不思議な感じがしたが、新しい発見があり、以前よりさらに詳しく知ることができた」（※韓国人留学生の感想）という回答があった。つまり、日本人参加者が自文化への認識不足を

発見したものと全く同じように、留学生たちも、第二、第三の文化の存在によって自文化への認識の甘さに気づいたことがわかる。ここまでを総括すると、自文化や韓国への既成概念がセミナーでの体験によって揺さぶられ、新たに更新されたことが見て取れる。

人的交流という点でも大きな成果が見られた。同徳女子大の学生という新しい友人を得て「これからも仲良くしたい」「グループの仲間で韓国のメンバーに会いに行きたい」という感想があったことのみならず、「お茶大に新しい友だちができた」「お茶大にはいろいろな人がいると知った」「学内に留学生の友だちができて本当に良かった」という声も少なくない。計20名の学生が人的ネットワークの拡大を指摘している。同徳女子大学との「ソト」の交流のための準備活動が、お茶大内部の「ウチ」なる交流を可能にしたと言えよう。

但し、いくつか交流に関する問題点も指摘されている。「事前準備における一部の参加者の非協力的な態度がグループ内の協力体制に支障をもたらした」及び「グループ自由活動や報告会などで自分勝手な態度を取っていた参加者がいて、同徳女子大のみなさんに申し訳なかった」という声である。確かに、履修しつつも途中で参加を止めた参加者や、ごく一部の不真面目な参加者の存在は大いに問題であった。事前の説明過小のまま、履修希望者全てを引き受けてグループ活動がスタートしたため、予想外の授業内容だと感じた参加者は途中でモチベーションが下がったのかもしれない。彼女たちへの仔細な調査は実施していないため、なぜ非協力的だったかは不明だが、グループ活動が中心のセミナーだけに、今後は本当に意欲の高い参加者にのみ履修を許可する方向性が必要と思われる。

### 3.2. 参加者より指摘された運営上の問題点(1)―事前準備

最も多く指摘が寄せられた問題点は、事前準備である。特に、グループごとの自由研究やセミナー全体の内容に関する説明が漠然としていて、具体的に何をしたらいいのかがよくわからなかった、という指摘が多い。「具体的なイメージがわからないまま進めたので正直不安だらけだった」「なにをすればいいのか理解できなかった」「先生が求めていることが想像できず、どのようにしたら良いかわからなかった」「最初はどのようなセミナーなのかよくイメージが湧かず、テーマを決めづらかった」などの声が、31名中10名（32%）から寄せられた。その最大の理由として、本セミナーが先例の稀な交流プログラムだという点が挙げられよう。従って、開催中の青写真が教員チーム内でも明確に共有されていたとは言い難く、全体的に説明不足だった感は否めない。仮に、二回目以降であれば、初回開催時のビデオや報告書などを使って具体的に示すことはできたかもしれない。

とはいえ、白紙の状態から自分でなにかを考え、作り出すという意味においては、極めて優れた教育的効果があったのではないかと感じる。シンポジウムにおけるグループ発表と自由活動の報告は、当初の戸惑いを感じさせない高い水準にあるばかりか、オリジナリティと各人の個性が強く反映されており、事前に懇切丁寧なサンプルを提示していたら一体どのような結果になっていたかとさえ思う。昨今の完璧に組み立てられたプログラムやマニュアルに慣れた参加者には戸惑う体験だったと思うが、〈自ら考えるちからを育む〉という意味ではマニュアルも善し悪しである。何もないサバイバル状態が参加者の潜在的

な創意工夫や主体性を引き出したという側面は確実にあったと思う。

また、このような結果を考慮すると、今回のような国際交流プログラムの企画立案において教員側がすべてお膳立てしてしまうことには議論の余地があるかもしれない。本人達に『私たちがセミナーをつくる』という強い当事者意識があつて初めて、主体的な参加が実現する。今回も、熱心に取り組んだ学生ほど、有意義な体験をしたと答えている。さらに、「交流は強制されて行うものではない、運営そのものも授業の一環として任せてほしかった」という声まで上がっている。次回、今回の参加者をOGとして組織化し、アドバイザーとして活躍してもらう等のアイディアは一考の価値があるだろう。同時に、企画・運営における教員の関与をどの程度に設定すべきか、新たな課題も浮上したように思う。

### 3.3. 参加者より指摘された運営上の問題点(2)－開催時期・日数

開催日数に関しては概ね「ちょうど良かった」という感想が多数を占めたが、開催時期(今回は6/27～7/6)については、賛否が見事に分かれた。「ちょうど良い時期だった」「仕方がない(代わりの日程がない)」という肯定派が15名、「もっと早く」「もっと遅く」「(代案はないが)ともかく時期が悪かった」という否定派が16名である。

図版2・開催時期に関するアンケートの回答 (n=31)

※◎と△は現状維持派、その他は現状否定派

	良かった◎	仕方がない△	もっと早く	もっと遅く	夏休みに	良くない×
1 年 生	3	0	0	0	1	1
2 年 生	0	3	0	1	1	0
3 年 生	4	0	0	0	2	1
4 年 生	1	0	1	0	1	0
研究生・日研生	2	2	2	1	1	3
合 計	10	5	3	2	6	5

韓国の大学が夏休みに入った6月後半、お茶大では試験期間を目前に控えており、必修授業を簡単に休むわけにはいかない参加者は少なくなかった。また、セミナー期間に集中講義やレポート提出の締切りが重なった者もいた。そのため、「忙しくて大変だった」という感想や、「もっと参加したかったが、授業が休めなくて残念だった」という回答は非常に多い。そのため、開催時期を「時間が自由にとれる夏休みにしたほうが良い」という意見もあったが、一方で、「夏休みでは集まりが悪くなるので学期中のほうが良い」「忙しいけど試験中よりはマシ」という反対意見もあり、全員に共通する見解は得られなかった。

まさに、「あちら立てればこちらが立たず」とでも呼ぶべき結果で、いつ開催しても同じく賛否両論となることが予想される。従って、開催時期に関しては現状維持のまま6月下

旬に開催するのが最善の選択と言えよう。むしろ、問題の所在は開催時期ではなく、教員側のスケジュールに関する説明不足にあったように思う。今後は、参加者希望者には期間中に大幅なスケジュール調整が必要となることを十分に説明し、各自その調整とセミナーへの集中参加が可能な希望者のみ履修するという流れにする必要があるだろう。

## 4. 考 察

概ね高い評価を得た今回のセミナーではあったが、今後も継続し、本学を代表するプログラムとして定着して初めて真の評価が得られるように思う。そのためには、運営のノウハウを共有化し、教員の誰が担当者になっても円滑に開催できる状態を目指す必要があると考える。

そこで、当面の課題として挙げられるのが、全学への認知度アップである。今回も、本学のホームページやML、掲示板など、可能な限りの広報活動は行ったが、セミナーの認知度は低かった。事実、参加者からも「(自分の周囲は)知らない子がほとんどで残念だった」「お茶大での(国際交流の)取り組みを学生はあまり知らない」の指摘があった。現在はまだトライアルの域を出ない側面もあり、知名度の低さは無理からぬ所だが、将来的には全学を上げて同徳女子大学の一行を暖かく迎えるプログラムへと育てていく必要があるう。

最後に、本セミナーは、学内の先生方・国際・学術課・国際教育センターほか多くの方々の協力なしには開催は不可能だった。この場をお借りして深く感謝申し上げたい。

# 韓国人学生にとっての多文化交流の意義 ーセミナー参加者の感想文を通してー

お茶の水女子大学国際教育センター

非常勤講師 水 口 里 香

## 1. はじめに

昨年度（2004度）から始まった同徳女子大学（韓国）とお茶の水女子大学（日本）の交流セミナーは、今回で2回目を迎えた。前回との大きな違いは、開催地が日本であったこと、また日本人学生と韓国人学生との交流、つまり二国間の交流と言う枠を超えていたことである。韓国側は、前回、受け入れ側という立場でセミナーに参加したが、今回の参加者は受け入れられる側という立場になったこと、そして二国間交流ではなく、様々な文化圏の学生による多文化的な交流であったことによって、韓国人学生は、どのように異文化間理解を促進し、またどんなことにコンフリクトを感じたのだろうか。

本稿では、韓国側のアシスタントとしての観察と学生たちから得られた感想を通して、韓国人学生にとっての多文化交流の意義について考えてみる。

## 2. 韓国側の参加者の概要

韓国側から参加した同徳女子大学生12名の概要は以下の通りである。

学科；日本語学科…10名、国際経営学科…1名、図書館・情報学科…1名

学年；2年生…1名、3年生…6名、4年生…5名

日本滞在経験；初めて、もしくは旅行経験有り…6名、6ヶ月から1年以下の留学…2名、帰国子女（小学校を日本で過ごしたなど）…4名

彼女たちは、志望動機書と小論文（どちらも日本語で作成）及び面接によって、30名以上の中から選抜された学生たちであり、日本に対する関心が強く、日本語学習のモチベーションが高だけでなく、個性と協調性の両方を持ち合わせた学生たちである。

## 3. 活動ごとの意義

ここでは、研究発表会（セミナー1、2日目）・グループ活動（3、4日目）・グループ活動報告会（5日目）、及び日本での生活に分けて、それぞれの活動の意義を考えてみたい。

### 3-1. 研究発表会

今回のセミナーでは、「大学生活」・「食文化」・「女性」という3つの大きなテーマに関して、韓日それぞれがグループを編成し、資料集めやアンケート実施などによる事前調査と発表のためのパワーポイント作成という前回のセミナーよりも、アカデミックな研究発表の場が設けられていた。韓国側は、4名ずつのグループに分かれ、調査を進めていた。

韓国では6月20日前後から夏休みが始まる関係で、学生たちは6月初旬から中旬過ぎまで期末テストのための勉強や期末レポートの作成に取り組まなくてはならない。したがって発表準備だけでなく、全体でのミーティングに参加することさえ、大変な時期だったと思う。また発表するものを日本語に翻訳するという課題も余儀なくされていたり、日本側へのお土産を用意する際にもどんなお土産を用意すればいいのかについて戸惑っていたりしていたようである。しかしながら、参加者全員「日本側の学生たちに韓国の今を伝えたい」という気持ちで取り組んでおり、発表は練習を重ねるごとに洗練され、本番であるセミナーでの発表はとても出来がよかった。実際、学生たちの感想を見ると、いい発表ができて満足できたという感想や日本側の学生も自分たちと同じように、一生懸命準備してくれたことがうれしかったという感想、そして質疑応答の時に色々な国の学生たちと活発な意見交換ができてよかったという感想が多かった。また何よりも、この発表会によって学生たちは、第二言語である日本語で伝えたということによる自信を持てたと考えられる。もっとたくさん準備をしたかったという学生もいたが、単なる交流だけでなく、アカデミックに、お互いの文化を伝え合うという発表会を含めたセミナーは非常に意義深いものであることが、学生たちの感想から確認できた。

### 3-2. グループ活動

3、4日目は、韓国側の学生を1名と日本側の学生3、4名のグループ（計12グループ）ごとに、都内の色々なところを散策し、親睦を深めるという2日間であった。どのグループでも日本側の学生たちが主体となって、韓国の学生の行ってみたいところや是非連れて行きたいところを考慮に入れて、計画を立てていた。

韓国側の学生たちが散策したところは、以下の通りである。（括弧の中は人数。複数回答）

浅草（7）、東京大学（5）、銀座（4）、渋谷（4）、湯島天神（3）、池袋（3）、大久保のコリアンタウン（3）、上野（3）、代官山（3）、明治大学（2）、神田明神（2）、下北沢（2）、都庁（2）、江戸博物館（2）、明治神宮（1）、自由が丘（1）、原宿（1）、早稲田大学（1）、

この数字だけ見てみると、それぞれのグループが同じようなところを散策したと感ずるかもしれないが、銀座といっても、デパート見学のグループもあれば、「和菓子」をテーマにしていたグループはとらや訪問、そして「女性」をテーマにしていたグループは色々なショールーム巡りなど、グループごとに個性豊かな散策をしていたようである。



韓国側の学生たちは、「前から行ってみたかった場所に、連れて行ってくれてうれしかった」や「日本側の学生が色々と親切に教えてくれて、いい勉強になった」という日本側の学生に感謝している感想が多く、また「グループ活動によって、もっと日本側の学生との距離が縮まった」など日本側の学生とのコミュニケーションに関する感想、また「普通の観光では体験できない貴重な経験になった」など観光とは違う満足感を得られたという感想、そして「新大久保に行って、韓国の食文化を紹介できたことがうれしかった」と相互異文化体験ができたという感想もあった。

しかしながら、日本側の参加態度に対し不満を感じたという感想もあった。日本側は、期末試験直前（中には、すでに試験が始まっていた学生も）であったせいか、1日しか参加できない学生も多かったようで、2日目のグループ活動の時、初めて会った（日本側の）学生もいて戸惑ったという学生、1人の日本人学生だけが2日間ずっと付き合ってくれたが、何となくその学生に申し訳ないと思ったという学生もいた。これだけでなく、日本側の学生同士が非常に親しかったため、自分はその中に溶け込むことができず残念だったという学生もいた。韓国側の学生は、このグループ活動で日本側との深い交流を図れることを期待していたようであるが、この活動で日本側との距離を縮めることができた学生がいた反面、上述のような状況のために単なるグループ観光のようになってしまい、期待通りにならなかった学生もいたことも事実である。これもひとつの異文化間コンフリクトの経験であるかもしれないが、止むを得ない事情（授業を休めなった日本側学生など）を除き、このような場合、どのように対処すべきなのか、あきらめずに考え、行動するためのストラテジーを自らで打ち出す方法を、事前に考えさせるべきだったのかもしれないと感じた。

### 3-3. 報告会

3、4日目のグループ活動でどんなところに行き、何をしたのかに関する報告会は、5日目に行なわれた。午前中（約2時間）でパワーポイント作成などの準備を行い、報告会は午後から実施された。どのグループも、それぞれのテーマに沿った楽しくわかりやすい報告ができていて、予想以上に質の高い報告会になったと思う。そのため、「どのグループもわかりやすかった。聞いていて、勉強になった／楽しかった」や「みんなすごく熱心に準備していたので、いい時間が持てた」といったようなお互いの発表を高く評価しあう感想がほとんどであった。

しかしながら、グループ活動の感想と同じく、準備や発表の際に、日本側の学生たちに入り込めず疎外感を感じた学生もいたようである。このようなことに対しアシスタントとしてどこまで関与していいのか、私自身、戸惑ってしまったこともあった。これに対して、3-2にも書いた通り、異文化での難しい状況に対するストラテジーが必要であるだろう。

### 3-4. 日本での生活

セミナー期間中は、12名全員、お茶大の寮を利用することができた。一人部屋でさびしかったという学生もいたが、ほとんどの学生が、寮を利用できたことや寮の周辺環境や設備が期待していた以上によかったことに感謝の気持ちを表していた。また滞在中に病気やけがなどのトラブルがなく、安全に過ごせたことも、同じ寮に今回のセミナー参加者がいて、セミナー時間外も、韓国の学生たちに対し親切に接してくれたおかげであろう。今後のセミナーにおいても、寮を利用できたらいいと感じている。

## 4. 多文化交流の意義と問題点

ここでは、「日本側の参加者に、留学生がいたことについてどう思うか。」という質問に対する学生たちの反応から考えていく。この質問に対し、「国際的でいいと思う」や「色々な文化に触れることができて、よかった。」などのような肯定的な意見も出されたが、「よかった反面、困ったこともあった。」や「はじめは理解できなかったが、よかったと思う」といった中間的な意見もあり、また「やりにくかった」という意見も出された。この否定的な意見を詳しく見てみると、いろいろな国の学生がいたことに対してではなく、(自分たち以外に)韓国人の学生がいたことに対する戸惑いを感じたことがあったようである。この要因として、日本側の学生たちに、韓国の色々なことについて伝えたいという彼女たちのセミナー参加動機の一つが、思うように達成されなかったということが考えられる。

しかしながら、韓国の学生がいたおかげで、助けられたという意見を出してくれた学生たちもいたので、他の韓国人学生たちのセミナー参加を否定することは決してできない。

この問題に対しては、セミナー実施以前に日本側の韓国人学生と韓国側の学生の両者に、それぞれの参加する意義、つまり自分にできることを深く考えさせ、またこの多文化交流は、日本側の韓国人学生と韓国側の学生の交流の場でもあるということを理解させてから、セミナーに臨んでもらうということが必要なのではないだろうか。

現在のグローバル化時代を考えると、様々な文化に触れ、その中で自文化と多様な文化への気づきを促すことは非常に重要なことであるだろう。したがって、今後は上述の問題を十分に考慮した上で、多文化交流を進めることができたらいいと思う。

## 5. 日本に対する考え方の変化

今回のセミナーによって、学生たちは日本についてどのように感じるようになったのだろうか。「日本に対する考え方」の変化を問う質問に対しては、「変化無し」という感想も多少あったものの、「自分は日本について知っているほうだと思っていたが、知らないこともいっぱいあることに気づいた」や「授業で勉強したこととは違う日本を知り、より深く理解できた」というような日本に対する新たな気づきが生まれたという感想や「韓国にいるかと思うくらい、日本と韓国は似ていると思った」という自文化との比較の中で日

本に対し親近感を感じたという感想、また「理解しあえる相手」ということを認識したという感想などが主な感想であった。日本滞在歴の有無に関わらず、このような感想が出されたということは、今回のセミナーの大きな収穫であるだろう。

## 6. 今後のセミナーに向けて

韓国側のアシスタントとしての観察と学生たちから得られた感想を通して考えてみたが、このセミナーは、すべての学生に、机上の学習では得られないような異文化に対する理解や新たな気づき、そしてコンフリクトという貴重な経験を与えてくれたと強く思う。このような機会を与えてくださった先生方に心から感謝したい。

最後に、今回のセミナーを通して感じた今後の課題について考えてみたい。

今回のセミナーは、韓国側は夏休み中・日本側は期末試験直前の時期であった。ほとんどの学生が感じていた通り、両者が学期休み中などに開催されるのが理想であろう。学期休み中は学生が集まりにくいという問題点もあるが、やはり対等な立場の時期にやることで、今回の学生たちが感じた不満はかなり解消できるであろう。

第1回目のセミナーでも感じたことだが、このセミナーは、多文化交流のスタートに過ぎない。今後、彼女たち自身で、どのように交流を持続させていくか、また今回と同じようなコンフリクトを感じた際、どのように対処し、その時々で何を学ぶのだろうか。今後の学生たちを見守っていききたい。そして、また来年もこのセミナーのアシスタントとして参加したい。

## 第2回のセミナーを終えて

お茶の水女子大学国際教育センター

助教授 森 山 新

10日間に及ぶセミナーが無事終わった。第1回目は韓国・同徳女子大での開催であったため、今回は日本・お茶の水女子大での開催となった。ふりかえるといろいろな成果があったと思う。

第一に、2国間の交流から多国間の国際交流へと発展したこと。これは日本側の参加者に各国からの留学生が含まれていたため、日韓2国間の交流という側面に、多国間の交流の側面が加わったことによる。そのためセミナーでは日本の文化、韓国の文化だけではなく、中国、台湾、タイなどの文化も紹介され、国際理解教育に広がりを持つことになった。日韓という2国間では相違点が目立つところも、世界の目から見れば、日韓両文化の類似性なども見えてきて、学生たちの文化の多様性に対する視野もさらに広がったのではないであろうか。日本の学生たちも、日本の文化というものが、韓国の学生だけではなく、世界の学生の中からどのように見えるのか、ということを知るよい機会になったことと思う。

第二に、セミナーの学問的（アカデミック）な質が向上したことを挙げるべきであろう。今回のセミナーでは、同徳の尹福姫先生、お茶大の菅聡子先生の講演会が行われただけでなく、食、大学生活、女性という3つのテーマによる学生の研究発表会が行われたが、セミナー開催前から各グループに分かれて継続されてきた調査、研究をもとに研究発表が行われたため、その内容は非常にアカデミックなものとなった。そのため、今回の報告書は単なる国際交流セミナーの報告というよりは、学生たちの研究成果をまとめ、紹介するという色彩も加わった。学生たちの苦労して行った研究の成果が、この報告書の発行を通じて、少しでも多くの人に紹介されれば幸いであると思っている。

昨年は韓流ブームに湧いた一年であった。今年はいくつかの政治的問題から両国の関係に若干の試練もあったが、その中でも両国の文化交流は着実に進み、深まっていると思っている。お茶大と同徳とは昨年年第1回日韓大学生国際交流セミナーの成功をステップに、この3月に学術交流協定が締結された。両校の関係はさらに進展していくことは間違いないであろう。このセミナーが今後とも日韓、そして世界の若者が集い、交流し、国際理解の目をはぐくむ上に少しでも貢献できる場となりつづけてくれることを祈って止まない。

最後になったが、本セミナーの成功のために、さまざまなご協力をしてくださった両大学の教職員の方々に心から感謝の意を表すとともに、参加した学生たちが国際化時代の今日にあつてさらに活躍していくことを祈りたい。

## 2005年第2回日韓大学生国際交流セミナー報告書

発行年月日 2005年12月1日

発行 お茶の水女子大学国際教育センター

住所 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

電話&FAX 03-5978-5965

<http://jsl.li.ocha.ac.jp/>

発行 協力 同徳女子大学外国語学部日本語専攻

住所 〒136-714 ソウル特別市城北区月谷洞23-1

電話 02-940-4370 FAX 02-940-4191

編集 森山新（お茶の水女子大学）

印刷 よしみ工産



★第2回日韓大学生国際交流セミナー★